

長野県埋蔵文化財センター一年報10

1993

財団法人

長野県埋蔵文化財センター



信濃町日向林B遺跡出土の石斧



更埴市屋代遺跡群⑤区縄文時代中期後葉の集落



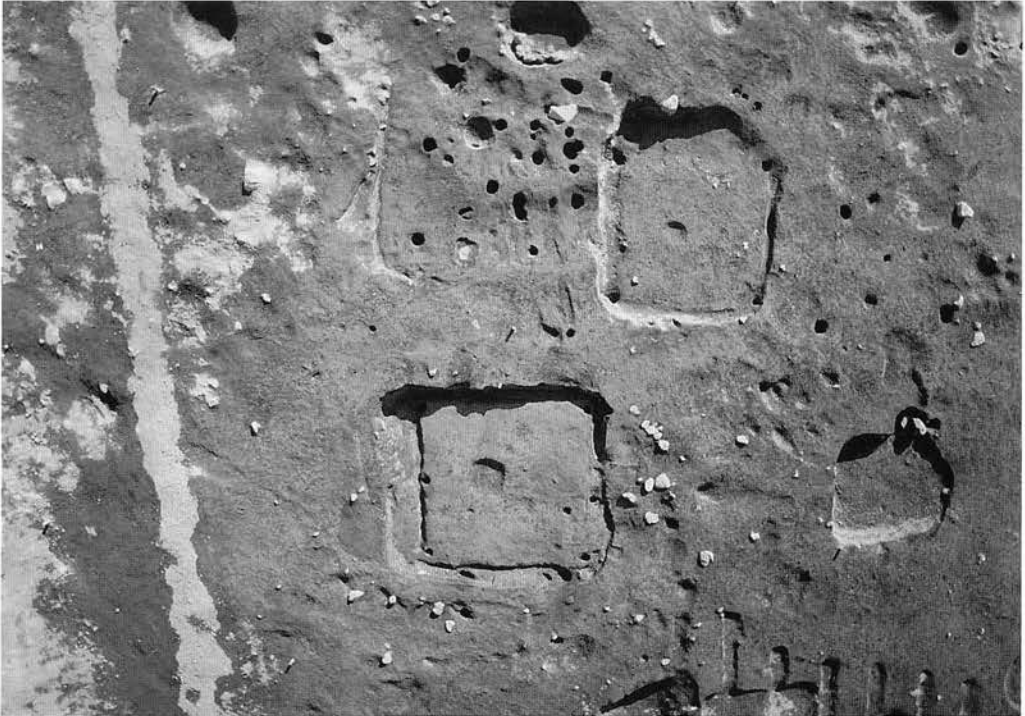
小諸市宮ノ反 A 遺跡群古墳時代末～奈良時代初頭の居館跡



軽井沢町県遺跡Ⅰ号住居跡浅間テフラ堆積状況



坂城町陣馬塚古墳玄室遺物出土状況（右奥隅）



東部町山の越遺跡中世建物跡



長野市篠ノ井遺跡群弥生時代後期墓域



長野市榎田遺跡出土
U字形鉄刃を装着する曲柄
の鋏



長野市榎田遺跡出土椅子



信濃町東裏遺跡自然流路の石器出土状態



中野市牛出古窯遺跡13号住居跡

序

財団法人長野県埋蔵文化財センターも、昭和57年発足以来、ここに12年目を迎え、毎年の事業概要を報告してきた年報も、10冊を数えることになりました。本年度は、昨年度同様に長野・佐久・上田・中野の四事務所体制で、事業に対応してまいりました。

発掘調査は、上信越自動車道関連、北陸新幹線関連を中心に、58遺跡を対象に実施しました。詳しい内容は本文に譲るとして、いくつか目だった成果を取り上げてみたいと思います。信濃町貫ノ木・日向林・東裏などの旧石器時代の遺跡群は、対象とした面積も広く、また石器類も豊富で全国的にもその成果は注目されました。更埴市屋代遺跡の地下5mより発見された縄文時代中期の集落跡は、資料の少ない善光寺平の当時期を解明するものとして期待されます。坂城町陣馬塚古墳より出土した象嵌の入れられた直刀は、県内でも類例は少なく貴重な例です。小諸市宮ノ反・佐久市芝宮遺跡などの古墳時代の集落の規模は大きく、居館的な機能をもっていたとさえ思われる内容です。整理作業では、中野市栗林・七瀬遺跡をはじめとして5冊の報告書を刊行することができ、また善光寺平の石川条里・篠ノ井・松原・榎田遺跡の整理作業も継続しております。

次に事業のもう一つの重要な柱である普及啓蒙活動も、遺跡ごとの現地説明会や速報展を通して実施しましたが、埋蔵文化財に対する関心の高まりからか、毎回多数の方々に参加していただくことができました。また、県教育委員会との共催で、第3回目にあたる市町村の担当者を対象とした発掘調査技術研修会を実施することができました。

本書は、平成5年度に実施した発掘調査・整理作業・普及公開事業等について、その概要を掲載したものです。ぜひ、ご一読いただくなかで当センターの内容をご理解いただき、事業の円滑な推進に益々ご協力下さいますようよろしくお願いいたします。

先日、リレハンメルオリンピックが盛大に行われ、その閉会式において五輪旗が長野市に手渡される光景を目にし、1998年の冬季オリンピック長野開催にむけて交通網整備の一翼を担う私達も、事業の推進に一層の努力を傾ける決意を新たにします。

また最後になりましたが、日頃当センターの発掘調査をはじめとした諸事業に、ご協力、ご支援を賜っております関係各位に対し、厚くお礼申し上げますとともに、今後の変わらぬご指導とご支援をお願いいたします次第です。

平成6年3月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤善處

目次

口絵写真 カラー

上 信濃町日向林遺跡出土の石斧

下 更埴市屋代遺跡群⑤区縄文時代中期後葉の集落（上信越自動車道関係）

モノクロ

ii 頁 上 小諸市宮ノ反遺跡群 古墳時代末～奈良時代初頭の居館跡

下 軽井沢町県遺跡1号住居跡 浅間テラフ堆積状況

iii 頁 上 坂城町陣馬塚古墳玄室遺物出土状況

下 東部町山の越遺跡中世建物跡

iv 頁 上 長野市篠ノ井遺跡群弥生時代後期墓域

下左 長野市榎田遺跡出土U字形鉄刃を装着する曲柄の鍬

下右 長野市榎田遺跡出土の椅子

v 頁 上 信濃町東裏遺跡自然流路の石器出土状況

下 中野市牛出古窯跡13号住居跡

序

目次

I 発掘調査及び整理作業の概要

1 概要……………1

(1) 発掘調査……………1

(2) 試掘調査……………3

(3) 整理作業と報告書刊行……………3

2 各調査事務所の事業……………4

(1) 佐久調査事務所……………4

=上信越自動車道関連=

1 芝宮遺跡群……………6

2 中原遺跡群……………8

3 野火附遺跡……………10

4 前田遺跡……………11

5 宮ノ反A遺跡群……………13

6 三田原遺跡群……………16

7 岩下遺跡……………17

8 郷土遺跡……………18

=北陸新幹線関連=

9 県遺跡・県西南部遺跡……………20

10 池尻遺跡……………22

11 小田井城南部台地遺跡……………22

12 唄坂遺跡……………22

13 中金井遺跡群……………22

14 栗毛坂遺跡群……………23

15 下蟹沢遺跡……………23

16 中平・田中島遺跡……………24

17 土合遺跡……………24

(2) 上田調査事務所……………25

=上信越自動車道関連=

1 大星合遺跡……………27

2 東原地遺跡……………27

3 桜畑遺跡……………28

4 細田遺跡……………29

5 森下遺跡……………29

6 山の越遺跡……………30

7 大日ノ木遺跡……………32

8 七ツ塚遺跡……………33

9 染谷台条里遺跡……………33

10 陣馬塚古墳	34	2) 整理作業の概要	64
11 宮平遺跡	35	整理作業の内容・報告書刊行	
12 山崎北遺跡	36	(4) 中野調査事務所	65
13 山崎古墳・山崎遺跡	37	= 上信越自動車道関連 =	
14 東平古墳群	37	1 牛出古窯遺跡	67
15 小山製鉄遺跡	39	2 普光田遺跡	70
= 上信越自動車道関連 試掘調査 =		3 七ツ栗遺跡	71
16 下平遺跡	40	4 日向林B遺跡	73
17 中田遺跡	40	5 東裏遺跡	77
= 北陸自動車道関連 =		6 貫ノ木遺跡	81
18 国分寺周辺遺跡群	41	= 県道小布施村山停車場線関連 =	
19 上田城跡	41	7 飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡	83
20 弥勒堂遺跡	41	整理作業・報告書刊行	83
(3) 長野調査事務所	42	= 上信越自動車道関連 試掘調査 =	
1) 発掘調査の概要	42	牛出・針ノ木・東裏・貫ノ木・星光	
= 上信越自動車道関連 =		山荘各遺跡	84
1 大穴遺跡	44		
2 更埴条里遺跡	46	II 普及公開活動の概要	
3 屋代遺跡群・大境遺跡	48	1 現地説明会・速報展など	85
4 窪河原遺跡	52	2 指導・研究会・学習会	91
= 北陸新幹線関連 =		3 刊行物	91
5 更埴条里遺跡	53		
6 屋代遺跡群	53	III 機構・事業の概要	
7 篠ノ井遺跡群	55	1 機構	92
8 篠ノ井～川中島間	58	2 事業	92
9 浅川扇状地遺跡群	60	平成5年度の役員及び職員	99
10 三才遺跡	62		

1 発掘調査及び整理作業の概要

1. 概要

平成5年度は、発掘調査が前年度から継続している上信越自動車道関連・北陸新幹線関連・オリンピックに関連した県道関係を実施した。整理作業は、すでに本年度調査を終了した遺跡のほか、長野自動車道・上信越自動車道、県道関係分を行った。詳細は事務所ごとに報告し、概要を以下の一覧表に示す。

(1) 発掘調査

上信越自動車道関連

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面積	調査面積	調査期間	調査員数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	本年度以降調査面積	調査事務所
佐久市	芝首	15,000㎡	5,500㎡ 市 245	1	5,745㎡	4.5～11.11	4	6年度継続調査	古墳時代後期～平安時代：住居跡85、建物跡36、大溝1、土坑400	古墳時代後期～平安時代の土器 金属製品、銭貨 (相模開塚、神功開寶) 動物骨、玉類	1,500	佐久
小諸市	中原	11,000	5,000	1	5,000	4.5～9.10	6	調査終了	古墳時代後期～平安時代：住居跡10、建物跡70、土坑850	古墳時代後期～平安時代の土器 金属製品、動物骨、玉類、鉄鏝	0	佐久
小諸市	野火附	4,500	4,500	1	4,500	6.25～8.26 11.5～11.12 12.11～12.22	3	調査終了	古墳時代前期～後期：住居跡20、建物跡5、土坑8	古墳時代前期～後期の土器 コモ織み石	0	佐久
佐久市	前田	2,000	2,000	1	2,000	5.6～7.6	1	調査終了	古墳時代後期～平安時代：住居跡7、建物跡5	古墳時代後期～平安時代の土器 刀子	0	佐久
小諸市	百ノ反A	10,000	10,000	1	10,000	9.1～1.6	7	調査終了	縄文時代：土坑1、竈穴2 古墳時代後期～平安時代：住居跡110、建物跡81、溝8、居館 中世：建物跡20、溝4、相列多数、居館	古墳時代後期～平安時代前期の土器 中世の内耳輪、かわらけ、陶磁器 金属製品	0	佐久
小諸市	三田原	8,000	1,000	1	1,000	10.7～12.14	4	調査終了	縄文時代中期～後期：住居跡14、土坑195 (内、柄鏡形甕石住居跡4)	縄文時代中期～後期の土器、石器	0	佐久
小諸市	岩下	11,000	1,000	1	1,000	4.5～4.9	1	調査終了	なし	なし	0	佐久
小諸市	膝土	8,000	4,000	1	4,000	4.5～9.10	4	6年度継続調査	縄文時代：住居跡31、(前期4、中期27) 土坑159	縄文時代前期～後期の土器、石器、 石製品、土偶	2,500	佐久
東部町	大星合	1,000	1,000	1	1,000	4.12～4.16	3	調査終了				上田
東部町	東原地	1,800	1,000	1	1,000	4.5～4.12	3	6年度継続調査		縄文・平安時代の土器	800	上田
東部町	萩畑	5,000	3,800	1	3,800	8.5～11.12	3	6年度継続調査	縄文・古墳～中世時代の集落跡 竈穴住居跡16(縄文、古墳、奈良・平安、中世) 土坑150、溝2	縄文・古墳～中世の土器 古銭、鉄器、つば	1,600	上田
東部町	細田	29,000	28,000	1	28,000	9.6～12.17	4	6年度継続調査	縄文・古墳～平安時代の集落跡 竈穴住居跡29(縄文、古墳、平安) 土坑60、独立柱建物跡2、溝2	縄文・古墳～中世の土器	1,000	上田
東部町	森下	45,000	10,200	1	10,200	11.8～12.17	2	6年度継続調査	確認遺構 竈穴住居跡3 土坑6	縄文・平安時代の土器	34,800 (コウデン 24,300) (3ヶ7 10,500)	上田
東部町	山の越	14,000	12,300	1	12,300 (3ヶ7 426)	4.5～8.20 11.10～12.17	3	6年度継続調査	縄文・古墳～中世時代の集落跡 竈穴住居跡50(縄文、古墳、平安、中世) 独立柱建物跡3、溝3 土坑400(縄文前期、後期、中世)	縄文・古墳～中世の土器 古銭、鉄器、骨	1,700	上田
上田市	大日ノ木	9,500	3,000	1	3,000	4.5～7.16	3	6年度継続調査	弥生後期～古墳～平安時代の集落跡 竈穴住居跡11(弥生後期、古墳、奈良、平安) 独立柱建物跡1 土坑37、焼土跡5、遺物を包含する流路2	縄文(晩期主体)時代の土器 弥生後期～古墳～平安時代の土器	6,500	上田
上田市	七ツ坂古墳	8,000	1,500	1	1,500	11.1～12.10	3	調査終了				上田
上田市	陣馬塚古墳	3,000	3,000	1	3,300	5.6～7.16	3	調査終了	古墳時代後期の円墳1(7C前半) (横穴式石室)	土器：平瓶、埴輪、長須壺など 鉄器：直刀、短刀、鉄鏝、刀子など 装身具：耳環、管玉、勾玉、白玉、丸玉、切子玉など		上田
上田市	陸谷台茶屋	12,000	2,900	1	2,900	4.26～5.21 11.15～12.10	3	6年度継続調査	水田面1(水田土壌確認)	奈良・平安時代の土器	3,000	上田
上田市	宮平	13,000	2,700一部3	2,700	2,700	8.18～11.16	3	6年度継続調査	古墳～中世の集落跡 竈穴住居跡23(古墳、平安～中世) 土坑56、鍛冶炉(古代)3、古代流路1	古墳時代～中世の土器 古銭、骨、布目瓦、青磁	10,300	上田
上田市	熱泉寺古墳	300	300	1	0			調査対象外				上田
更埴市	大穴	8,000	8,000	1	8,000	4.8～7.29	4	調査終了	終末期古墳6 弥生～平安時代集落跡 竈穴住居跡30、独立柱建物跡2、溝2、土坑5	縄文時代埴形土器・有舌尖頭器 弥生時代兼林式土器・石包丁 古墳時代埴輪・耳環・鉄鏝・須恵器 平安時代土器	0	長野
更埴市	更埴茶屋	70,000	10,400	6～9	62,400	4.8～9.14	6	調査終了	縄文～弥生時代散布地 焼土跡11、遺物集中2 平安時代集落跡・水田跡 茶屋水田跡1面、竈穴住居跡44、独立柱建物跡6 溝47、土坑430	縄文時代晩期土器 弥生時代中期土器・石包丁 平安時代土器・緑釉陶器・銅印・鉄鏝	0	長野

更埴市	屋代	46,000	13,250	6	79,000	4.8~12.24	16	6年度 継続調査	縄文時代集落跡 聖穴住居・柄形彩石住居・周濠をもつ住居50、 掘立柱建物跡5、土坑500、焼土跡150、 埋土、墓坑、燗列 弥生~平安時代集落跡 聖穴住居跡200、掘立柱建物跡10、溝230、 土坑1,000 古墳時代・平安時代水田跡各1面	縄文時代土器（五須ヶ石1・川式、加 曾E11~IV式、圧痕縹帯文土器、大 木9式他）石器、石棒、大珠、人 骨、獸骨 弥生時代~古墳時代土器 奈良~平安時代~中期土器・内面硯・ 鉄製品・銭貨・軒瓦	3,000	長野
更埴市	大埴	500	500	6	3,000	4.8~12.14		調査終了			0	長野
更埴市	窪河原	20,000	9,000	1	9,000	8.2~10.8	4	6年度 継続調査	中世墓坑・散布地 溝8、土坑32、土葬墓1、火葬墓3 火葬施設3	中世土器・陶器・磁石・硯・石臼・釘 銭貨・人骨	11,000	長野
中野市	牛出宮跡	8,500	8,500	1	8,500	4.12~7.2 11.1~12.10	3	調査終了	古墳~奈良時代集落跡、聖穴住居跡15 奈良時代竪穴1、旧石器時代ブロック3	旧石器時代後期石器 古墳時代前期土器・勾玉・管玉 奈良時代須恵器・土師器	0	中野
信濃町	春光田	1,000	1,000	1	1,000	6.24~7.2	1	調査終了	なし	縄文時代早期・前期土器・石器	0	中野
信濃町	七つ栗	5,400	1,700	1	1,700	4.19~6.18	2	6年度 継続調査	縄文時代・平安時代集落跡 聖穴住居跡2、陥穴6、集石2	縄文時代早期・前期土器・石器 平安時代土器・鉄器	3,700	中野
信濃町	日向林B	10,000	5,000	1	5,000	5.20~10.29	3	6年度 継続調査	旧石器時代・縄文時代集落跡 環状ブロック跡1、土壇1	旧石器時代後期石器 縄文時代早期土器・石器	5,000	中野
信濃町	東裏	44,000	36,000	1~2	36,000	4.19~12.10	5	6年度 継続調査	旧石器時代・縄文時代・平安時代集落跡、聖穴住居 跡5、ブロック2 石器集中出土地3	旧石器時代後期石器 縄文時代早期土器・石器 平安時代土器	8,000	中野
信濃町	貫ノ木	41,000	10,000	1~3	15,000	7.1~11.19	3	6年度 継続調査	旧石器時代集落跡 ブロック4、環跡5	平安時代後期石器 縄文時代早期土器	46,500	中野

北陸新幹線関連

所在地	道跡名	調査対象 面積	契約面積	調査面 積	調査延 面積	調査期間	調査員 数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降 調査面積	調査所
軽井沢町	県	3,100	3,100	1	3,100	11.11~12.9	2	調査終了	古墳時代前期初頭：住居跡1	縄文時代前期の土器 古墳時代前期初頭の土器	0	佐久
軽井沢町	県西南部	4,500	600	1	600	10.20~10.26	1	調査終了	なし	なし	0	佐久
御代田町	池尻	15,100	1,250	1	1,250	7.5~7.8 8.24~8.26 12.28	1	6年度 継続調査	なし	なし	2,600	佐久
御代田町	小田井城 南部台地	13,000	3,300	1	3,300	7.5~7.8 12.14~12.15	1	調査終了	なし	縄文時代後期の土器若干	0	佐久
佐久市	唄坂	900	900	2	1,800	4.9~4.15	1	調査終了	なし	弥生~平安時代の土器若干	0	佐久
佐久市	中金井	10,000	7,500	1.5	10,750	4.13~6.7 2.6~12.21	2	6年度 継続調査	古墳時代後期：住居跡3、建物跡1 平安時代：住居跡2、建物跡2	縄文時代中期の土器 古墳時代後期の土器	0	佐久
佐久市	栗毛坂	2,500	2,500	2	5,000	5.6~5.20	2	調査終了	平安時代：住居跡4、溝1	平安時代の土器	0	佐久
佐久市	下簗沢	4,300	30	1	30	6.16	1	調査終了	なし	なし	0	佐久
浅科村	中平・ 田中島	7,200	1,000	1	1,000	11.2~11.19	1	調査終了	古墳時代前期：住居跡1、土坑1 奈良~平安時代？：住居跡1	古墳~平安時代？の土器	6,200	佐久
浅科村	土合	4,200	200	1	200	4.5~4.27	1	調査終了	土合1号古墳（方墳）の墳丘と周濠の一部	古墳時代の土器	0	佐久
上田市	上田城	5,600	100	1	100	9.29~9.30	1	6年度 継続調査			4,600	上田
上田市	弥勒堂	3,700	180	1	180	12.2~12.3	1	調査終了				上田
更埴市	更埴泉里	9,500	1,100	1~2	1,650	4.2~4.16 9.20~10.7	1	6年度 継続調査	なし	平安時代土器 中世土器		長野
更埴市	屋代	13,200	3,800	1~2	5,700	4.14~12.21	3	6年度 継続調査	奈良~平安時代集落跡、水田跡 聖穴住居跡24、掘立柱建物跡4、溝18 土坑11、土坑120、墓坑2、水田跡1面	奈良~平安時代土器、磁石、紡錘車・ 土釜、刀子・獸骨 中世土器		長野
長野市	藤ノ井	7,300	2,200	2	4,400	9.15~12.21	5	6年度 継続調査	弥生~平安時代集落跡・墓地 聖穴住居跡68、掘立柱建物跡2、溝3 土坑145、円形溝溝跡16、土器箱墓3	弥生時代土器・人骨8体・ガラス小玉 古墳時代土器 平安時代土器・瓦塔・鉄製品		長野
長野市	藤ノ井~ 川中島間 (築地)	19,750 (4,600)	8,200 (200)	1	8,200 (200)	4.19~12.10 11.24~12.10	2	6年度 継続調査 (6年度継 続調査)	(平安時代~近世集落跡・散布地) 平安時代集落跡 聖穴住居跡1、井戸1、土坑3	平安時代土器・刀子・紡錘車	11,550	長野
長野市	浅川 扇状地	69,300 +	2,650 +	1~2	3,975 +	7.16~9.10	2	6年度 継続調査	近世散布地・畑跡 道路跡1、溝10、土坑1、畑跡1面	近世陶器・炭化材		長野
長野市	浅川 扇状地 + 鋼道	69,300 +	2,650 +	1~2	3,975 +	7.16~9.10	2	6年度 継続調査	古墳時代~中世集落跡 聖穴住居跡8、掘立柱建物跡9、溝55、井戸1 土坑180、礎床墓1 中世水田跡 鎌倉時代水田跡1面	弥生時代~平安時代土器・鉄製品・獸 骨 中世土器・銭貨・釘・曲物筒		長野
長野市	三才	14,000	3,700 +	1~2	5,550 +	10.18~12. 20	4	6年度 継続調査	中世・近世集落跡・墓地 掘立柱建物跡15、井戸跡6、土坑250 火葬墓25、環跡1面	中・近世土器・三脚香炉・石臼・漆桶 ・曲物、金属製品・人骨・馬歯		長野

県道小布施村山停車場線関連

所在地	道跡名	調査対象 面積	契約面積	調査面 積	調査延 面積	調査期間	調査員 数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降 調査面積	調査所
小布施町	飯田古屋敷	420	420	1	420	11.1~11.19	1	調査終了	流路跡	中・近世陶器	0	
小布施町	玄照寺跡	690	690	1	690	11.1~11.19	1	調査終了	中・近世建物跡、火葬墓、土壇10	中・近世陶器、五輪塔	0	
中野調査事務所 合計		1,110	1,110		1,110							

(2) 試掘調査

上信越自動車道関連

所在地	遺跡名	遺跡の性格	調査対象面積㎡	調査実施面積㎡	調査の状況	調査事務所
東部町	下平	散布地	5,500	524	踏査及び重機を用いたのトレンチ調査を実施したが遺構、遺物は認められない。	上田
東部町	中田	散布地	4,000	1,200	踏査及びトレンチ調査の結果、縄文時代・平安時代の住居跡、土坑等検出、所沢川左岸に立地する集落跡であることを確認。	上田
中野市	牛出	散布地	19,250	1,700	重機を用いたのトレンチ調査の結果、範囲は限定されるものの、千曲川の段丘端に立地する平安時代・古墳時代・縄文時代の文化層3面確認。	中野
信濃町	針ノ木	散布地	11,950	1,200	重機を用いたのトレンチ調査、今回の試掘範囲内には、遺構、遺物は発見されない。	中野
信濃町	東裏	散布地	10,000	1,000	平成5年度調査区の東西両端部分の試掘調査。平安時代・旧石器時代の遺物を多数検出。	中野
信濃町	貫ノ木	散布地	16,000	1,600	高速道用地内全域を重機及び人力で試掘。斜面部分は密度は低い山頂部、テラス部分は旧石器時代の遺物多数検出。	中野
信濃町	星光山荘	散布地	810	100	今回の試掘範囲内では遺構、遺物の出土はなかったが、周辺では縄文時代早期の土器片、黒曜石片の出土が確認される。	中野

(3) 整理作業と報告書刊行

	市町村	遺跡名	作業内容	備考
長野自動車道関連	坂北村	向六工・十二	報告書の印刷	センター報告書 15
	麻績村	子尾入・古司・野口	報告書の印刷	センター報告書 15
	更埴市	烏林・小坂西・地之目・一丁田	報告書の印刷	センター報告書 16
	長野市	鶴森七尋岩陰・塩崎城見山砦・赤沢城	報告書の印刷	センター報告書 16
		鶴前遺跡	報告書の印刷	センター報告書 17
		石川条里遺跡	遺物実測・図版作成、遺物分類等	
上信越自動車道関連		篠ノ井遺跡	遺物実測・図版作成、遺物分類等	
		松原遺跡	図面整理、遺物の洗浄・注記	
		川田条里遺跡	遺物実測	
		榎田遺跡	図面整理、遺物の洗浄・注記	
県道関係	美麻村	千見遺跡	遺物実測・図版作成、遺物分類等、報告書印刷	センター報告書 18
	中野市	七瀬・栗林遺跡	遺物実測・図版作成、遺物分類等、報告書印刷	センター報告書 19

2 各調査事務所の事業

(1) 佐久調査事務所

発掘調査の概況

調査区域 軽井沢町，御代田町，佐久市小田井，小諸市御影新田・平原・八満・甲地区，
浅科村塩名田・甲地区

調査遺跡数 18遺跡 60,275㎡

調査面積 上信越自動車道関係：佐久市芝宮遺跡群 (5,745㎡)・前田遺跡 (4,000㎡)，小
諸市中原遺跡群 (5,000㎡)・野火附遺跡 (4,500㎡)・宮ノ反A遺跡群 (8,000
㎡)・岩下遺跡 (1,000㎡)・三田原遺跡群 (1,000㎡)・郷土遺跡 (4,000㎡)
北陸新幹線関係：軽井沢町県遺跡 (3,100㎡)・○県西南部遺跡 (600㎡)，○御
代田町池尻遺跡 (1,250㎡)・○小田井城南部台地遺跡 (3,300㎡)，佐久市唄
坂遺跡 (1,800㎡)・中金井遺跡群 (10,750㎡)・栗毛坂遺跡群 (5,000㎡)・○
下蟹沢遺跡 (30㎡)，浅科村中平・田中島遺跡 (1,000㎡)・土合遺跡 (200㎡)
(○印試掘)

発掘調査期間 平成5年4月5日～平成6年1月6日

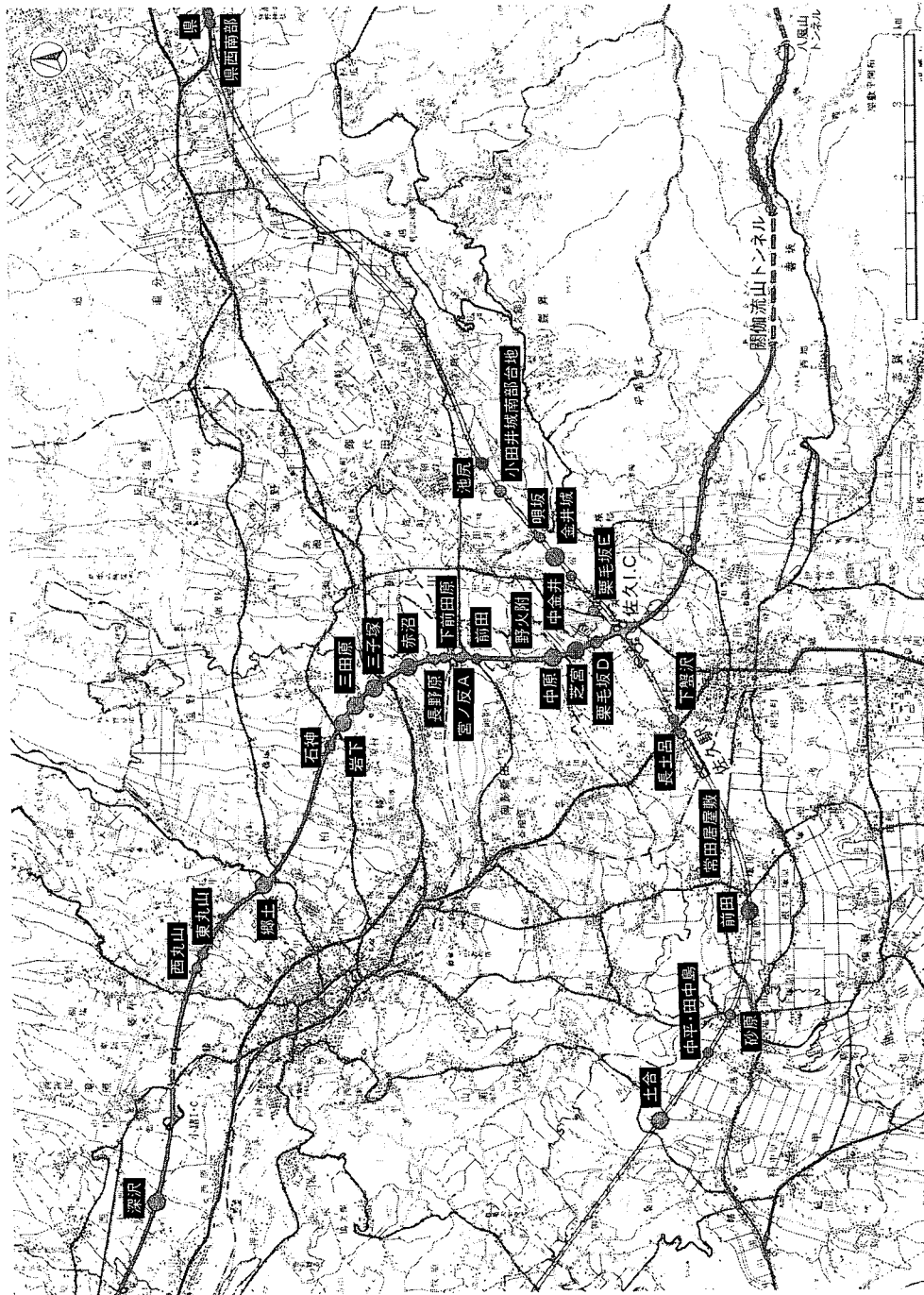
上信越自動車道関係では，昨年度から継続の5遺跡と，新たに前田遺跡群・野火附遺跡・宮ノ反A遺跡群の調査に着手した。

同一遺跡ととらえられていた芝宮・中原遺跡群では，集落の北境と東境が確認され，集落の規模をはばつかむことができ，芝宮遺跡群を南北に走る大溝は市道の南で西に曲がっていることが確認された。中原遺跡群では奈良時代の竪穴住居跡から県下最古と思われる円錐状の鉄鐮が出土し，鉄鐮研究に新たな資料を提示できた。

中原遺跡群北から信越線が走る田切り間の台地上は，佐久市・小諸市・御代田町により圃場整備にかかる発掘調査が広大な範囲で行われており，鑄師屋遺跡群・野火付遺跡等いくつかの大集落群が検出されているが，その北に位置する宮ノ反A遺跡群からは既発掘の集落と同時期の集落が検出され，さらに，田切を北に背負い，東西65m（推定）南北60mの範囲を幅約2m，深さ1mの溝で区画し，中に3×6間の掘立柱建物跡2棟に，2×3間の掘立柱建物跡が付属する居館跡が発見された。時期は古墳時代後半から奈良時代にかけてのものとして推定されることから，該期では県下初の例となり，居館跡の構造と集落のあり方やその変遷を知る上で貴重な事実を提供できた。

郷土遺跡では全調査区を発掘できず一部来年度に継続されるが，多量の土器が検出された44号住居跡，石棒が立てられた石囲炉と大型土器や伏甕が北側に集中する祭祀的要素の強い24号住居跡，多量の土器とともに土偶・土鈴等の遺物も検出され，中心部の発掘となる来年度の調査が期待される。

北陸新幹線関係では6遺跡の調査と4遺跡の試掘調査を行った。いずれも遺構・遺物は少なく，試掘調査では本調査を必要とする遺跡はなかった。その中で，軽井沢町県遺跡から1軒ではあるが古墳時代初頭の竪穴住居跡が検出された。埋土上部には浅間Bテフラが15cmの厚さで堆積しており，北陸・関東系の土器と在地土器の混在，昭和51年輕井沢町によって南約50mの地点で発掘された2軒の同時期住居跡を含めた小集落の存在等興味深い問題を提起している。



地図1 佐久調査事務所関係調査遺跡 (1 : 100,000)

上信越自動車道関連

1 しばみや 芝宮遺跡群

所在地：佐久市大字小田井字下曾根35番地ほか

調査担当者：藤原直人・田村彬

調査期間：平成5年4月5日～11月11日

白鳥喜一郎・上沼由彦

調査面積：5,745㎡

遺跡の立地：浅間山麓南斜面末端部の田切りに挟まれた台地上

時代と時期：古墳時代後期～平安時代

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	溝
古墳後期	85	36	400	1
奈良・平安				

土器：古墳時代後期～平安時代の土師器・須恵器・
灰釉陶器

石製品：管玉・勾玉・白玉・なつめ玉・丸子玉・紡錘
車・磨石・凹石・コモ編み石・砥石・石鏃

金属製品：鉄鏃・刀子・鋤先・鎌・鋏・金環・馬具・帯金具・銭貨（和同開珎・神功開寶）

その他：獣骨・羽口・鉄滓

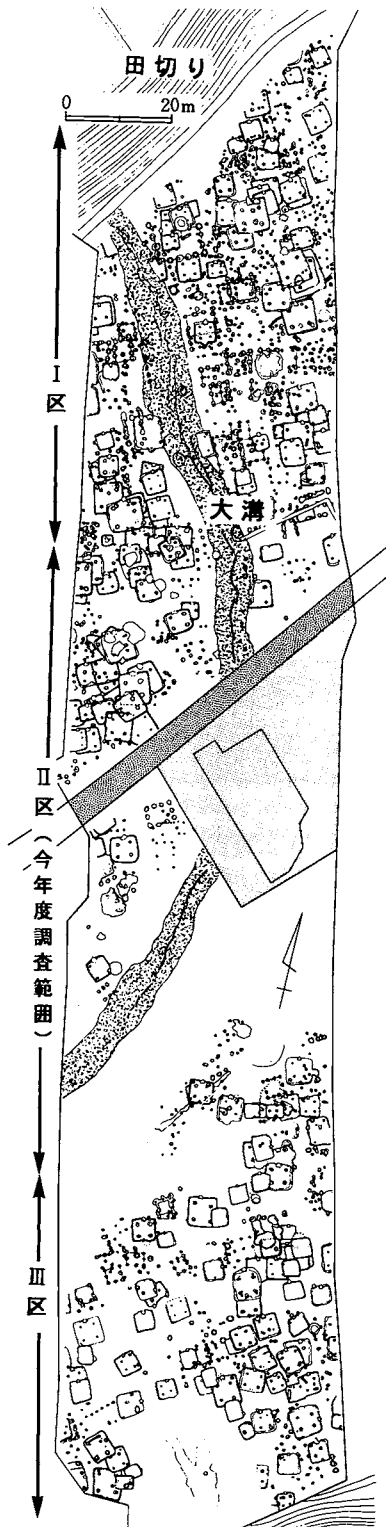
芝宮遺跡群は佐久市の北部、浅間山麓南斜面の末端部にあり、田切り地形の台地上、標高745～749mに位置する。遺跡の南東は、浅間火山の裾野、標高約1,000m付近から発し田切りを形成しながら流下する濁川（比高差約12m）に接する。その対岸には長土呂遺跡群（平成2年度、当センターより調査完了）が広がる。北西には深い田切り（比高差約12m）を隔てて中原遺跡群（当センターより平成5年度調査完了）がある。

調査対象総面積は15,990㎡、昨年度は8,745㎡を調査し、今年度は5,745㎡を調査した。残り1,500㎡については来年度調査の予定である。

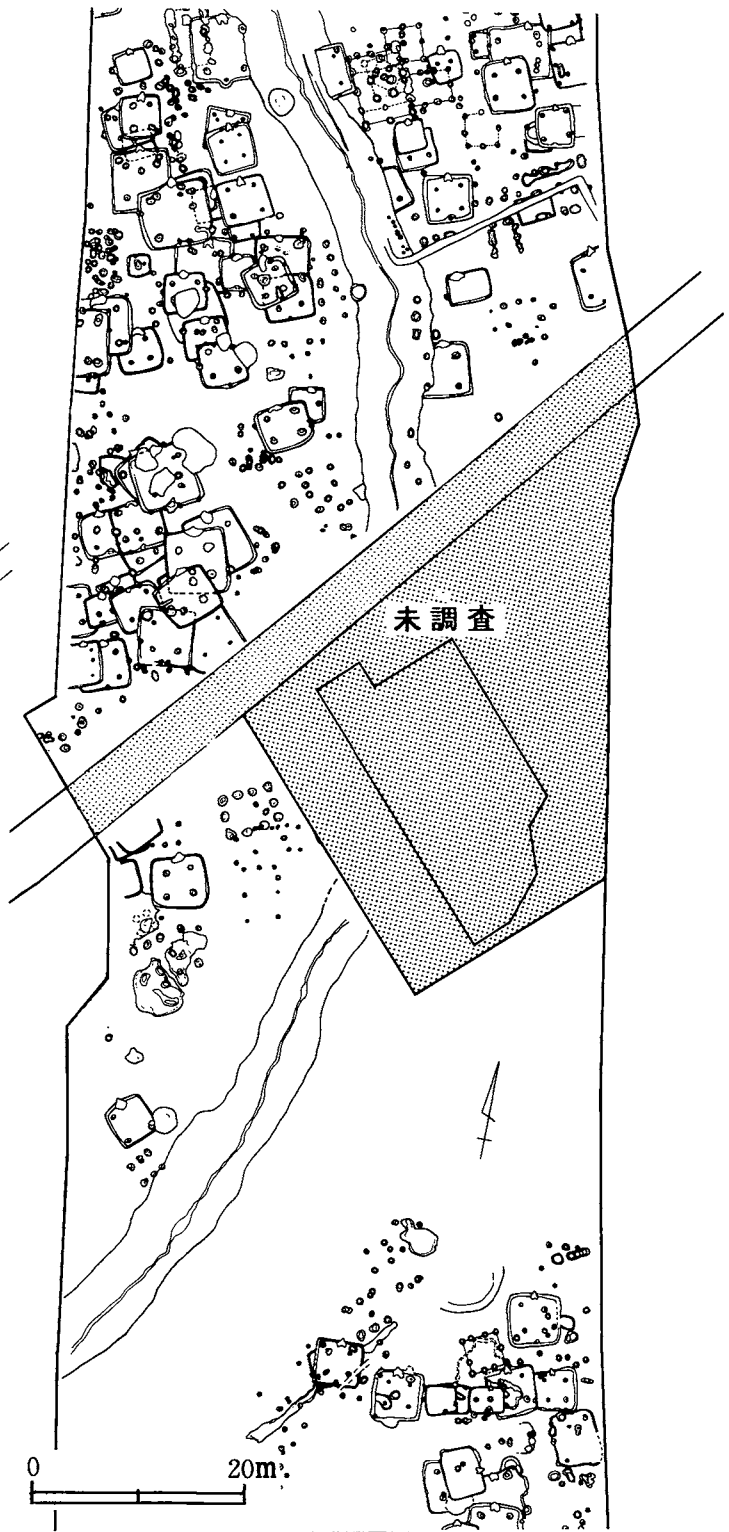
大溝は調査区の北端（中原遺跡群との間にある田切りに削り取られるような形）から始まり、南北に伸びる調査区のほぼ中央を南下し、市道付近からやや西に折れはじめ緩やかな曲線を描いて調査区外に続く。昨年度から二年間にわたって調査を行い、一部未調査ではあるが溝の概要をつかむことができた。平面の状況から直線的な区画といった意図は認められないが、遺跡自体の規模・密度を考えると防御性というよりも何らかの隔絶を考えるべきであろうか。断面形はV字を呈し底部には流水による浸食の痕跡が認められる。また埋没過程の中で二面ほどの硬化面を観察できたが、全域にわたってはいない。埋没途中での溝の再利用あるいは二次利用を考えることができる。

鉄製品は刀子・鏃・釘・鎌・鋤先・針・馬具など300数点（昨年度を含む）出土していることから鉄製品の製作にかかわる遺構の存在が考えられたが、確認はできなかった。しかしSB50・SB102からは多量の鉄滓が、SB30からは鉄滓と4個の羽口、金床石（？）が出土したが、鍛冶炉・鍛造剥片（スケール）また焼土・炭化物等は認められなかった。

II区の遺構分布はI・III区の状況とはやや趣を異にして、大溝の南側で希薄な区域を確認できた。集落域とのかかわりであろうか、今後の課題となろう。



第1図 芝宮遺跡全体図(約1:1,400)



第2図 II区遺構配置図(約1:700)

2 ^{なかはら} 中原遺跡群

所在地：小諸市大字御影新田字中原75番地ほか

調査期間：平成5年4月5日～9月10日

調査面積：5,000㎡

調査担当者：近藤尚義・尾台 昇・五十嵐敏秀

飯田吉隆・山岡英一・征矢野安政

遺跡の立地：浅間山麓南斜面末端部の平坦な台地

遺跡の時期・特徴：古墳時代後期～平安時代の集落

主な検出遺構：竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡約70棟

土坑（柱穴？）約850基・粘土採掘跡3箇所

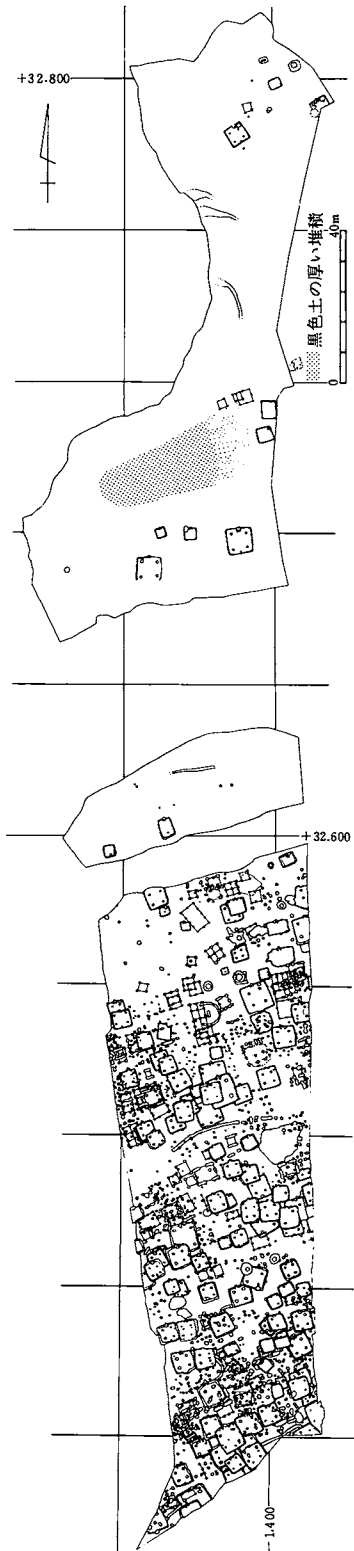
主な出土遺物：古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器

勾玉・白玉・紡錘車・銭・金属器（鉄鏝ほか）

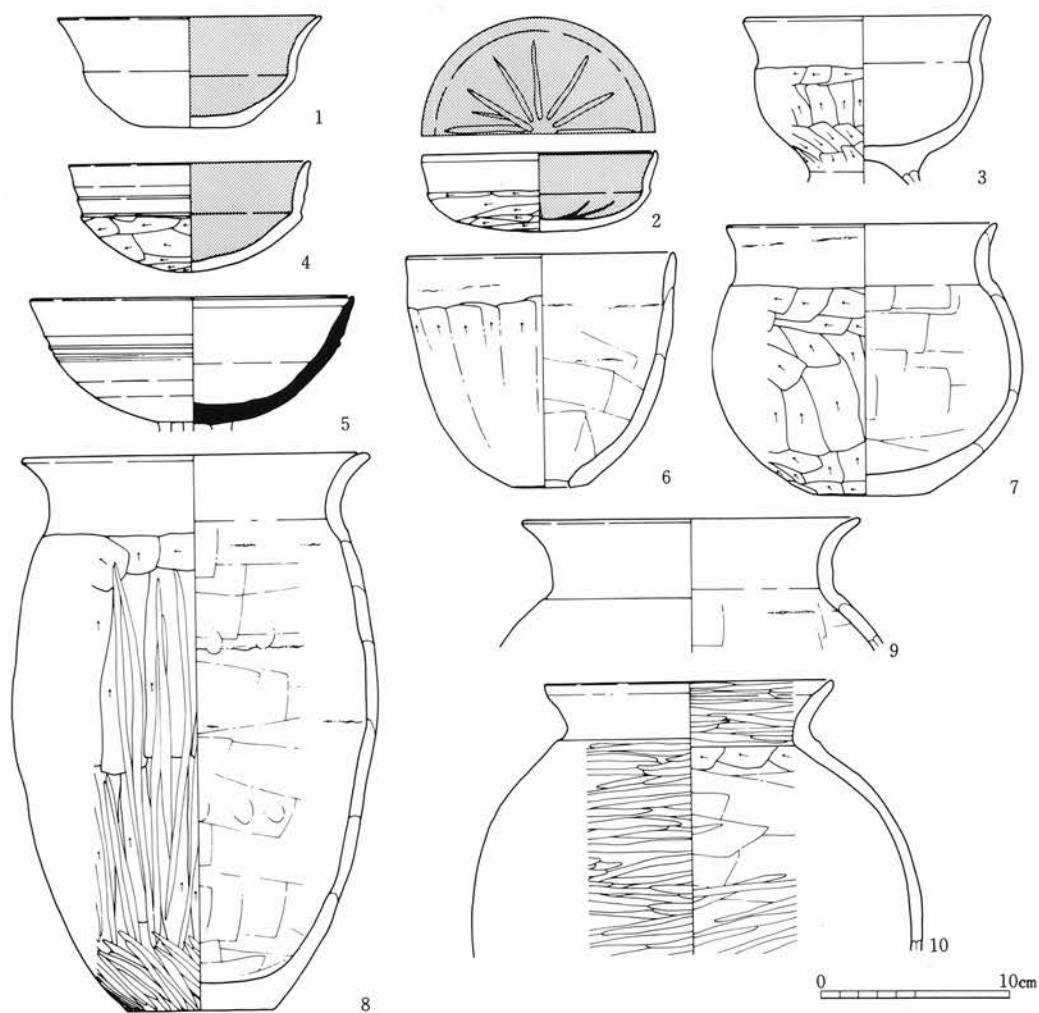
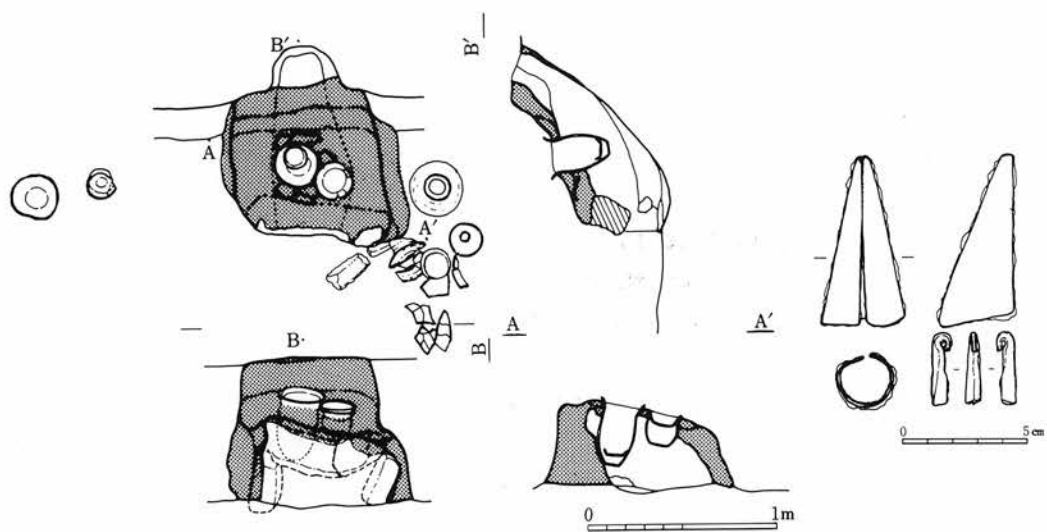
中原遺跡群の調査は今年度で2年目に入り、1・2区の調査の残りとお規模な田切りを経て北に位置する3・4区の調査を実施した。昨年度調査した2区の北側では、遺構の重複や密度が希薄になることがわかった。本年度さらに北側部分を調査した結果、古墳時代後期～平安時代初頭の住居が5,000㎡に12軒とさらに希薄な分布状況となり、南の芝宮遺跡群周辺から続く集落が、本遺跡群の調査区北側で途切れることが明瞭になった。したがって、北に分布する鑄師屋遺跡群とは別の集落グループの可能性も生じ、今後の広域にわたる集落分析の一資料を提示できたといえよう。

第4図は2区発見の2.5㎡ほどの小さな竪穴住居跡からの一括遺物と、同住居跡に造り付けられ、ほぼ使用時の状況のまま良好に検出されたカマドである。形態は「東日本型」といわれる「2つ掛け並び」の構造を呈する。遺物は同図5の長脚2段透かしの高坏が6C後半～7C前半の古墳時代後期後半の前葉に属するほかは、同図1～4・6～10が古墳時代後期後半に所属する。

在地の土器のほかは、相対に群馬県産のものが顕著で、佐久の地域的様相を色濃くみせている。遺物からみた現時点での遺構の所属時期をみると、古墳時代後期後半から集落が営まれ、その後平安時代前半の9C代にかけて幾度となく建て替えを行いながら集落を存続させたと推定される。



第3図 中原遺跡群全体図
(1:2,000)



第4図 中原遺跡群112号住居跡カマド (1:40)・出土土器 (1:4)・4号住居跡鉄鐸 (1:3)

3 のびつけ 野火附遺跡

所在地：小諸市大字御影新田字野火附376番地ほか

調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成5年6月25日～8月26日、11月5日～11月12日、12月11日～12月22日

調査面積：4,500㎡

遺跡の立地：浅間山麓南斜面末端部の田切りに接した台地

時代と時期：古墳時代前期末～中期初頭、古墳時代後期後半

遺跡の特徴：古墳時代前期末～中期初頭および古墳時代後期後半の集落

主な検出遺構

主な出土遺物：

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	溝	柵列
古墳	20	5	8	1	1

土器：古墳時代前期末～中期初頭および古墳時代後期後半の土師器・須恵器

石器：コモ編み石、砥石

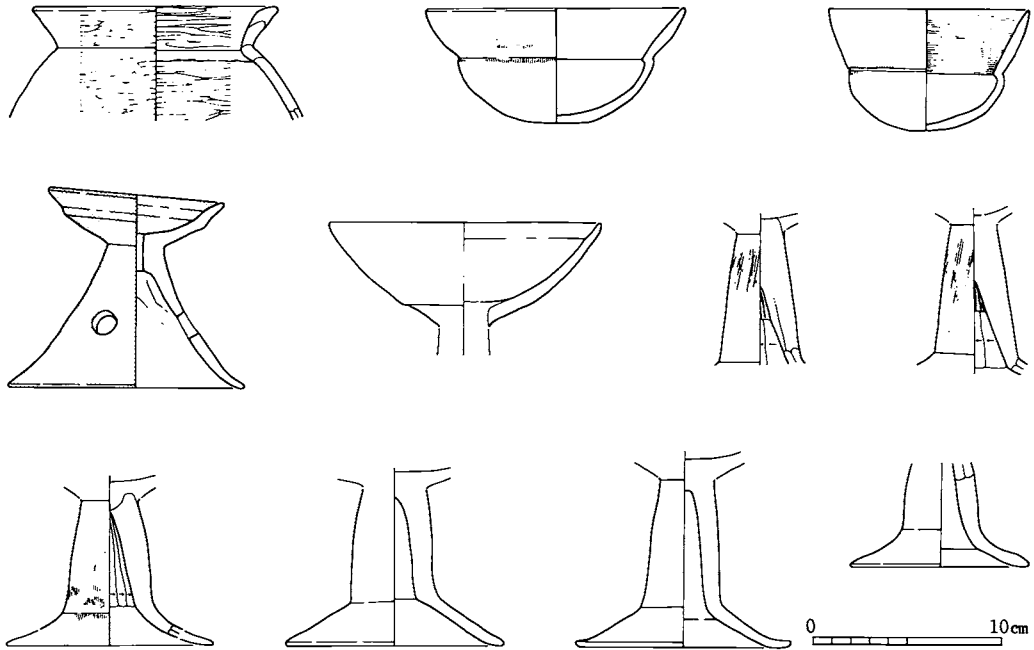
千曲川を目前に控えた浅間山麓の末端部は、浸食による田切り地形が発達し、これによって細く長い台地がひだ状に展開している。その中にあり、野火附遺跡以北の地は幅1kmほどの台地が続く安定した場所である。律令体制が整い始めたころ、突如この地に鑄師屋遺跡群という大遺跡群の成立をみるが、野火附遺跡はその南端の一角に位置する。

今回の調査では、東西に伸びるわずかな微高地部分から古墳時代の集落跡を確認した。前期末の住居跡1軒と前期末ないし中期初頭の住居跡2軒、後期後半の住居跡17軒がみられ、2度にわたる集落経営の場となっている。

前期末から中期初頭にかけての集落は、鑄師屋遺跡群では初めての確認例である。かつて中期後半の小規模集落が調査されたことはあるが、これによって鑄師屋遺跡群の成立年代をさらに遡らせる結果となった。ただし、本遺跡もそうであるように、極めて小規模かつ単発的な存在でしかないため、律令以後の大規模集落と直接結びつくものではないだろう。しかし、弥生時代には決して人の住むことのなかったこの高燥の地が、居住の場として利用され始めた経緯には興味深いものがある。近年、さらに山寄りの高所で前期初頭の集落の発見が相次いでいるが、それとの関連で今後一考を要するところであろう。

後期後半の集落は、鑄師屋遺跡群が大遺跡群として発展したその初期のものである。わずか1例を除いて重複が認められず、適当な散らばりをみせている。遺跡群全体の中では、短期の内に終焉を迎えた小集落に過ぎないが、これまで該期集落が当地点にまで及んでいるとは考えられておらず、遺跡群の範囲を広げる結果となった。特に南限が確認された点は重要である。

出土遺物は、両集落とも少ない。しかし、前期末から中期初頭では、それ自体稀少であるため貴重な資料となった。また、後期では「コモ編み石」とも称される石錘状の自然礫を集中保有する住居跡が目立ち、この遺存状況や使用痕観察を考える好材料が得られた。



第5図 野火附遺跡古墳時代前期末～中期初頭の土器群（1：4）

4 ^{まえだ}前田遺跡

所在地：佐久市大字小田井字前田329番地

調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成6年5月6日～7月6日

遺跡の立地：浅間火山南麓の台地部

調査面積：2,000㎡

時代と時期：古墳時代後期～平安時代、中世

遺跡の特徴：古墳時代後期～平安時代の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	粘土 採掘坑
古墳末～平安	7	5	6	1
中世			1	

土師器・須恵器・刀子・銅製品など

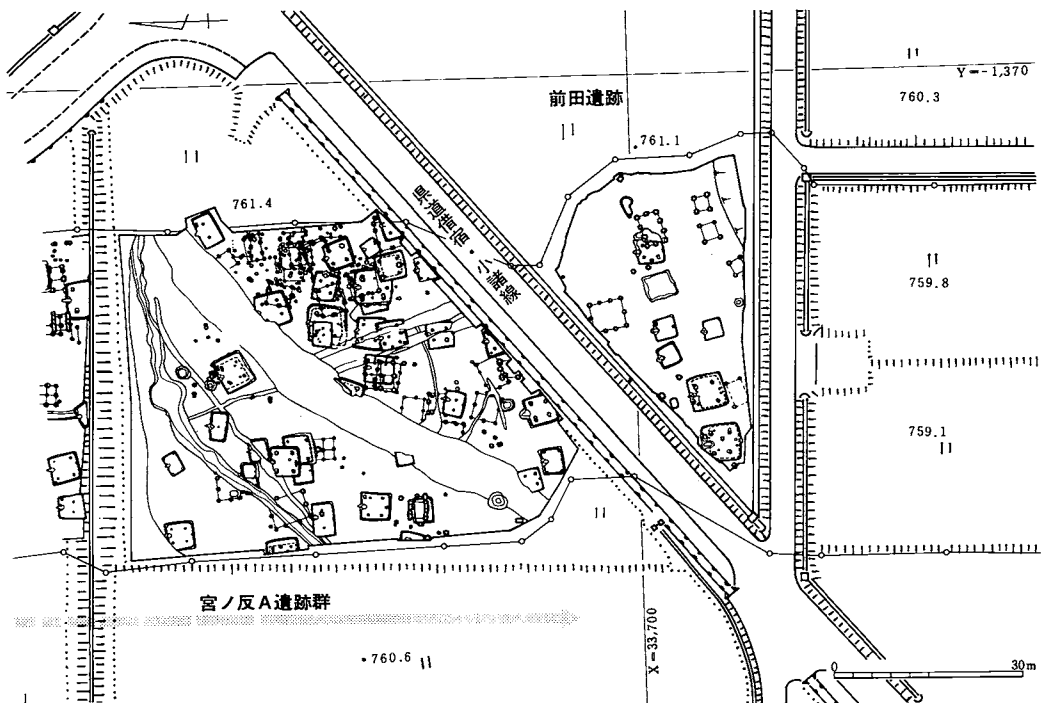
浅間山麓は南西方向になだらかな長い斜面が裾野の佐久平へと続いている。裾野の佐久平北部にはこの地域特有の「田切り」地形が、深い網の目のように発達している。鋳師屋遺跡群はこの山麓斜面から平坦な佐久平へと移り変わる場所に位置し、その標高は770m内外をはかる。この地域は佐久市・小諸市・御代田町が入り組み、小田井地籍（佐久市・御代田町）と御影地籍（小諸市）からなる。この一帯は田切りが発達しえなかった空白地帯だが、その代わりに幾筋もの低地状の地形が認められ、これに取り残された部分に遺跡群は立地している。

昭和60年代前半に実施された県営圃場整備事業に伴い、2市1町によって30万㎡を対象に低地部分を除く約12万㎡の発掘調査が4年間にわたり実施された。その結果、古墳時代中期から平安時代と中世の大規模な遺跡群であることが判明した。

前田遺跡はその一群に入る遺跡で、今回の調査地は佐久市が昭和62年度に調査した前田遺跡C地区の西端部に位置する。当時の事業設計から地山は削平しないとのことで遺構検出のみを実施した場所であったが、折からの水害で調査も部分的に滞っていたため今回の調査となった。

調査の結果、調査区南端で自然河川の岸を一部検出し、それに規制されるかのように古墳時代後期～平安時代の住居跡7軒・掘立柱建物跡4棟を検出した。そして遺跡は、北接する県道を挟んだ宮ノ反A遺跡群と西へ連綿と続いていることが判明した。古墳時代後期の住居跡のカマドは粘土質の土で構築される。4号住居跡からは偶然粘土質の土層に突き当たったのか、土を採掘してカマドを構築した跡が見つかり、住居廃棄後もそこから土を掘り出していることがわかった。こうした粘土の採掘坑は芝宮遺跡群・中原遺跡群などからも見つかっている。

今回の調査によって遺跡群は、遺跡対象外として調査されずに圃場整備が行われた小諸市地籍へと展開し、なおかつ、事業による遺跡の破壊も免れていたことが明らかとなった。また、近在の大型集落に先駆け、現在まで断続的ではあるが集落が営まれてきた理由も再度検討する必要がある。今後、両者について何らかの調査が実施できるよう関係当局の配慮をのぞみたい。



第6図 前田遺跡全体図 (1:1,200)

5 ^{みやのそり} 宮ノ反A遺跡群

所在地：小諸市大字御影新田字宮ノ反1186番地ほか

調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成5年9月1日～6年1月6日

上沼 由彦

調査面積：10,000㎡

木内 英一

遺跡の立地：浅間山麓南斜面の田切りに接した台地

白鳥喜一郎

時代と時期：縄文時代後期，古墳時代後期～平安時代，中世戦国期

寺島 俊郎

遺跡の特徴：古墳時代後期末～奈良時代初頭の集落と居館，中世の居館

山岡 一英

依田 謙一

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	溝	その他
縄文				1		陥し穴2
古墳～平安		110	81	多数	8	
中世			20以上	多数	4	柵列多数

土器：古墳時代後期～平安時代前期の土師器・須恵器，中世の内耳鍋・かわらけ・陶器

石器：砥石，臼

石・金属製品：紡錘車，鉄鏃，刀子，金環，銭

田切り地形が発達する浅間山麓末端部において，本遺跡群周辺は比較的広大な平坦面が確保されている。ここに律令体制に入ってから，突如として大規模な集落が形成されはじめることが，佐久市・小諸市・御代田町各教育委員会の調査によって明らかになった。その最盛期は，集落経営開始時の古墳時代末から奈良時代初頭にあり，徐々に規模を縮小しながら，律令の崩壊とともに姿を消すらしい。また，衰退の途をたどる奈良時代後半から平安時代前期にかけては，この地からわずかに南方に離れた台地上に中心を移すこともわかりつつある。律令初期に栄えたこの大遺跡群は，3市町にまたがることから，未だ呼称に一致をみていない。最近では「鑄師屋遺跡群」として総称する傾向にあるが，小諸市教育委員会によって命名された「宮ノ反A遺跡群」は，その北端部，田切りと接する台地縁辺に当たる。

鑄師屋遺跡群の東西範囲はその境を決定できずさらに広がりを見せているが，地理的環境からすると，今回の調査対象地点はおおよそ遺跡群の北端中央に相当するものと思われる。調査の結果，ここにも古代集落が連綿と続くことが判明し，遺構密度も他に劣るものではなかった。ただし，奈良時代中葉を過ぎた遺構は，竪穴住居跡でみれば110軒中の数軒に限られるため，律令初期にのみ栄えた地点と考えられる。また，同期の居館跡と目される遺構群（第8図）が北辺に確認でき，まさに初期鑄師屋遺跡群の中核をとらえることができた。

この居館は，幅2m・推定深度1m前後の防御性の薄い方形囲繞施設を伴うものと考えられる。東西両縁を調査できなかったものの，8世紀末葉の住居によって壊される溝Aと，そこから南方に60m（唐尺に換算すると200尺）離れた7世紀後半の住居を切る溝Cが南北の基本範囲と思われ，溝C間に設けられた陸橋部には貧相な四脚門を構えていた。この門と溝A北東コーナーの位置関係からすると，わずかに横に長い屋敷地が想定される。

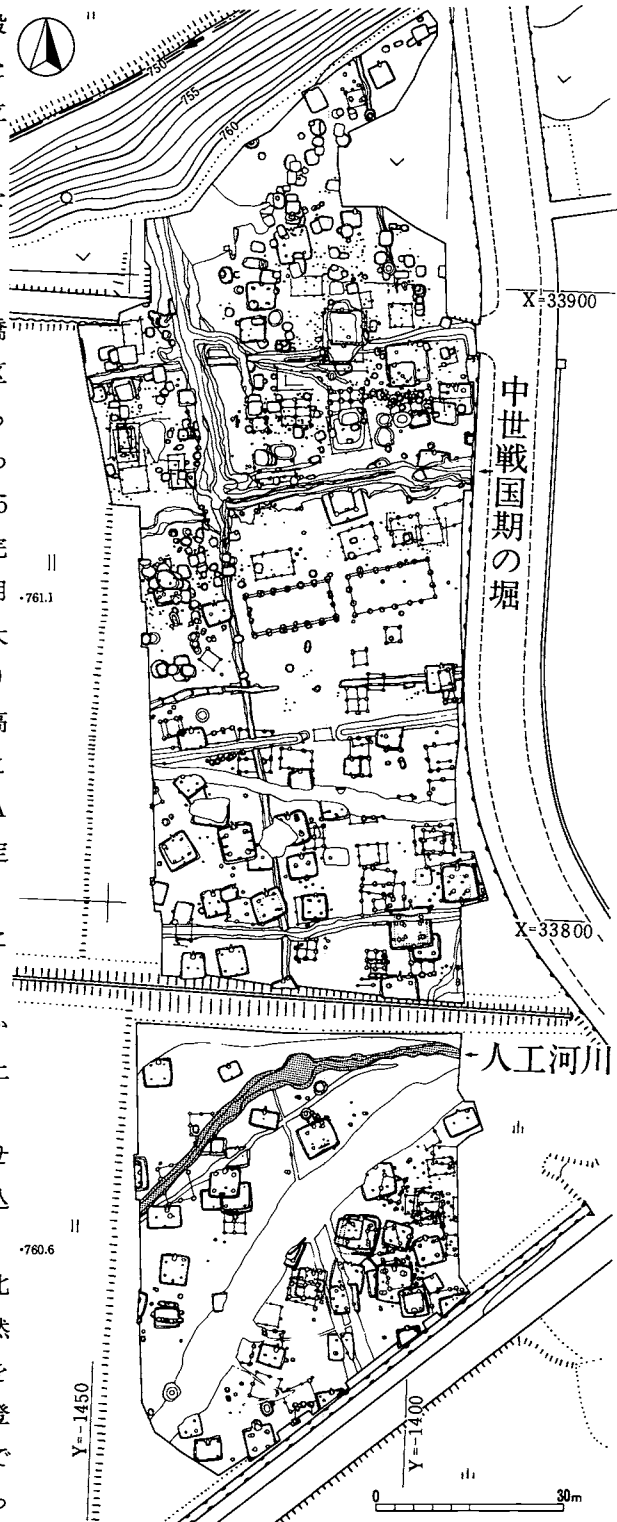
内部には，正面に主屋ととれる3間×6間（6.0×13.5m＝20尺×45尺）の角柱をもつ壮観な平地式建物，東に3m（10尺）離して同等の脇屋，その背後には通常規模の建物跡が軒先を揃えて建ち並んでいた。すべて東西棟で構成されたものである。さらに南西隅には，極端に深

い掘方をもつことから、望楼的施設と考えられる建物も構築されていたらしい。その他にも竖穴住居や掘立柱建物がわずかに分布しているが、併存したものかどうかは定かでない。

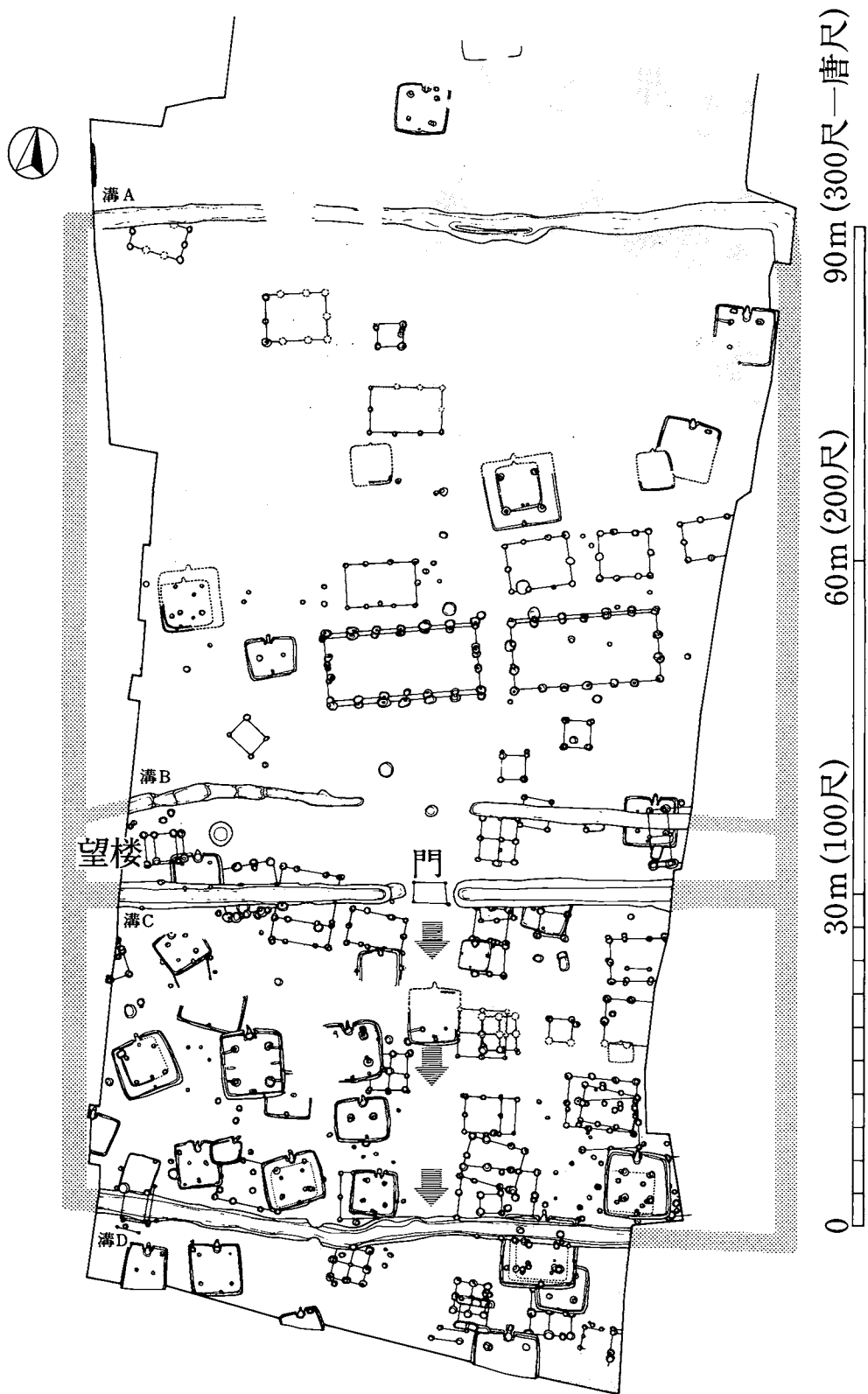
7世紀後半の住居を切る溝Bは、溝Cと併走し、しかも同位置に陸橋をもつことから、これも屋敷地を区画するための溝と思われる。とすると極めて変則的な造営規格になるわけだが、溝A-B間の距離は約52.5m、つまり高麗尺で150尺という完数を取得することができ、ここだけ使用尺度を違えている公算が大きい。大形建物跡と背後の建物跡群がかなり近接していることも考慮すると、高麗尺使用の溝A・Bと小建物群、これを造替・拡張した唐尺使用の溝A・Cと大形建物群という変遷を想定することも可能であろう。

また、溝Cの南30m (100尺)には溝Dが位置しており、溝A・C・Dが一体となっていることがわかる。溝C・D間には、居館中軸線上を分離帯として東群に掘立柱建物、西群に竖穴住居という形で集住させられているが、これを居館に取り込むための施設が溝Dであろう。

この他、中世戦国期の居館跡を北端部で確認した。北側の急崖を自然の要害として利用し、その他三方を空堀で囲んだものである。文献に登場することのなかった城砦的居宅であり、これもまた貴重な発見であった。



第7図 宮ノ反A遺跡群遺構配置図 (1:1,200)



第8図 宮ノ反A遺跡群古墳時代末～奈良時代初頭の居館跡 (1:600)
 (調査区内のアミは時期・時代が大きく異なる遺構)

6 さんだはら 三田原遺跡群

所在地：小諸市大字平原字下三田原1449番地ほか

調査担当者：近藤 尚義

調査期間：平成5年10月7日～12月14日

尾台 昇

調査面積：1,000㎡

飯田 吉隆

征矢野安政

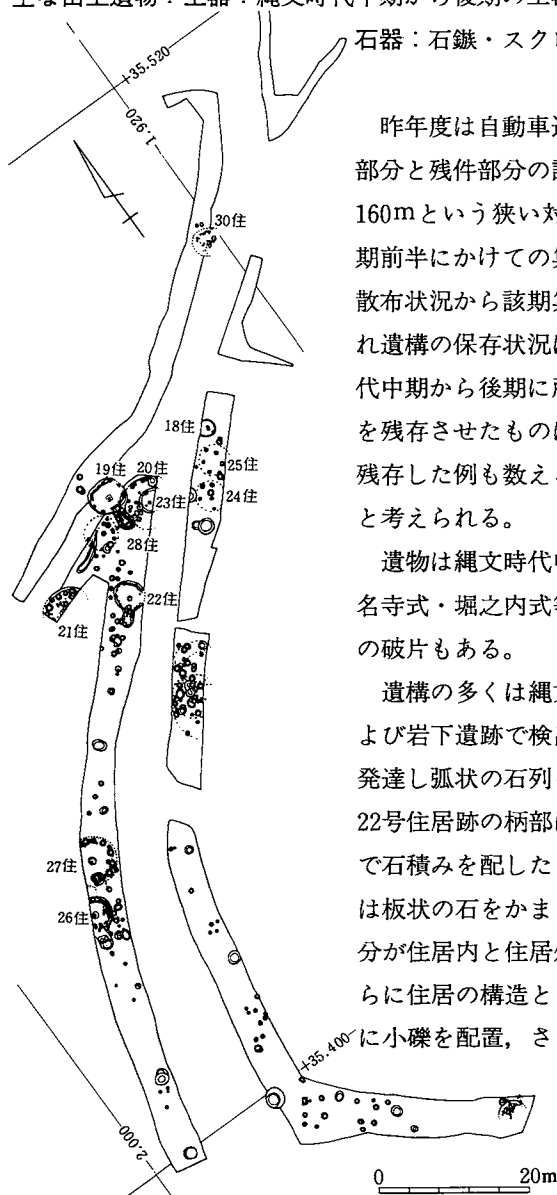
遺跡の立地：浅間火山裾部の田切りに挟まれた台地

遺跡の時期・特徴：縄文時代中期～後期の居住域

主な出土遺物：土器：縄文時代中期から後期の土器

石器：石鏃・スクレイパーほか

時期	遺構	竪穴住居跡	土坑	溝
縄文		14	195	
不明				1



第9図 三田原遺跡全体図 (1:1,000)

昨年度は自動車道の本線部分を、本年度は西側の側道の拡幅部分と残件部分の調査を行った。市道の左右5～6m、長さ約160mという狭い対象区であったが、縄文時代中期末葉から後期前半にかけての集落を検出した。昨年度の調査・周辺の遺物散布状況から該期集落の一角の調査になったが、上部が削平され遺構の保存状況は悪かった。したがって、検出された縄文時代中期から後期に所属する竪穴住居跡の14軒中、掘り込み・床を残存させたものは半数に満たない状況であったが、柱穴のみ残存した例も数えると、かなり高い密度で遺構が分布していたと考えられる。

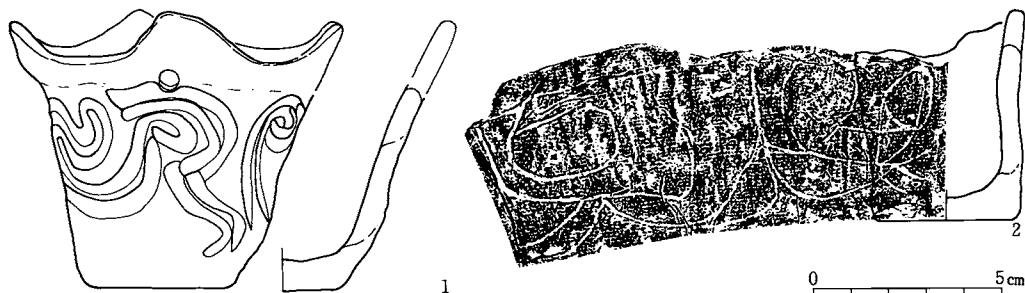
遺物は縄文時代中期後半の加曾利EIV式から同後期前葉の称名寺式・堀之内式等が多く出土したが、僅かに縄文時代早期末の破片もある。

遺構の多くは縄文時代後期前葉に所属し、昨年度本遺跡群および岩下遺跡で検出・注目された、柄鏡形敷石住居跡の柄部が発達し弧状の石列を構築するものは認められなかった。しかし、22号住居跡の柄部は昨年同様注目すべき所見を得た。昨年例で石積み配したと同じ部分がやや広がりを持ち、この底面には板状の石をかまち石状に配していた。本例は、やはりこの部分が住居内と住居外を区分する意味をもつとも推測される。さらに住居の構造として、壁ぎわに柱穴を配しそれに沿って床面に小礫を配置、さらに床面にはやや段堀を施す点など、昨年例3号住居跡との共通点は多い。なお、本例は住居と柄部との境にもかまち石があったが、原位置をとどめていなかった。また、検出された柄鏡形敷石住居跡4軒

の主軸をみると、19・26・27号住居跡が昨年度の調査例と同様に北にあり、22号住居跡のみが北東にあり異なっていた。

第2図は26号住居跡・土坑から出土したいわゆるミニチュア土器である。1は後期土器のモチーフを表出するが、2は何か絵画的な意味もみとれ興味深い。

最後に、地区の西側は畑により大きく削平され、遺構の存在する可能性は低いですが、他の部分は残されている可能性が高く、幾度となく営まれた遺構密度が高い集落であったと推測される。



第10図 三田原遺跡群出土土器 (1:2)

7 いわた 岩下遺跡

所在地：小諸市大字八幡字岩下1647-2番地ほか

調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成5年4月5日～4月9日

調査面積：1,000m²

遺跡の立地：浅間火山裾部の南走する尾根末端部

時代と時期：縄文時代前期～後期，古墳時代後期，平安時代，中世

遺跡の特徴：縄文時代前期初頭・同末・同中期末葉～後期前半・古墳時代後期後半・平安時代
・中世の居住域

主な検出遺構：(昨年度分を含む)

主な出土遺物：(昨年度分)

時期	遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	その他
縄文		51		約400	石棺1
古墳		2			
平安		4	1		
中世			5	22	小ピット群

土器：縄文時代前期～後期の縄文土器

石器：槍先形尖頭器，磨石，石皿，石斧，石鏃

石製品：石棒，石剣，丸石，その他軽石製品多数

昨年からの継続調査である。調査対象範囲の南西端に当たり、昨年の調査地点とは小さな沢を挟んでいる。駒形社が祀られていた場所であるため、「塩野牧」に関連する何らかの遺構の発見に努めたが、その痕跡は一切認められなかった。また、縄文時代の集落も当地点にまで及んでいないことが判明した。

8 ^{ごうど} 郷土遺跡

所在地：小諸市大字甲字中郷土4146番地ほか 調査担当者：桜井秀雄 木内英一
 調査期間：平成5年4月5日～9月10日 依田謙一 山崎光顕
 調査面積：4,000㎡ 遺跡の立地：浅間火山の南裾部の標高約830mをはかる緩傾斜面上
 時代と時期：縄文時代前期～後期 遺跡の特徴：縄文時代の集落(中期中葉～後葉を中心とする)
 主な検出遺構 主な出土遺物

時期	遺構	住居跡	土坑	溝
縄文時代			159	1
前期		4		
中期		27		
計		31	159	1

土器：縄文土器（前期～後期）
 石器：石鏃，打製石斧，磨製石斧，石匙
 石製品：玦状耳飾り，石棒，軽石製品
 土製品：土偶

昨年度から調査を開始した郷土遺跡は，用地買収の関係で来年度にも2,500㎡の調査面積を残すこととなった。したがって今年度は4,000㎡が調査対象であったが，このうち約2,000㎡は宅地造成の際に削平されており，そのため遺構は全く検出できなかった。

昨年度の調査によって，縄文時代中期後葉を中心とする大集落遺跡であることが明らかとなったが，今年度の調査成果はそれをさらに裏付けるものであった。縄文時代の住居跡は計64軒を数え，残件部分を考慮すれば最終的には100軒を優に超えるものと推測される。

今年度の調査では縄文時代前期前半（中道式期）の住居跡も4軒検出された。また滑石製の玦状耳飾りも1点あり，遺構外遺物としてとりあげたが，36号住居跡のプラン検出中に出土したため，同住居跡に伴う可能性も否定はできない。

時期的には，中期中葉から後葉にかけて集落は最も盛行しており，おそらく浅間山麓の縄文中期文化の拠点の遺跡として位置づけられるだろう。今回の調査対象地は郷土遺跡の中核部分にあたるものと考えられ，当該期の集落構造の解明にも十分に寄与できる資料として期待されるが，いまだ調査途中であるため来年度の課題としたい。

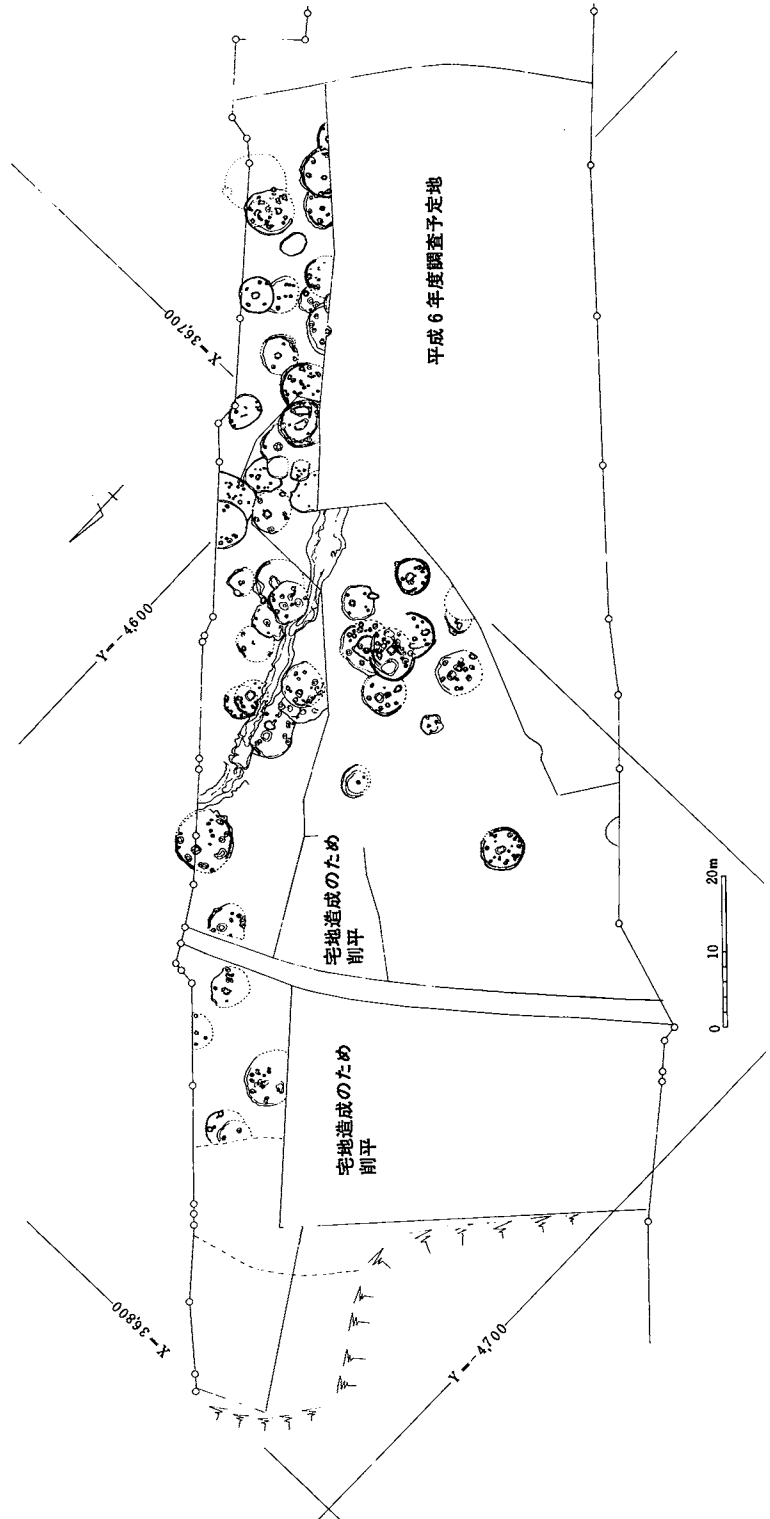


第11図 玦状耳飾り



第12図 24号住居跡

中期後葉の遺構で注目したいのは屋内祭祀を考えるうえで良好な資料を提供した24号住居跡である(第13図)。直径は8.0 mを測り, 出入口部付近には石蓋を伴った埋甕がみられる(年報9参照)。また, 一辺1.1mの石囲炉には4個の石棒(加工品1, 自然石利用3)がその3辺に認められる。そしてこの炉の北側奥壁沿いには丸石が左右に1個ずつ置かれ, その内側には最大径約80 cm, 容量約90 lをはかる大形鉢とあたかもこれを囲むかのような状態で底部を切断した伏甕6個が出土している。このように極めて祭祀的色彩の強い住居跡であり, 少なくとも住居廃絶直前もしくは廃絶時には何らかの祭祀行為が行われていたことは間違いないと考えられる。



第13図 郷土遺跡全体図(1:1,000)

北陸新幹線関連

9 あがた 県遺跡・あがたせいなんぶ 県西南部遺跡

所在地：北佐久郡軽井沢町大字長倉字上県3799番地ほか 調査担当者：桜井秀雄

調査期間：平成5年10月19日～28日（試掘） 11月11日～12月9日 依田謙一

調査面積：県遺跡3,100㎡ 県西南部遺跡600㎡

遺跡の立地：浅間火山南東麓の標高約935mをはかる田切り台地縁辺部

時代と時期：古墳時代前期初頭 遺跡の特徴：古墳時代前期初頭の集落

検出遺構：古墳時代前期初頭の竪穴住居跡1軒

出土遺物：古墳時代前期初頭の土師器、縄文前期土器、炭化材

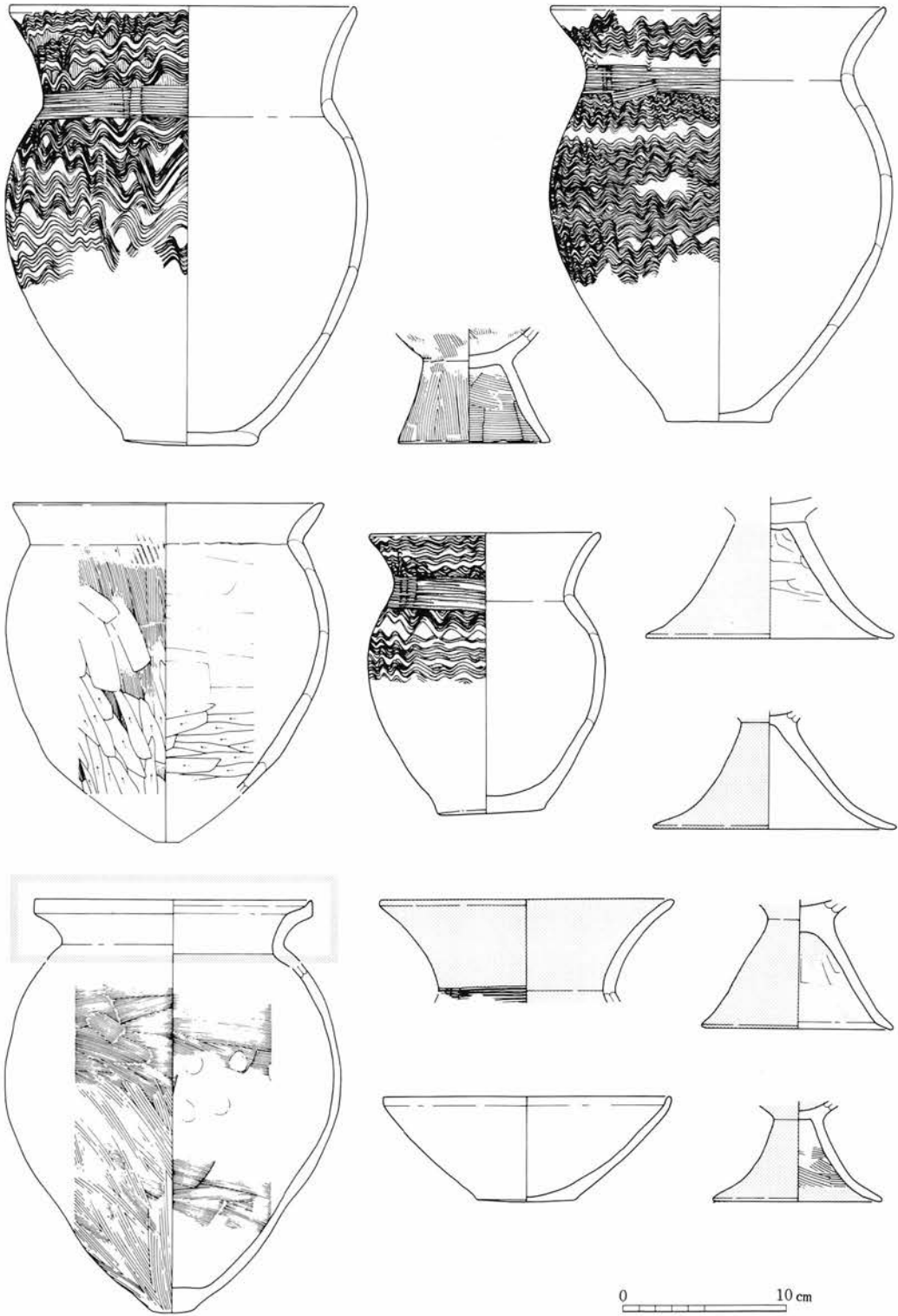
県遺跡は国道18号線バイパス拡幅工事に先立ち、昭和51年に発掘調査が実施され、住居跡2軒が検出されている。当時は2軒とも「弥生時代後期初頭」の住居跡と理解されていたが、近年の研究成果によればこれらは古墳時代前期初頭に位置づけられるものである。今回の調査でもほぼ同時期の住居跡が1軒検出され、当該期の小規模な集落遺跡であることが確認された。

この1号住居跡からは在地の土器に加えて、北陸東北部や関東から直接移入された土器も伴っている。北陸系土器の出土は佐久地方では初めての事例となる。時期的にもまた地域的にも興味深い資料である。なお北陸系土器のうち1点は遺憾なことに写真撮影後に現場にて盗難に会い、底部及び胴部の一部が残存するだけとなってしまった。第14図のスクリーントーンでかこんだ口縁部は写真や調査時の記憶等をもとに復元したものであることを断っておきたい。

また1号住居跡の覆土には一層の降下テフラ層が認められた（口絵写真参照）。この降下テフラ層は昭和51年の調査でも注目されていたが、今回は古環境研究所に依頼し、その年代同定を行った。その報告によれば、このテフラは褐色の軽石から構成されること、斜方輝石および単斜輝石を含むこと、さらに火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率〔火山ガラス（ n ）1.525–1.532、斜方輝石（ γ ）1.705–1.710〕などから、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラに同定されるという結果が出ている。この降下テフラは覆土の中位に認められることから、近年群馬県で発見が相次いでいる被災遺跡そのものではないが、住居の廃絶年代および埋没過程の観察などに大きな成果が期待できる資料となろう。

以上のように今回の調査では検出住居跡こそ1軒ではあったが、外来系土器の相伴、示標テフラの存在など注目すべき資料をもつ。これらはなぜ①古墳時代前期初頭という時期に、②標高約935mもの高地に位置するこの地に、③小規模ながら集落が営まれたのか、という県遺跡の性格の解明にも重要な手掛かりをもたらしてくれるものと思われる。

県西南部遺跡は未周知の遺跡であったが、県遺跡とは小規模な田切りをはさんだ西南部に位置し、ほぼ同様な地形であったため、今回確認のために試掘調査をおこなった。重機によるトレンチを31本設定し、浅間Bテフラ層下面およびローム層上面の2段階にわたって掘り下げた遺物は全く認められず、今回の調査予定地には遺跡の存在する可能性は低いものと考えられたため、面調査は実施しなかった。



第14图 泉遺跡1号住居跡出土土器 (1:4)

10 ^{いけじり}池尻遺跡

所在地：御代田町大字御代田字池尻3639-1番地ほか 調査担当者 白田武正・近藤尚義
調査期間：平成5年7月5日～7月8日，8月24日～8月26日，12月28日

対象面積：15,100㎡ 調査面積：1,250㎡ 遺跡の立地：浅間火山裾部の緩傾斜面

現地形は緩斜面からやや平坦地を形成する立地であったが，調査の結果，東西に伸びる大きな沢に追分火砕流（A. D. 1783）が堆積し現地形を形成したことが判明した。同町で調査された地点は南にあること，遺構・遺物の出土が見られなかったことから，遺跡の中心から外れていることが判明した。

11 ^{おたい}小田井城南部台地遺跡

所在地：御代田町大字御代田字朝日3666-1番地ほか 調査担当者 白田武正・近藤尚義
調査期間：平成5年7月5日～7月7日，12月14日～12月15日

対象面積：13,000㎡ 調査面積：3,300㎡

遺跡の立地：浅間火山裾部のやや平坦な台地

浅間山麓の広大な台地上にあるが，黒色土の形成も希薄で，縄文時代後期の遺物が散布するのみで遺跡の中心から外れていることが判明した。

12 ^{うたぎか}唄坂遺跡

所在地：佐久市大字小田井字唄坂1264番地ほか 調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成5年4月9日～4月15日

調査面積：900㎡（延1,800㎡） 遺跡の立地：湯川左岸の低位段丘

傾斜のきつい南斜面に営まれた遺跡である。全面調査を実施したが，弥生時代後期から古墳時代前期初頭・古墳時代後期・平安時代の土器がわずかに採集されただけである。

13 ^{なかかない}中金井遺跡群

所在地：佐久市大字小田井字中金井790番地ほか 調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成5年4月13日～6月7日，12月6日～12月21日

山岡 一英

調査面積：7,500㎡（延10,750㎡）

遺跡の立地：湯川右岸の低位段丘と高位段丘

時代と時期：縄文時代中期，古墳時代後期，平安時代

遺跡の特徴：古墳時代後期後半および平安時代中頃の集落

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	溝
古墳		3	1	
平安		2	2	
不明				1

主な出土遺物

土器：縄文時代中期の土器，古墳時代後期および平安時代中頃の土師器
 石器：石鏃，打製石斧
 鉄・石製品：鉄鏃，滑石製紡錘車，白玉

金井城跡の城域と接する高位段丘の縁辺部と，そこから20mほど低い位置にひろがる低位段丘面の2地点の調査を行った。前者からは古墳時代後期の集落，後者からはいわゆる「古代末」の集落がそれぞれ確認された。ほかに，低位段丘上では縄文時代中期初頭を中心とする遺物が採集されたものの，これにまつわる遺構を検出するまでにはいたらなかった。

14 ^{くりげざか}栗毛坂遺跡群

所在地：佐久市大字小田井字前頭部603番地ほか 調査担当者：宇賀神誠司
 調査期間：平成5年5月6日～5月20日 山岡 一英
 調査面積：2,500㎡（延5,000㎡） 遺跡の立地：浅間山麓南端の台地上
 時代と時期：平安時代
 遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居跡	溝
平安		4	1

主な出土遺物

土器：平安時代前半～中頃の土師器・須恵器

調査対象地点は，広大な遺跡群の北端部に相当する。遺跡群の中心からそれた地点と考えられ，表土直下に堆積する洪水砂層上面から，平安時代前期といわれる「古代末」の住居跡をそれぞれ2軒検出したにとどまった。

15 ^{しもかにざわ}下蟹沢遺跡

所在地：佐久市大字岩村田字下蟹沢250番地ほか 調査担当者：宇賀神誠司
 調査期間：平成5年6月16日 調査面積：30㎡（対象面積4,300㎡）
 遺跡の立地：浅間山麓南端の田切り地形

水田の検出を目的に試掘調査を実施したが，水田土壌らしきものは認められず，また遺物も採集できなかったことから，面調査することなく調査を終了させた。

なかだいら たなかじま
16 中平・田中島遺跡

所在地：北佐久郡浅科村大字塩名田字中平1247番地ほか 調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成5年11月2日～11月19日 試掘：平成5年12月7・8日

遺跡の立地：千曲川左岸の段丘面上

調査面積：1,000㎡

時代と時期：縄文時代中期・後期，古墳時代前期，奈良～平安時代？

遺跡の特徴：小規模な複合遺跡 主な出土遺物：縄文土器・土師器甕

遺跡は、千曲川左岸の東向きの4段からなる河岸段丘の最上段面（田中島）と第2段面（中平）上に立地する。第2段丘は現在の千曲川河床との標高差約19mを測り、垂直崖を呈している。段丘上には旧中仙道の塩名田宿が所在し、遺跡はその集落の北に位置する。本年度の調査は、7,200㎡の内第2段丘の縁辺部（千曲川橋梁の基礎部分）の1,000㎡が対象となった。

調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒・土坑1基、奈良から平安時代？の竪穴住居跡1軒、時期不明の土坑1基を検出した。住居跡は耕作土直下で検出したが、削平されたためか残りが悪く、奈良から平安時代と推定される住居跡の壁はほとんど認められなかった。

試掘：上段面は削平が著しく耕作土下に腐植土層すら確認できず、下段面の段丘崖沿からは、上段から堆積したと思われる縄文中期から後期の土器を多量に含む黒褐色の包含層を確認した。

どあい
17 土合遺跡

所在地：北佐久郡浅科村大字甲字土合1717-1番地 調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成5年4月5日～4月27日（2次調査）

遺跡の立地：布施川右岸河岸段丘上

調査面積：200㎡

時代と時期：古墳時代（縄文時代前期・後期，弥生時代後期，室町時代）

検出遺構：古墳1基（小規模な複合遺跡） 主な出土遺物：須恵器甕・平瓶

昨年度、土合1号古墳部分は保存対策のために調査は見送られた。本年は協議によって、石室部分は保存し、墳丘の南西側約3分の1が調査対象となった。古墳は布施川の右岸段丘面の縁辺部に位置する。後世の耕作により石室は露呈し、天井石の一部は持ち去られていた。明治32年（1899）に調査され、昭和44年（1969）5月13日には清掃調査が実施された。多くの副葬品が出土したが、中でも銀象嵌を施した2点の八窓倒卵形の鐙は注目されている。

調査の結果、直径規模約28m、幅約5m、深さ約40cmの周溝がまわる方墳であることが判明した。しかし、西側の周溝・墳丘北側の一部は既に削平され消滅していた。墳丘部分はわずかに盛土が確認され、周溝の掘り方の一部は不明瞭であったが全面に葺石が流れ込んでいた。

また、浅科トンネル（仮称）工事工程の変更から坑口付近が設計変更となり、立会い調査を実施したが遺構は検出されなかった。

(2) 上田調査事務所

発掘調査の概要

調査区域 東部町滋野・祢津地区，上田市芳田・上野・住吉・国分・天神・上塩尻地区
坂城町中之条・坂城地区

調査遺跡数 19遺跡 91,375㎡

調査面積

上信越自動車道関係：東部町大星合遺跡（1,000㎡）・東原地遺跡（1,000㎡）・桜畑遺跡（5,400㎡）・細田遺跡（33,000㎡）・森下遺跡（12,500㎡）・山の越遺跡（17,500㎡）・上田市大日ノ木遺跡（3,000㎡）・セツ塚古墳群（1,500㎡）・染谷台条里遺跡（2,900㎡）・陣馬塚古墳（2,200㎡）・宮平遺跡（2,700㎡）・坂城町山崎古墳群・山崎遺跡（3,000㎡）・山崎北遺跡（2,800㎡）・東平古墳群（1,500㎡）・小山製鉄（1,000㎡）

北陸新幹線関係：上田市国分寺周辺遺跡群（95㎡）・上田城跡（100㎡）・弥勒堂遺跡（180㎡）

調査期間 平成5年4月5日～12月17日

試掘遺跡数 2遺跡 1,724㎡

調査面積

上信越自動車道関係：東部町下平遺跡（542㎡）・中田遺跡（1,200㎡）

今年度の調査は、昨年度に引き続いて上信越自動車道関係が主体となり、北陸新幹線関係は一部の調査にとどまった。

上信越自動車道関係は東部町から坂城町までの全域で調査に着手したが、年度途中で上田市と坂城町で遺跡が新たに確認され、当初計画に加えて調査することとなった。このため、東部町内の一部については佐久調査事務所から応援を受け調査を実施した。

東部町祢津地区は、上信火山帯を構成する烏帽子岳山麓に形成された複合扇状地帯にある。桜畑・細田・山の越の各遺跡はこの扇状地の扇端部に立地し、縄文時代から平安時代・中世にかけての複合する集落跡が検出された。中世の遺構は竪穴建物跡と多くの土坑からなり、遺跡北方の山麓に位置する祢津氏居館跡との関係を含め今後の研究課題となろう。縄文時代では前期の資料が比較的まとまっている。

上田市大日ノ木遺跡は、神川の段丘を見下ろす高台の山麓に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が明らかにされた。また、縄文時代晩期後半の土器も出土し当該期の新資料が加えられた。宮平遺跡では古墳時代後期から中世にかけての集落跡が河岸段丘上に広がって検出され、古墳時代後期の焼失住居跡が良好な状況で発見された。両遺跡とも今後の継続調査で集落構造がより明らかにされよう。

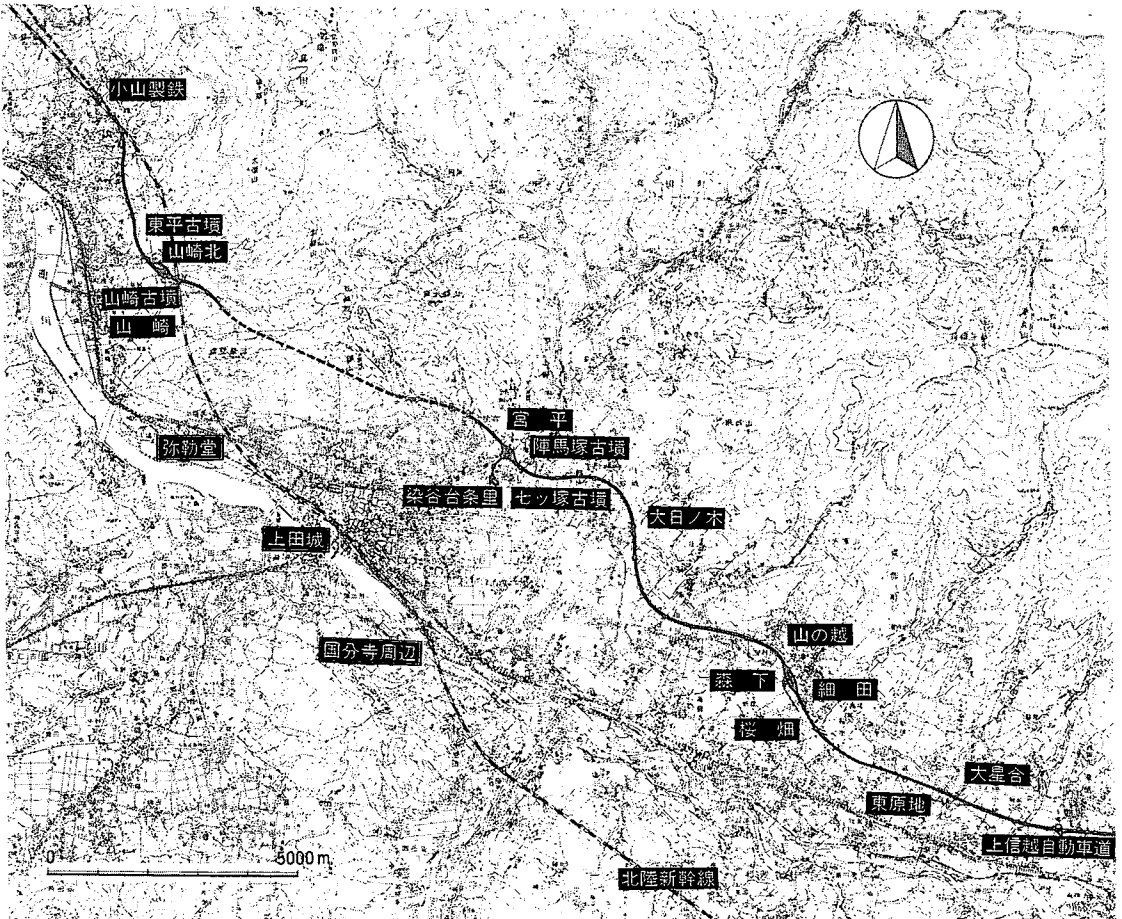
坂城町小山製鉄遺跡は崖錐の傾斜地にあり、平安時代の精錬鍛冶を中心とした工房跡や炉跡・炭焼施設と考えられる遺構などが検出された。昨年の更埴市清水製鉄遺跡と共に県内で数少ない製鉄関係の遺跡であり、今後の分析が期待される。山崎北遺跡では古代の小集落と中世の土壙墓が調査された。

集落関係以外では四基の古墳が調査された。上田市陣馬塚古墳は丘陵の頂部に構築された7

世紀初め頃の円墳で、直径8mを測る。玄室内からは3体分の人骨のほか、直刀・鉄鏃などの鉄器類や耳環・管玉などの装身具、土器が出土した。刀剣類のX線撮影による観察でつばなどから銀象嵌が確認された。

坂城町の東平古墳群は山麓の尾根状緩斜面に二基構築される。葺石を施した一辺12m程度の方墳と直径16mの円墳が接して築かれている。いずれも内部主体は木棺直葬で、副葬品には漆塗りの竖櫛片などがある。特に円墳では40点以上におよぶ多くの竖櫛が出土した。二基の古墳とも5世紀中葉の築造で、当地域では古い段階の古墳群といえる。また、山崎北遺跡では周溝のみが残る古墳1基が検出された。

新幹線関係は上田市内の3遺跡で試掘的な調査を実施した。国分寺周辺遺跡群と呼称される信濃国分寺跡の西方に位置する調査地点では、竖穴住居跡や土坑・道路状遺構など多くの遺構が確認された。今後の調査で国分寺跡周辺の状況が明らかにされるものと思われる。



地図2 上田調査事務所関係調査遺跡 (1 : 150,000)

上信越自動車道関連

1 おおほしあい 大星合遺跡

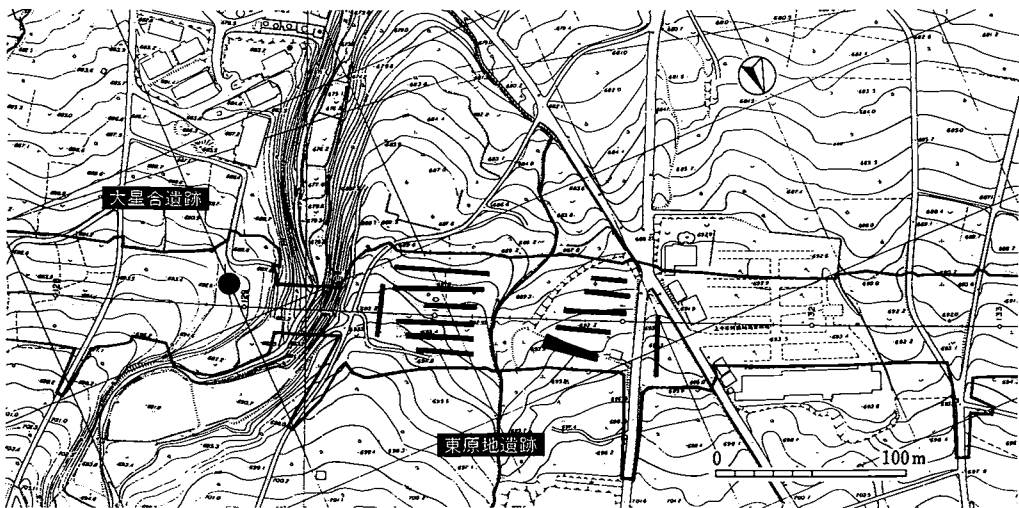
所在地：小県郡東部町滋野字大星合甲2345 調査担当者：若林 卓
調査期間：平成5年4月12日～4月16日 調査面積：1,000㎡ 西村 政和
遺跡の立地：三方ヶ峰南麓，大石沢川の形成した扇状地 松岡忠一郎
検出遺構：今回の調査における検出遺構はなし。

平成3年12月に実施した試掘調査で、センター杭128+80付近に積石塚かと思われる石積み1基を確認しており、この石積みを今回調査した。その結果、内部主体の痕跡や遺物も無く、畑地境を画する石塁状石積みに連続していることを考え併せ、この石積みは畑地開墾に際して集められた、通称『やっくら』と判断される。

2 ひがしはらち 東原地遺跡

所在地：小県郡東部町滋野字東高石3320ほか 調査担当者：若林 卓
小諸市滋野甲字西の平2489ほか 西村 政和
調査期間：平成5年4月5日～4月12日 調査面積：1,000㎡ 松岡忠一郎
遺跡の立地：三方ヶ峰南麓，大石沢川の形成した扇状地
検出遺構：今回の調査における検出遺構はなし。
主な出土遺物：縄文時代中期後半の土器，土師器，須恵器

周辺踏査，トレンチ調査を実施した結果，縄文中期土器，古代土器片をわずかに表採したものの，遺構はまったく検出されなかった。遺跡の本来的な存在範囲は，今回の調査地に及んでいないと考えられる。



第15図 大星合・東原地遺跡トレンチ配置図 (1:4,000)

3 桜畑遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字五輪原1201ほか

調査担当者：川崎 保 甲田圭吾

調査期間：平成5年8月5日～11月12日

井口 章 広瀬昭弘

調査面積：5,400m²

遺跡の立地：大室山南麓の求女沢川による複合扇状地

遺跡の特徴：縄文時代（前期・中期）、古墳時代、平安時代、中世の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居跡	土坑	溝	小穴
縄文	文	6	170	2	150
古墳	墳	4			
平安	安	4			
中世	世	△2			

土器：縄文時代土器（前・中・後期）、弥生時代土器、古墳時代土器、平安時代土器、中世陶器

石器：縄文時代（石鏃・打製石斧ほか）

石製品：古墳時代石製裝飾品

その他：銭貨（宋銭）、鉄製品（斧・釘ほか）、るつぼ

大室山南麓はいくつかの扇状地が重なり合った複合扇状地を形成しており、本遺跡は求女沢川の二本の支流にはさまれた扇状地の扇端部に立地する。

遺跡は昭和43年に旧菅平有料道路開設に伴う調査が実施され、縄文時代・平安時代の住居跡や中世の竪穴建物跡・小竪穴等が検出されている。今回の調査でも縄文時代から中世にわたる遺構群が検出され、広範囲におよぶ複合遺跡の内容が明らかになってきた。

多くの調査成果のうち、本遺跡を特徴付けるのは中世の遺構群である。この時期の遺構には二棟の竪穴建物跡（△「竪穴住居跡」と区別している）と多くの土坑・小穴がある。

竪穴建物跡は一辺3～4mの方形で壁下に周溝が巡る。二棟は柱穴配置や灰・炭の有無などで差異が認められ、機能差があるのかもしれない。土坑は1m前後の大きさで、方形と円形の形態がある。覆土はいずれもローム粒子を含む黒色土で、人為的に埋め戻したと考えられる。銭貨や鉄製品を出土したのも少量ある。土坑は集中して構築される傾向があり、重複が激しい。小穴は方形で不規則な配列である。

中世以外では縄文・古墳・平安時代の遺構が検出された。



第16図 桜畑遺跡全景

縄文時代の遺構は前期前葉と中期前半の住居跡が各2軒あり、土坑は後期もある。

古墳時代の住居跡は前半期のもので、同時期の土坑からは石製品、ミニチュア土器、小形丸底土器が出土した。

遺物としては、るつぼ片と考えられる破片があり、所属時期・生業形態など今後の課題である。

ほそだ
4 細田遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字細田1845ほか

調査担当者：寺島俊郎 藤原直人

調査期間：平成5年9月6日～12月17日

山崎光顕 田村 彬

調査面積：33,000㎡

五十嵐敏秀

遺跡の立地：大室山南麓，求女沢川右岸の扇状地

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居跡	掘立建物跡	土坑	溝
縄文	6				
古墳	12	2	62	2	
平安	7				

土器：縄文時代土器（前・中期），古墳・平安時代土器（土師器，須恵器）

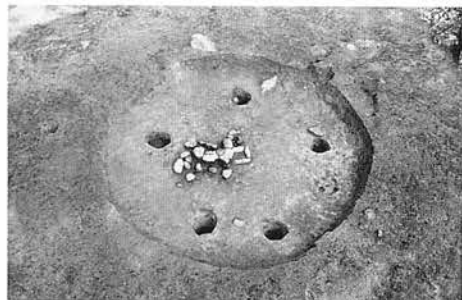
石器：石鏃，石斧，石匙，磨石，凹石，石錘，磨製石鏃

土製品：耳栓

遺跡は烏帽子火山南麓に広がる裾野地帯で，千曲川に向かって傾斜する押し出し扇状地上に位置する。西に森下・山の越遺跡が，東に桜畑・真行寺遺跡が隣接して存在する。

遺構については，縄文時代前期前葉（有尾式）～後葉（諸磯b式）・中期前半，古墳時代前期～後期，平安時代の住居跡合計28軒などが調査区全域に分散して検出され，時期によっては分布に片寄りが見られるが集中はしない。それらの検出状況から考えて後世の削平をかなり受けているものと思われ遺存状況は良好でない。

縄文時代は6軒の住居跡があるが，うち2軒は有尾式期で東信地方の該期資料として注目される。また，古墳時代前期・中期の住居跡は床面上に遺物を残したまま廃棄されたものが多く，焼失家屋の率も高いようである。古墳前半期の資料としては稀で貴重な資料となった。



第17図 8号住居跡



第18図 21号住居跡出土状況

もりした
5 森下遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字古大日2067ほか

調査担当者：井口 章 広瀬 昭弘

調査期間：平成5年11月8日～12月9日

調査面積：12,500㎡

遺跡の立地：大室山南麓の求女沢川による複合扇状地

今年度は調査対象範囲全域にわたるトレンチ調査と，一部分的調査で遺構・遺物の確認を行った。平安時代の住居跡や土坑が確認され，来年度に調査予定である。

6 やまのこし
山の越遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字町屋3089番地ほか

調査担当者：川崎 保 井口 章 甲田圭吾 柳澤 亮 寺沢政俊 豊田義幸 松岡忠一郎

調査期間：平成5年4月5日～8月20日，11月10日～12月17日

調査面積：17,500㎡

遺跡の特徴：大室山南麓の大星川と三分川に挟まれた複合扇状地。

遺跡の特徴：尾根上に広がる縄文前期～後期・古墳・平安・中世の集落跡

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑
縄文		12		370
古墳		3		
古代		9		
中世		△15	1～	

主な出土遺物

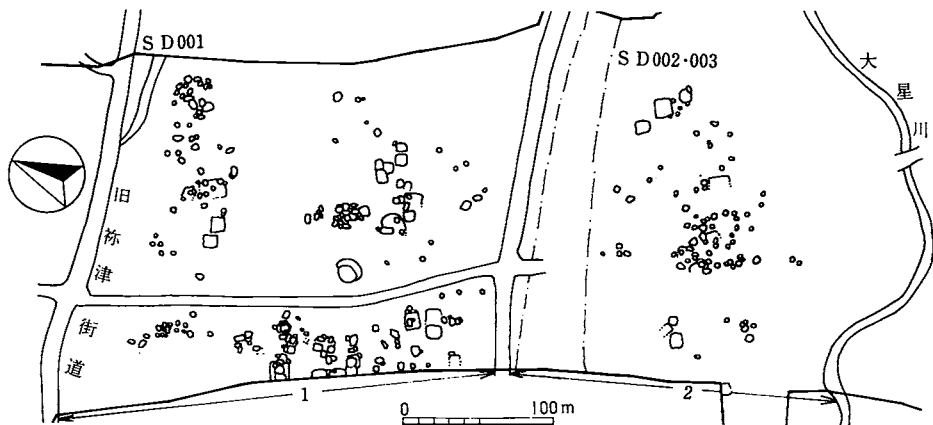
土器：縄文時代前期～後期土器，土師器，須恵器，黒色土器，内耳土器，羽口，中近世陶磁器

石器：石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧，凹石，擦石，敲石，石皿，スクレイパー，管玉

金属製品：鋸，刀子，鉄斧，銅銭，鉄滓

昨年度の試掘調査の段階で大星川右岸に竪穴住居跡や土坑といった遺構が存在することが確認され，さらに土器等は西側の旧祢津街道沿いまでかなり広い範囲に散布していた。そこで面的な発掘調査を第19図のように調査区を設定しおこなった。

遺構は調査区全域にまんべんなく広がって検出された。中央付近にある埋没流路（SD002・003でやや分断されている。旧祢津街道の北側は西側に傾斜しトレンチ調査を行ったが遺構・遺物は存在しなかった。



第19図 山の越遺跡調査範囲および遺構配置略図（1：2,000）

以下，発掘調査の概要を時代ごとに概観したい。

縄文時代前期は初頭と思われる遺物が遺構外から出土している。遺構で時期が明確なのは前葉の関山式で長方形を呈する住居跡が1軒2区で検出されている。しかし遺物の量は少ない。遺構・遺物は後葉の諸磯b式が多く，2区に集中している土坑の大半はこの時期であろう。土器を伴う例も多い（第20図）。当該期の住居跡は2軒ある。諸磯c式期は2区で若干の土坑と

不整形な住居跡が2軒検出されているが、b式期に比べると遺構数は少ない。前期後葉の土坑はいずれもほぼ円形もしくは楕円形で1m内外の大きさである。

中期は初頭のほぼ円形の住居跡が1区で数軒検出されている。またこの時期の土坑も多少ある。中葉は土坑が数基だけで住居跡はない。

後期は初頭から前葉（称名寺式から堀ノ内1式期?）の土坑が主体で1区にかなり集中している。三分川を挟んで山の越遺跡に隣接する釜村田遺跡の敷石住居跡との関係が注目される。

古墳時代は前期から中期の住居跡が1区と2区に検出されている。特に1区では炭化材が焼土と伴出していて焼失した例といえる。

古代は1区にいずれもカマドをもつ3軒の住居跡がある。かなり耕作により削平されていて遺存状況はあまり良くない。

中世の遺構については、1区で1～2mのほぼ方形の土坑が切り合いながら場所的にも集中して多く検出された。遺物は少ないながらも銅銭・土師皿・内耳土器等が覆土に含まれており、なかには焼土・炭・骨片が散見されたり、石を組む例もあることから、大半は火葬墓や火葬施設に該当しよう。

これらの土坑が集中する地点に隣接する形で、規模は3×3、4×4m程度の竪穴建物跡が切りあって検出されている。柱穴は2本が多く、カマドはないが、中央に焼土や灰が入った土坑、またはそれらが集中する部分もある。こうした竪穴建物跡には石で四方を壁状に囲む例があり、とくに2区のSB15はかなりしっかりした板状の石を巡らす構造である（第21図）。住居内から銅銭・調度品?の金具・鉄斧等の多くの金属製品が出土しており、これらの遺構の性格を考える上で重要であろう。

また、当該期の掘立柱建物の柱穴と考えられるものも1区で検出されているが、いずれも径10センチ程度と小さく貧弱なものしかない。



第20図 諸磯b式土器出土状況



第21図 中世竪穴建物跡

7 おひのき
大日ノ木遺跡

所在地：上田市芳田字山田852ほか
調査期間：平成5年4月5日～7月16日
調査面積：3,000m²

調査担当者：柳澤 亮
寺沢政俊
豊田義幸

遺跡の立地：千曲川支流行沢川と瀬沢川に挟まれた扇状地の緩斜面 標高639～646m

時代と時期：縄文時代晩期，弥生時代後期，古墳時代前期，奈良時代，平安時代

遺跡の特徴：弥生時代～平安時代の居住域と遺物を包含する埋没河川

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	焼土跡	埋没 河川
縄文						
弥生		3		38	5	2
古墳		1	1			
奈良・平安		5				
不明		2				



第22図 大日ノ木遺跡全景

主な出土遺物

土器：縄文時代土器（晩期），弥生時代土器（後期），
古墳～平安時代の土師器，須恵器，灰釉陶器

土製品：紡錘車

石器その他：石鏃，打製石斧，磨製石斧，擦石，スクレイパー，石匙，石剣，ガラス小玉

遺跡は殿城山南麓の扇状地にあり，現在は配水施設と水田，畑地に利用されている。今年度の調査の結果，水田域（低地）では埋没河川，地形的にやや高まる畑地からは弥生時代後期～平安時代までの住居跡や掘立柱建物跡・土坑が検出された。

弥生時代後期の住居跡は3軒検出されたが，来年度調査区との関係で完全に調査されたものは1軒である。その住居跡は一辺4m程の方形を呈し，北壁寄りにある地床炉周辺の床面から箱清水式に属する小型の台付甕や片口鉢などが一括で出土している点が興味深い。

古墳時代前期の住居跡は一辺5mの方形で，周溝が一部巡る。埋没過程で旧河川に壊されているために遺物数は少ないものの，東壁際の土坑内から高坏1点と，その周辺の床面より有段口縁壺とやや小型の壺の口縁部がそれぞれ1点出土し，有効な一括資料といえる。

奈良時代の住居跡は2軒検出されている。遺存状況のよい1軒は一辺5mほどの方形でカマドは北壁中央にある。カマド周辺からは坏や甕のほか，須恵器製で底部に厚みをつけるためにタガ状の円盤を添付した播り鉢が1点出土している。

埋没河川は幾度か流路を変えた痕跡を残して，大きくは2筋に分けられる。その覆土と周辺の遺物包含層からは多数の縄文時代晩期および弥生時代後期の土器片，また石器や剥片が出土し，一部欠損した石剣も見つかっている。

なお，来年度の調査範囲も居住域にあたり，更に多くの遺構や遺物が検出されることが予想される。また，縄文時代晩期の遺構の発見にも期待したい。

8 ななつづか 七ツ塚古墳群

所在地：上田市上野字弥素視867ほか
調査期間：平成5年11月1日～12月10日
調査面積：1,500㎡
遺跡の立地：神川右岸段丘，虚空蔵山南麓

調査担当者：若林 卓
西村政和
松岡忠一郎

本古墳群は上田市文化財地図に11基が記録されており，かつては20数基を数えたとの伝承もある。1号古墳は新屋古墳として市の指定を受け保存されている。

表面観察による限り調査地域内に明確な古墳は見当たらないものの，墳丘を失った古墳が存在する可能性が残されていたので，調査範囲全域でトレンチ調査を行った。

神川に近い東側では巨大な転石があり，現表土及び耕土の下は10cm以下の礫を含む灰褐色粘質土となる。また，他の地域も雑木林から桑畑，果樹畑に造成され，部分的には地山まで削平されてしまっており，トレンチ内からは遺物，遺構ともに見出されなかった。

このことから，七ツ塚古墳群の範囲はここまで及んでいないと考えられる。

9 そめやだいじょうり 染谷台条里遺跡

所在地：上田市住吉字箆田359ほか
上野字宮林929ほか
調査期間：平成5年4月26日～5月21日
同年11月15日～12月10日

調査担当者：柳沢 亮 寺沢政俊 豊田義幸
若林 卓 西村政和 松岡忠一郎

調査面積：2,900㎡

遺跡の立地：神川右岸の段丘面，虚空蔵山塊南麓斜面末端部

検出遺構：水田層1

出土遺物：土師器，須恵器，陶器片，石鏃

第2インター地区は染谷面と呼ばれる扇状地性の平坦面に位置する。トレンチ調査の断面観察の結果，現水田耕土の下に旧水田耕土が確認できる部分があり，その周辺を面的に広げ水田遺構の検出と遺物採集を行った。若干の遺物は出土したが，現在の水田形成や耕作の影響で畦畔や溝等の遺構は確認できなかった。

七ツ塚古墳群に隣接する本線地区の調査地域は虚空蔵山の山麓斜面末端にあたり，石垣を築き斜面をゆるくした果樹園となっている。調査区の状況は七ツ塚古墳群と類似し，水田土壌や遺構は検出されず遺物も出土しなかった。

なお，西半部の一部で現耕土直下から水田層が認められたが，聞き取り調査の結果この水田層は果樹園造成前の近・現代のものである公算が強い。

10 陣馬塚古墳

所在地：上田市住吉字横山471番地ほか

調査担当者：若林 卓

調査期間：平成5年5月11日～8月11日 調査面積：2,200㎡

西村政和

遺跡の立地：南方直下に染谷台地を見下す横山丘陵の頂部

松岡忠一郎

標高約600m，眼下水田面との比高およそ50m

遺跡の特徴：古墳時代後期末の円墳

本古墳は横穴式石室を内部主体とする直径約8mの円墳である。後世の攪乱や崩壊のため、墳丘の構造はあまり明確でないが、墳丘の裾回りに石を配し、裾石と石室裏込めの間は角礫を混じえた土盛による築成である。墳裾から2～3m離れた外方には、現状で幅2m、深さ0.2mほどの浅い周溝がめぐる。両袖の横穴式石室は、長方形の玄室に短い羨道が取り付く平面形態で、全長5.3mを測る。主軸はN13°Wを指し、南に開口する。墓壙はなく、旧表土と思われる黒色土直上に築かれている。天井石はすでに持ち去られていた。

玄室は奥行3.8m、幅1.7m前後を測る。奥壁は二段が残存し、上下段とも幅1.9m、高さ0.9mほどの巨石を用いている。床面から奥壁石上端まで1.7mあり、玄室の高さを示唆している。横長の割石をやや持ち送り気味に積み上げた側壁は最大三段が残存する。個々の石の大きさは長さ1～0.5m、高さ50～30cm程度である。床は20cm前後の角礫を敷いた上に、3～5cmの円礫を敷き詰めており、下部の角礫敷きは羨道へと続く。羨道は長さ1.5m、幅1.1mで、側壁は最下段のみが残る。羨道の奥には、幅1.1m、奥行き0.3m、高さ0.4mの梱石が置かれている。梱石の前面には人頭大の角礫が充満していた。閉塞施設であろう。

玄室床面は盗掘によってかなり乱されていたが、耳環・管玉・勾玉・ガラス小玉・直刀・鉄鏃・刀子・須恵器長頸壺・平瓶・提瓶・土師器環など多くの副葬品と3体分の人骨が検出された。外表遺物としては、須恵器大甕の破片多数が出土した。なお、直刀のX線撮影を行ったところ、つば等に銀象嵌を施したのが見

つかった。

本古墳の築造年代は、現在のところ7世紀前葉と考えている。横山丘陵には他に確かな古墳は知られていないため、本墳は単独墳の可能性が高い。七ツ塚古墳群など眼下の染谷台・神川段丘上に分布する古墳群と本墳とは時期的な接点をもつと思われるが、それらとは立地を異にする陣馬塚古墳の特質は今後の大きな検討課題であろう。



第23図 陣馬塚古墳全景（上がほぼ北）

11 ^{みやだいら}宮平遺跡

所在地：上田市住吉字宮平965ほか

調査担当者：川崎 保 豊田義幸 西村政和 田村 彬 桜井秀雄

調査期間：平成5年8月18日～11月16日 調査面積：2,700㎡

遺跡の立地：東太郎山（1300.7m）の南麓，矢出沢川右岸の下位河岸段丘面

遺跡の特徴：古墳時代から中世にかけての複合集落遺跡

主な検出遺構

主な出土遺物

時代	遺構	竪穴建物跡	土坑
古墳		3	
古代		16	47
中世		2	

土器：縄文土器，土師器，須恵器，黒色土器，灰釉陶器，瓦，青磁，内耳土器，中近世陶磁器

石器：石鏃

金属製品：銅銭，刀子，鉄滓

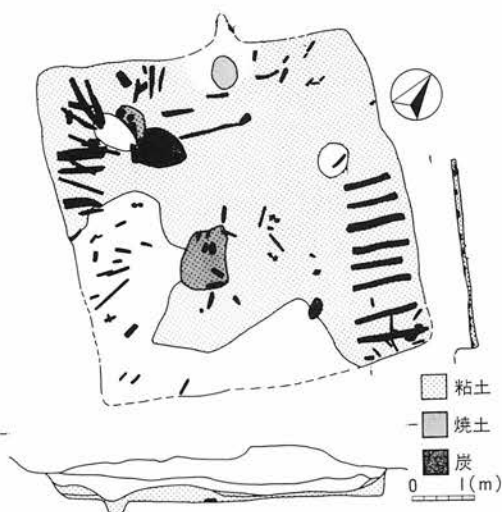
当初本遺跡は発掘調査対象地ではなかったが，地元からの報告で遺跡であることを確認し県文化課が試掘調査を行ったところ，

矢出沢川右岸に広がる遺構密度の高い集落遺跡であることが判明した。協議の結果，本年度は急遽工事用道路部分のみを発掘調査することとなった。矢出沢川よりに東から西へ1・2地区，その後南側に拡張した3地区を設定し調査した。

1区では古代から中世の土坑，竪穴建物跡が検出された。カマドはなかったが，隅の方に焼土塊があるので大半は住居であろう。2区は古墳時代と古代の住居跡が各1軒存在した。

3区では矢出沢川に向かって遺構密度が高くなる傾向であった。古墳時代の住居跡は3軒あり，うち1軒は住居内覆土の混焼土粘土層中に炭化材がバックされた形で比較的良好な状態で出土しており，焼失住居跡と考えられる（第24図）。

また，古代から中世の竪穴建物跡が12軒検出された。なかには堅緻な焼土が一箇所とぎれるがほぼ円形に壁状にめぐり，さらに中央に焼けた小穴があって鍛冶炉と思われる部分が伴っている例もある。土坑の多くは骨・炭・焼土と銭や内耳土器などを含み，主に中世の火葬墓もしくは火葬施設であると考えられる（第25図）。



第24図 古墳時代焼失住居跡(17号) (1:120)



第25図 中世火葬施設？ (SK10)

12 やまぎきた 山崎北遺跡

所在地：埴科郡坂城町中之条字山崎1624ほか

調査期間：平成5年10月12日～11月22日

調査面積：2,800㎡

調査担当者：柳澤 亮

寺沢政俊

豊田義幸

遺跡の立地：千曲川の支流である御堂川の左岸，大峯山麓の扇状地 標高483～493m

遺跡の時代と特徴：古墳時代の古墳と平安時代の集落，中世の墓域

主な検出遺構

主な出土遺物

時代	遺構	堅穴住居跡	土壇墓	土坑	古墳
古墳時代					1
平安時代	3			10	
中世			9		

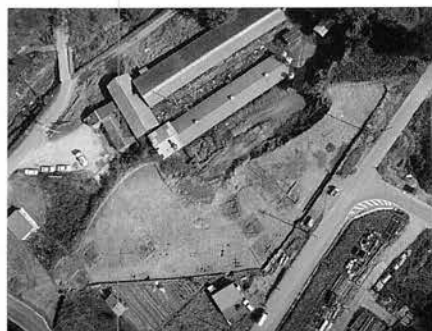
土器：縄文時代土器（中期），古墳時代～平安時代の土師器，須恵器・灰釉陶器

金属製品：銭貨，鉄釘，鉄塊系遺物，鉄滓

骨：人骨

石器：石鏃（縄文時代）

今調査に先駆けて行われた，高速道隣接の町道拡幅工事に伴う坂城町教委による発掘調査の結果，弥生時代と平安時代の堅穴住居跡等が確認され，今回も同様の遺構・遺物が検出されることが予想された。調査の結果，町の調査区に近い西側（御堂川下流）では平安時代の堅穴住居跡や土坑が検出され，また調査区中央では周溝のみが残る古墳1基が確認された。また，これらの遺構の覆土を掘り込む中世の土壇墓群もあった。



第26図 山崎北遺跡全景

3軒の住居跡は平安時代後半のもので形状はいずれも南北に通る長軸が僅かに長い長方形であり，長軸約5mが2軒，約4mが1軒と規模は2種類に分けられる。そのうち調査区西隅の1軒のみに，東壁の南隅に石を組んで構築されたカマドがあった。また同時期の遺構として鉄滓や土器片を廃棄した土坑が見つかった。

古墳については，外径20mほどのドーナツ状に巡る不自然な浅い溝から，古墳時代と考えられる高坏や須恵器の破片が一括して出土したため，大規模な削平を受けて墳丘を完全に消失して，周溝のみ残る古墳であると判断した。



第27図 土壇墓

中世の土壇墓は，意識的に古墳の周溝や住居跡の覆土を掘り込んでいる傾向がある。形状は概して楕円形を呈し，総数9基のうち，6基が埋葬人骨（成人4体，小人1体，不明1体）を伴う。埋葬状況が判るものに，土壇上面に平石を置き成人1体を仰臥屈葬で埋葬した例（第27図）と，横臥屈葬した例が各1基ある。また，成人骨の頭部に，銅銭6枚を副葬していた土壇も1基ある。上面に石を配した小さな土壇には小人1体が埋葬されていた。なお，今後人骨の分析を行い，体格や年齢，性別などを明らかにする予定である。

13 やまぎき こふん やまぎき 山崎古墳・山崎遺跡

所在地：埴科郡坂城町中之条字山崎1685ほか

調査担当者：柳澤 亮

調査期間：平成5年10月12日～11月22日

寺沢政俊

調査面積：3,000㎡

豊田義幸

遺跡の立地：千曲川の支流である御堂川の左岸，大峯山麓の扇状地 標高508～516m

時代と時期：縄文時代，平安時代

主な検出遺構：竪穴住居跡1軒，土坑2基，埋没河川1条

主な出土遺物：縄文土器，石鏃，擦り石，土師器，須恵器

昨年度調査終了分と未調査地を除く調査区において，先ず遺構・遺物を検出するためのトレンチ調査を行った。その結果，調査区南東側で，主に縄文時代中期の遺物を含む埋没した河川を検出した。しかし，その周辺では当時の遺構は確認されてなかった。

また，調査区北西側（御堂川沿い）では一部で耕作土の下に遺物包含層が厚く堆積し，その下から平安時代の住居跡と土坑が切りあって検出された。

14 ひがしびら 東平古墳群

所在地：埴科郡坂城町大字中之条字開畝2381番地

調査担当者：若林 卓

調査期間：平成5年7月19日～11月19日

西村政和

調査面積：1,500㎡

松岡忠一郎

遺跡の立地：大道山西麓末端で，砥沢川の東岸に突き出した尾根状緩傾斜部

遺跡の特徴：古墳時代前期の古墳2基



第28図 東平1・2号墳全景（左が1号墳）

『坂城町誌』中巻（森嶋ほか1981）によれば，御堂川古墳群の5つの支群の1つが東平支群である。今回の調査対象は，砥沢川の東岸に突き出した尾根状緩傾斜部に東西に並ぶ2基で，西側（谷側）の古墳を1号墳，東側（山側）の古墳を2号墳と仮称する。

墳頂の標高は480m前後で，2号墳がわずかに高い。1号墳のすぐ西側は砥沢川の深い谷になり，その向こうに名沢川が形成した扇状地が広がっている。ただし，対岸の扇状地と古墳とはほとんど標高差が無く，視界的に開けるのは，むしろ砥沢川が開口する南南西の方向である。

1号墳 径16m、高さ2.5mの円墳である。主体部は木棺直葬で、主軸を尾根筋に直交してほぼ南北に置く。墓壙は長さ6.5m、幅1.7m、深さ1mの規模である。棺床は棺安置部分の墓壙底を断面U字形に掘りくぼめただけのものである。木棺自体の痕跡は遺存していないが棺床の形状から推定して、長さ5.1m、幅0.6mの割竹形ないし舟底状を呈する木棺であったと思われる。棺の両木口の外側には高さ1～0.8m、幅0.8m、厚さ10cmほどの大形の板石を立てている。ただし、棺の木口板そのものかどうかは確定し得なかった。

副葬品は棺内のみで、棺外には納められていない。鉄剣4、直刀2、漆塗り豎櫛40以上が検出された。また、木棺の腐朽に伴って落ち込んだ土層中から、底部穿孔壺や高坏が出土している。

墳丘は西側崖ぎわの部分はかなり崩壊している。墳丘の外表面には特に構造物は認められないが、墳裾を取り巻いて幅2m前後のテラス状緩傾斜面がめぐる。このテラスやその上の墳丘斜面から底部穿孔壺が破片となって出土した。

2号墳 一辺12～13m、高さ2mの方墳。主体部の主軸は東西を指向する。長さ4.9m、幅1.3m、深さ0.9mの墓壙底を断面U字形に掘りくぼめて棺床とし、割竹形ないし舟形木棺を納める。推定棺長3.9m、幅0.55mである。棺の両木口に高さ0.6m、幅1m、厚さ10cmほどの大形の板石を伴う。板石下の詰め石など細部の相違もあるが、基本的な構造は1号墳と同じである。副葬品は玉類40以上、漆塗り豎櫛4を検出した。いずれも棺内副葬である。主体部上の陥没坑からは壺、高坏が出土している。

墳丘には葺石が施されている。ただし、現状では、根石列など一部が残存するだけで、墳丘斜面全域に葺いてあったかどうかは不明である。墳丘裾には崩れ落ちた葺石に混じって、底部穿孔壺、壺の破片が少なからぬ量散乱していた。



第30図 1号墳主体部刀剣出土状況（東から）



第29図 1号墳主体部（南から）

なお、2号墳の東方10mほど離れて、山の斜面を掘削して造成した平坦部が見つかり、そこから、玉類30以上と壺・小形埴・高坏が出土した。埋葬を伴わないので、墓前祭祀場的な性格が想定されよう。

現在のところ、2基の古墳は5世紀中葉に1号墳→2号墳の順に築造されたと考えられるが、北方に存在する砥沢古墳を含めて、3代の首長墓系列を構成する可能性があろう。砥沢古墳は来年度に調査を行う予定である。

所在地：埴科郡坂城町坂城2749ほか 調査担当者：柳澤 亮 寺沢政俊 豊田義幸

調査期間：平成5年7月12日～10月12日 調査面積：1,000㎡

遺跡の立地：千曲川支流日名沢川右岸，南向きの崖錐面傾斜地 標高526～532m

遺跡の時代と特徴：平安時代の精錬を中心とした製鉄遺跡

主な検出遺構：竪穴住居（工房）跡2軒，削り出し遺構2基，土坑50基（うち精錬鍛冶炉6，炭焼成土坑3，廃棄坑5），排滓場1ヶ所，自然流路1条

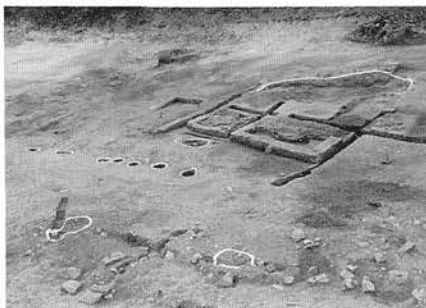
主な出土遺物：土師器，黒色土器，須恵器，灰釉陶器，擦石，砥石

〔製鉄関係〕鉄塊系遺物，羽口，含鉄椀形滓，鍛造薄片，粒状滓，釘，鉄製品

当センターでは平成4年に更埴市森所在の清水製鉄遺跡（平安時代後半）の調査を行い当時の精錬から鍛錬鍛冶に及ぶ製鉄の様相を明らかにしている。今回，試掘調査結果から本遺跡においても平安時代の製鉄関連遺構の存在を予想して調査に入った。

本遺跡は崖錐面に立地するため，遺跡全体に安定した遺構検出面はなく，幾層にも分かれて堆積した砂礫の崩落土中から，平安時代前半ころの製鉄関連遺構を確認・調査した。以下にその概要を記す。

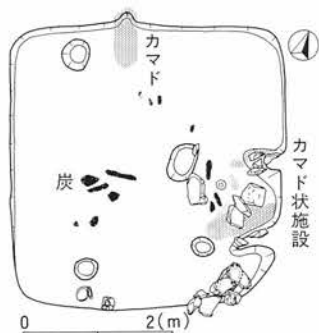
斜面上部では斜面をテラス状に削り出した遺構が2基並んで検出された。その1つは5×2mの楕円形で底面は部分的に赤く焼けている。覆土には遺物はなく，底面全体に木炭が10～20cmほどの厚さで残っていた。この状況から，この遺構は製鉄に伴う炭焼成施設かあるいは木炭置き場と考えられる。



第31図 削り出し遺構と土坑群

削り出し遺構の下の斜面には土坑が集中し，そのうちの6基を鍛冶炉として確認した。それらは径30cm・深さ10cmほどのすりばち状を呈す。内部壁の粘土は暗灰色に焼け，炉の外周は赤褐色に酸化する。覆土は炭粒の混ざる黒色土層で，炉の周辺には椀形滓や光沢のない1mmほどの鍛造薄片・木炭片が散らばる。この炉は屋外に造られた精錬に伴う鍛冶炉であろうと推測した。

2軒の住居跡は土坑群より下の平坦部にある。いずれも東壁に大型のカマド状施設を持つ。



第32図 竪穴工房跡 (1:100)

遺存状況の良い1軒では，それは削り出した両袖を礫と粘土で補強し，中央に火床部がある。付近の床面には木炭や鍛造剥片が散らばり，釘も出土していることから鍛冶施設の可能性が高い。また北壁には一般的な煮炊き用のカマド跡があり，什器も出土していることから，住居を兼ねた竪穴工房跡と思われる。

今のところ，本遺跡では精錬鍛冶を中心に，一部鍛錬鍛冶まで行っていたと考えられるが，採集した製鉄関係の遺物と土壌サンプルの分析を行って，更に詳細を明らかにしたい。

上信越自動車道関連 試掘調査

16 ^{しもだいら} 下平遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字上平513ほか

調査担当者：広瀬昭弘

調査期間：平成5年12月6日

柳澤 亮

対象面積：5,500㎡ 試掘面積：524㎡ 調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：千曲川右岸，烏帽子岳南麓の扇状地 標高660～665m

遺跡範囲の東側半分の滋野地区は，平成3年度の試掘調査で遺構・遺物ともにないことが確認されている。今年度の試掘調査は西側の祢津地区を対象として実施した。

調査は，対象地に幅2mのトレンチを10本設定し，遺構と遺物の確認を行った。土層の状況は，20～30cmを測る現耕作土の下にはすぐにしまりのないローム層が堆積している。ローム層の下50cmから礫の混入が顕著となり，どの層からも遺構・遺物は認められなかった。

平成3年度の調査所見と同様，調査対象地には遺構・遺物が検出される可能性はないと判断される。

17 ^{なかだ} 中田遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字中田361-1ほか

調査担当者：柳澤 亮

調査期間：平成5年12月6日～12月13日

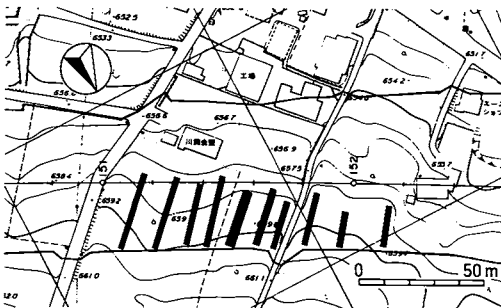
広瀬昭弘

対象面積：4,000㎡ 試掘調査：1,200㎡ 調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：千曲川右岸，烏帽子岳南麓の所沢川左岸の扇状地 標高637～646m

以前，遺跡内の町道開設時に古代土器片が採集されている。調査は，対象地に万遍なくトレンチを設定し，遺構と遺物の確認を行った。土層の状況は，現耕作土（20～40cm）下には基本的にローム層があって，その下はローム混じりの礫層が厚く堆積している。遺跡全体でローム層上面より遺構（住居跡？12軒，土坑1基，覆土に遺物を含む埋没河川1本）が検出された。住居は遺物から主に古代に当てはまるとするが，縄文時代と中世の遺物も包含層より出土している。

当遺跡範囲には所沢川に沿うように広く遺構が存在していると判断される。



第33図 下平遺跡トレンチ配置図（1：3,000）



第34図 中田遺跡トレンチ配置図（1：3,000）

北陸新幹線関連

18 こくぶん じしゅうへん 国分寺周辺遺跡群

所在地：上田市国分字西沖1994ほか 調査担当者：若林 卓 西村正和 寺沢政俊
調査期間：平成5年12月20日～12月21日 松岡忠一郎 広瀬昭弘
調査面積：95㎡

確認遺構：竪穴住居跡14，土坑19，溝跡2 遺跡の特徴：平安時代の集落

調査対象地は信濃国分寺跡の西方500mほどに位置し，国分寺跡より一段下位の段丘になるが漸移的に移行しており遺跡西側で一体となる。遺跡南側は千曲川の段丘崖である。

調査は対象地に任意にトレンチを設定し遺構・遺物の確認を行った。その結果，上記のように多くの遺構が確認され，隣接地点でも住居跡・道路状遺構などが確認された。

遺構はいずれも平安時代のもので，遺物も多い。信濃国分寺に関連する集落跡といえよう。調査面積が僅かなため詳細は明らかでないが，かなり密度が高い遺構が存在するものと予想され，今後の本調査で国分寺周辺の状況が明らかにされてくるであろう。

19 うえだじょう 上田城跡

所在地：上田市天神2丁目1924ほか 調査担当者：広瀬昭弘
調査期間：平成5年9月29日～9月30日
調査面積：100㎡

遺跡の立地：千曲川の低位段丘

上田城跡は南側の千曲川低位段丘を自然の要害として構築されている。今回の調査対象地はこの千曲川低位段丘面である。トレンチ調査で土層の観察・遺構・遺物の確認を行った。調査区では砂層・砂礫層が連続して堆積しており，千曲川の氾濫原と考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

20 みらくどう 弥勒堂遺跡

所在地：上田市上塩尻せき志139ほか 調査担当者：広瀬昭弘
調査期間：平成5年12月20日～12月21日
調査面積：180㎡

遺跡の立地：虚空蔵山麓の低位段丘

今年度の調査対象は，住居・小鍛冶遺構・墓などからなる古代・中世の集落跡が検出された平成3年度調査地点の段丘崖下にあたる。対象地に6本のトレンチを設定し，土層観察と遺構・遺物の確認を行った。表土層下は植物遺体を含む青灰色粘土層や砂層が厚く堆積し，遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 長野調査事務所

1) 発掘調査の概要

調査区域 更埴市森・雨宮・屋代地区，長野市篠ノ井・川中島・中越・稲田・三才地区

調査遺跡数 11遺跡 (62,800㎡)

調査面積

上信越自動車道関係：更埴市大穴遺跡 (8,000㎡)・更埴条里遺跡 (10,400㎡)・屋代遺跡群 (13,250㎡)・大境遺跡 (500㎡)・窪河原遺跡 (9,000㎡)

北陸新幹線関係：更埴市更埴条里遺跡 (1,100㎡)・屋代遺跡群 (3,800㎡)・長野市篠ノ井遺跡群 (2,200㎡)・篠ノ井～川中島間 (8,200㎡)・浅川扇状地遺跡群 (2,650㎡)・三才遺跡 (3,700㎡)

調査期間 平成5年4月8日～12月24日

本年度は上信越自動車道及び北陸新幹線建設関連の遺跡の調査が中心となった。上信越自動車道関係の遺跡のほとんどは前年度以前からの継続調査である。これに対して北陸新幹線関係は本年度から本格化した。内容や範囲が不明な遺跡が多いため、まず面的調査を必要とする範囲の確認から着手した。路線幅が12～18mと狭少で作業条件が悪い上、遺跡の多くは沖積低地に立地して地下水位が高く、高速道路関係の調査にはなかつた苦労を経験した。

更埴市内では上信越自動車道と北陸新幹線が併走し、同一遺跡を相方で調査することになった。最も注目すべき成果は縄文時代中期～晩期の様相が把握され始めたことだろう。屋代遺跡群のうち上信越自動車道に関する調査地点では、地下5～6mから縄文中期初頭～後葉の集落が4面にわたって発見された。集落は恐らくは自然堤防の頂部に立地するのだろう。同時代の地表面は後背地側の更埴条里遺跡にまで広がっており、離水域は広く、土地利用に関する資料も得ることができた。集落こそ不明ながら、後期～晩期の環境や土地利用に関する知見が蓄積されており、長野盆地の縄文文化研究を飛躍的に向上させるものと期待される。更埴市内の諸遺跡からは弥生時代～中・近世についても豊富な資料が得られた。9世紀代を中心とした集落・水田に関する資料は、過去2年の調査成果を補強するもので、地域の古代史の認識を一層深めることができた。

篠ノ井地域でも長野自動車道で調査した篠ノ井遺跡の一角を新幹線が通過するため、改めて調査することになった。弥生時代後期の円形周溝墓が群在する墓域の確認は、篠ノ井遺跡の評価にとっても、集落構成全般を考える上でも重要である。

篠ノ井～川中島間では築地地点の平安時代集落が注目される。千曲川右岸側の集落はこれまで未解明だっただけに、その意義は大きい。

旧長野市内から三才地域にかけては、部分的な調査ではあつたが中～近世の水田・墓等の新しい知見が得られた。また浅川扇状地遺跡群の試掘調査では、弥生時代～中・近世の包含層が数枚確認されており、遺跡範囲についての新資料を得た。この遺跡群は広範囲に広がり、長野市教育委員会が点々と調査を実施している。それらを総合的に理解する好機といえ、次年度の調査に大きな期待が寄せられている。



地図3 長野事務所関係調査遺跡 (1 : 50,000)

上信越自動車道関連

1 おおあな 大穴遺跡

所在地：更埴市森大字大穴

調査担当者：青木一男・山中健・伊藤友久・依田茂

調査期間：平成4年4月8日～7月31日

主な検出遺構

調査面積：7000m²

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	墓石 土坑	溝	古墳
弥生	15	1		1	
古墳(中)			6	1	
古墳(終)					6
平安	10	1			

遺跡の立地：後背湿地に面した崖錐の緩斜面

時代と時期：縄文・弥生・古墳（中，終末期）・平安

遺跡の特徴：縄文散布地，古墳群，弥生・平安集落域

出土遺物：押型文・諸磯C式，灰釉陶器，羽釜，羽口，椀型滓，釘

〈古墳〉須恵器，土師器，耳環，鉄鏃，刀子，釘

弥生時代 栗林式新段階後半（百瀬式併行） 中期後半

崖錐面末端部に展開する集落の一端を調査する。前面に湿田を見下ろす微高地となっている。住居址は主軸側にやや長い隅丸方形プランで，地床炉は中央にある。住居址の切り合い関係はなく，散在化傾向を示すが，松原・榎田遺跡などにみられた幅20cm前後の直線的な溝，ピット群，1×1間の建物倉が検出できた。

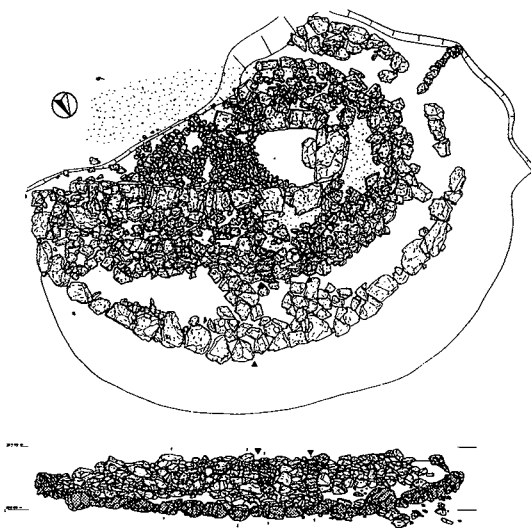
土器は壺・甕・鉢・高坏等があるが，高坏は少ない。壺には袋状口縁が散見される。文様帯は頸部付近に集約される傾向にある。甕の文様帯には羽状文・波状文とともに簾状文がみられ，コの字重ね文もある。壺・鉢・高坏などに一定量の赤色塗彩が施されている。

古墳時代 中期前半

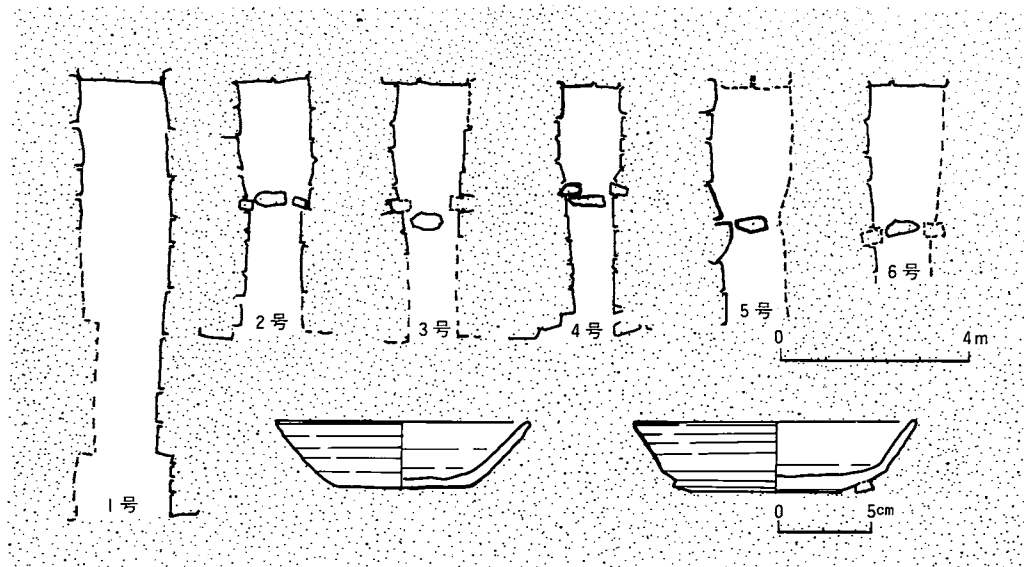
大穴遺跡の広がる崖錐面は，4～7世紀の古墳群である（仮称）森將軍塚古墳群が乗る尾根の眼下に位置する。同崖錐面には小規模な沢がいく筋も刻み込まれるが，沢筋付近には5世紀の土器が集中する傾向があり，礫を伴う土坑内に廃棄される場合もある。屈折脚高坏（和泉型）が主体をなし，小型丸底壺・二重口縁壺とともに，円筒埴輪片・馬骨も若干ながら出土した。調査者は水と関連する祭祀を想定しているがデータが限られている。

古墳群

昨年行われた試掘調査によって2基の古墳が確認されていたが，本調査によって6基が明らかとなった。北信濃は近代の蚕糸業の盛行とともに山間地の開墾が進み，多くの古墳が消滅したが当古墳群も例外ではなく，遺跡地図に周知されな



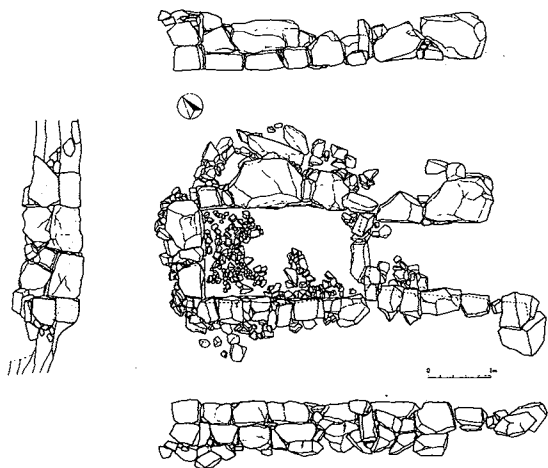
第35図 第1号古墳平面図および見通し図（1：80）



第36図 石室平面形態 (1:80) および5号墳出土須恵器 (1:4)

いほど破壊を受けている。かろうじて墳丘を残していた1号墳と、2～6号墳とでは、その構築時期、構造に差異がみられる。1号墳は、塚穴の畑と呼ばれ、明治ころまでは横穴式石室が開口していたようであり、石室内から土器を採集したという伝承がある。盗掘が激しく、遺物はごくわずかだが、細身の柳葉形をした長頸鉢がある。関部が直角に切れ込む片丸造りである。墳丘構築は、昨年調査を行った清水製鉄遺跡内古墳に共通し、①石室裏込めを埋め込み石垣で区画しながら石室を構築する。②埋め込み石垣と墳丘裾石垣の間を土砂によって充填あるいは版築する。なお、埋め込み石垣はいくつかのブロックに別れており、石室奥壁より順次入口側に向かって墳丘が構築されたことが明らかとなった。2～6号墳は、玄室の長さが2m前後という小規模な石室という点で共通し、玄室と羨道の境界に立柱石を立て玄門を形作る。墳丘に埋め込み石垣はなく、石室の裏込めも貧弱である。副葬品は耳環・刀子・鉄鏃を少量検出したにとどまり、700袋の土嚢を水洗いしたが玉類は1点も確認できなかった。須恵器は食器が主体となっており、畿内飛鳥編年IV期以降の器種組成を示すが、その主体は8世紀代と考えざるを得ない。出土位置の多くが前庭部付近にあり、羨門付近の墳丘上から崩落したものと考えている。

当古墳群の構築年代は7世紀～8世紀初頭と想定する。



第37図 第2号古墳石室平面・側面図 (1:120)

こうしよくじょうり
2 更埴条里遺跡

所在地：更埴市雨宮返町

調査担当者：河西克造 井口慶久

調査期間：平成5年4月8日～9月10日

上田 真 清水 弘

調査面積：10,400㎡（総計70,000㎡）

徳永哲秀 町田勝則

時代と時期：縄文時代後期・晩期，弥生時代～近・現代

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防背面～後背湿地

遺跡の特徴：9世紀代の洪水で埋没した条里水田，水田埋没後の10世紀の集落，縄文時代後・晩期の焼土跡，弥生時代の溝状くぼみ，古墳時代の土坑，中世～近・現代の堰

主な検出遺構

遺構時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	柱穴	溝	井戸	焼土跡	水田	畦畔(大畦)	その他
縄文		2	10				13			遺物集中
弥生			53	2						
古墳			40	13						
平安	44	4	38	322	20	3		1	2	
中世					1					
近・現代					1					

主な出土遺物

土器：縄文土器（後期・晩期），弥生土器（中期前～中葉・後期），土師器（古墳時代前期），青磁・緑釉陶器・土師器・須恵器・灰釉陶器（平安），青磁ほか中・近世陶磁器

土製品：布目瓦

石器・石製品：打製石斧（縄文），石包丁・石鎌（弥生）

金属製品：私印（銅製），鉄鎌

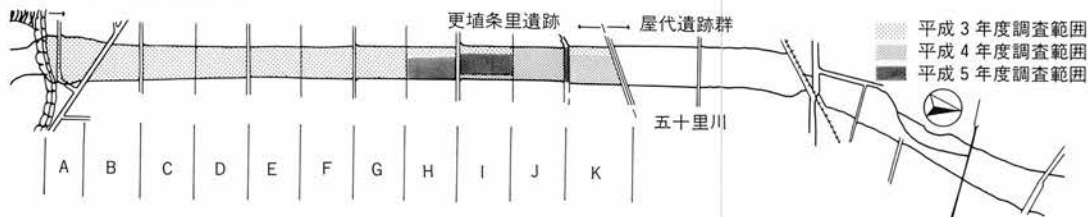
その他：獣骨

遺跡の概要と調査の経過

本遺跡は千曲川右岸の自然堤防背面～後背湿地に立地する水田遺跡である。上信越自動車道建設に伴う発掘調査は，千曲川右岸を縦断するかたちで平成3年度から開始され，本年度の調査は残るH・I地区を対象として実施された。以下時代ごとに概要を記す。

縄文時代

晩期に比定される遺構では，焼土跡と4基のピットで構成された建物跡が検出され，Ⅷ層から晩期前半～中頃の粗製土器と，ほぼ完形の打製石斧が多数出土した。Ⅸ層から焼土跡と微量ながら後期前葉の土器が出土した。また昨年度断面調査で終わった中期に比定されるⅫ層から焼土跡が数基確認された。



第38図 更埴条里遺跡の調査範囲 (1:14,000)

弥生時代

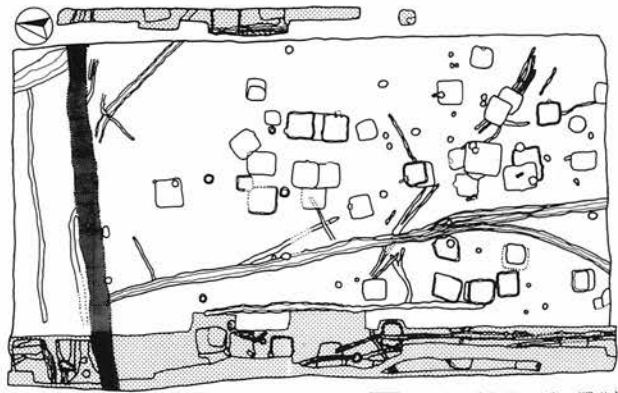
溝状の浅い窪み（SD-881）が検出され、また本址からは県内最古のひとつになる完形の石包丁も出土した。出土した壺と蓋から中期前～中葉に比定される。該期に帰属する遺構は本址のみで、過年度の調査では確認されておらず、時期的な問題、稲作との関連の問題は科学分析の結果を待って検討したい。

古墳時代

中期初頭の小形丸底壺形土器が出土した土坑が1基検出されたのみである。

平安時代

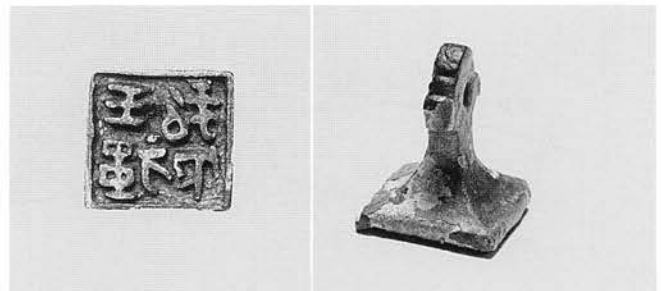
今年度も千曲川の洪水で埋没した水田が確認された。H地区で確認された水田区画は、東西南北方向に2条の大畦が走り、内部は小畦により南北に細長い区画がつけられた、いわゆる「半折型」を示す。砂層より出土した遺物で特筆すべきものに銅製の私印がある（第40図）。印字は「王強私印」と判読できそうであり、集落に近接して出土し、層位から9世紀後半～10世紀と推定され、県内では松本市三間沢川遺跡など少数の出土例があるのみで貴重な発見である。砂層上面では水田埋没後に構築された竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝が検出され、本遺跡ではI地区を中心に10世紀代の集落が展開していることがわかった（第38図）。遺構の分布は比較的東側で密集する傾向があり、南北の溝に沿って住居跡などが構築されている。住居には軸線の異なりが見られるため、時期差が想定される。また今回の調査ではI地区の断面観察で洪水が少なくとも2回あったことが認められ、さらに、プランをほぼ同じくして複数の床面がある住居があったため、洪水による建て替えがあったことがわかった。遺物では住居と溝から出土した越州窯青磁は県内では6例目であり、特筆できる。私印の出土とともに、有力者の存在を指摘できる。



第39図 I区平安時代調査区（1：1,200）

中世以降

圃場整備前の用水である蛇田堰がI地区で検出された。遺物から中世までさかのぼることがわかったが、平安水田に伴うかどうかは確認されなかった。



第40図 I区出土銅印

3 やしろ おおぎかい
屋代遺跡群・大境遺跡

所在地：更埴市雨宮

調査担当者：寺内隆夫・西香子・瀧井英知・吉沢信幸・馬場信義

調査期間：平成5年4月5日～12月21日

月原隆爾・出河裕典・市川桂子・賛田明・澤谷昌英

調査面積：

奥原聡・水沢教子・宮島義和・大和龍一・島田正夫

伊藤友久・依田茂

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上

時代と時期：縄文時代中期～晩期，弥生時代後期，古墳時代，奈良～平安時代，中世。

遺跡の特徴：沖積地での縄文時代の集落。自然堤防上の弥生時代以降の集落。古墳時代以降の水田・畠。

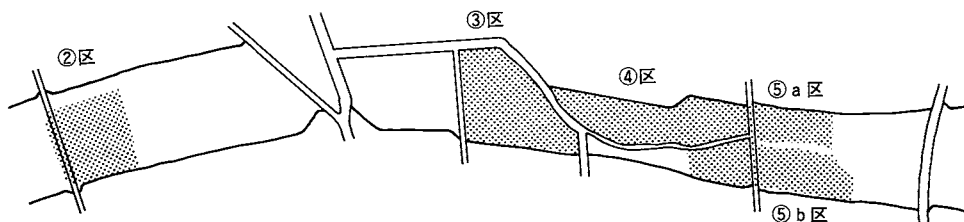
主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	溝	焼土	水田・畠	その他
縄文	54	4	411	22	105		杭列，遺物集中区など
弥生～古墳	63	11	685	25	2	②③④区 で水田	
奈良・平安	145			134	4	②③④区 で水田と 畠	杭列など
中世	1		182	55	2		

主な出土遺物：縄文時代中期・後期・晩期の土器・石器，ヒスイ大珠，人骨・獣骨，弥生時代後期の土器，古墳時代～平安時代の土器・鉄器，埴瓶形硯・把手付き円面硯，雨宮廃寺の軒丸瓦，中世陶器・鉄器，木製品

1. 沖積地における層位発掘と縄文集落 昨年度，⑤b区において地表下4mまでトレンチを掘削し，縄文時代中期後葉の包含層を確認した。本年度は，この包含層を平面的に調査し，縄文中期後葉の集落を発見することができた。また，その上下層においても縄文時代の各時期の遺構・遺物が検出された。その出土層位は第42図のとおりである。沖積地において層位的に縄文時代の集落を調査できた例は皆無に等しい。そのため，今回は縄文時代を中心に報告を行うこととする。

2. 縄文時代中期初頭（XV層上面）～中期中葉（XIII層）の様相 ⑤区において，遺構の確認で



第41図 屋代遺跡群平成5年度調査範囲 (1:6,000)

きた最下層はXV層上面である。これ以下の層については出水の処理と安全確保が難しく、調査を断念せざるを得なかった。

XV層上面では焼土跡が点在し、その周囲で少量の五領ケ台式併行期の土器や磨石の出土がみられた。また、XV層～XIII層の間では粗い砂が幾重にも堆積しており、五領ケ台式併行期には洪水が頻繁にこの地区を襲っていたようである。しかし、各々の層理面には焼土跡が確認されており、洪水の合間をぬってこの地区が利用されていたことがうかがえる。

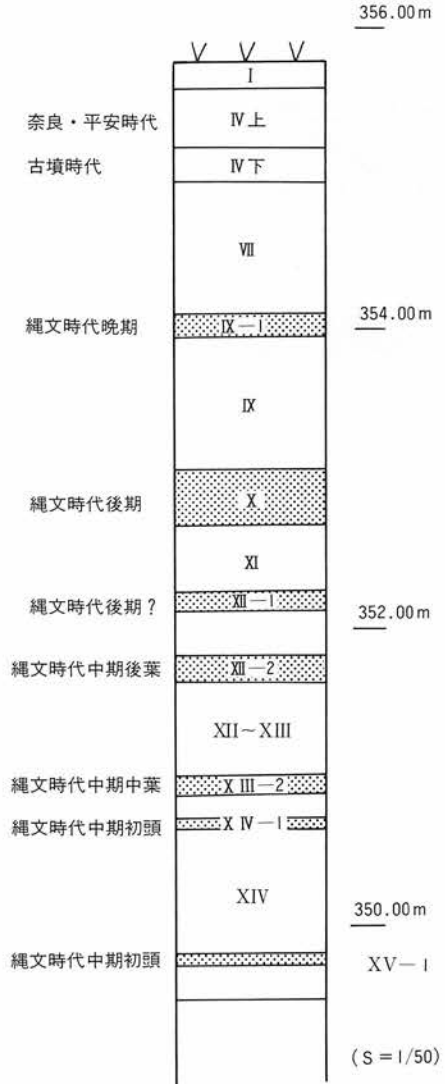
この地区で土地が安定し、集落が形成されるのは五領ケ台II式併行期（XIV-1層）になってからである。XIV-1層からは、⑤区の北よりで7軒の竪穴住居が発見されており、来年度調査区に集落の主体が存在すると考えられる。同一の住居から五領ケ台式系の土器と仮称「深沢式」系の土器が出土しており、後者の編年的位置づけを確定し得る良好な資料となろう。五領ケ台式および併行期の土器の層位的データとともに今後注目されよう。

五領ケ台II式併行期の集落面とは間層をはさみ、XIII-2層では勝坂II式（新道式）に比定される赤色塗彩の浅鉢形土器が出土し、同時期と思われる住居が1軒見ついている。

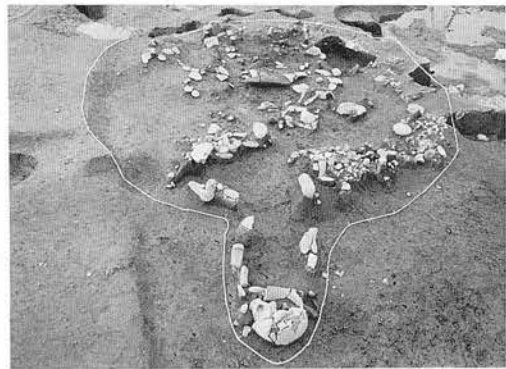
3. 縄文時代中期後葉（XII-2層）の集落 XII-2層は腐植化の進んだシルト質黒色土である。この層に対比できる層は④区以南へも広く分布しており、土地が安定した状態であったことを示している。



第43図 四隅に立柱石の残存する敷石住居跡



第42図 ⑤b区基本土層略図



第44図 周礫を有する柄鏡形住居跡



第45図 地床炉をもつ掘立柱建物跡



第46図 屋外埋甕群と遺物集中

この層で検出された加曾利E III(2)~IV(4)式併行期の集落は、⑤b区から北東に広がると考えられる。集落の縁辺部にあたる④区や⑤a区では竪穴住居などの遺構が激減し、杭列が検出されている。集落は⑤b区の東側を中心に環状となる可能性があり、墓坑は⑤b区東よりの中央部に多く検出されている（巻頭カラー）。

建物には竪穴住居と掘立柱建物が存在する。竪穴の系列では、加曾利E 3式併行の段階から柄鏡形敷石住居が構築され始めている。非常に細長い張り出し部が、掘り込みをほとんどたずずに存在し、竪穴部分に付属する構造となっている。この点が本遺跡の特徴といえよう。また、加曾利E 4式併行期には周礫を配する柄鏡形住居（第44図）や四隅に立柱石をもつ敷石住居（第43図）がある。掘立柱建物では、中央に地床炉をもつ例（第45図）もある。

墓では、墓坑に屈葬人骨を埋めたもののほかに竪穴住居跡の覆土を利用した例（第44図）も存在する。埋甕は住居の入り口部（第47図）と張り出し部に存在する（第44図）ほか、集落の内側の屋外に集中して埋められている例（第46図）や、集落の縁辺部にあたる④区でも見つかっている。

出土土器をみると、加曾利E式の影響が色濃くみられる土器を主体として、北信地域の在地の土器である圧痕隆帯文土器が加わっている。この他県内では類例の乏しかった加曾利E 3式併行期の大木式土器やその影響を受けた土器が出土しており、注目されるところである。また、獣骨の出土が多い点が特徴といえる。住居跡の覆土中に10個体以上のイノシシ骨がまとまって廃棄されたり、1個体のイノシシ頭部を土坑に埋めた例などが確認されている。

4. 縄文時代後期（X層）～晩期（IX-I層）

IX層～X層にかけては、北あるいは西側からの洪水砂の堆積が頻繁に認められる。そのため数10cmの単位で土層が変化し、細別時期ごとの



第47図 住居入り口部の埋甕出土状況

対比を困難にしている。④区と⑤区で、X層とその上層で検出された焼土跡は、堀之内式から加曾利B式期と考えられる。

IX-1層はシルト質で腐植化が進んでおり、XII-2層以来の安定した状況を示している。⑤a区において佐野式に併行する土器が出土しており、焼土跡や溝跡が見つかっている。

5. 弥生時代～古墳時代（IV b層）の様相 自然堤防のもっとも標高の高くなる⑤a区において、昨年⑤b区に引き続き、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が確認されている。集落は断続的ではあるが古墳時代を経て平安時代にまで存続する。また、②・③区と、④区南半部のIV b層上面で古墳時代の水田跡が検出されている。しかし、集落との境界部分については、後世の削平によって捉えることができなかった。

6. 奈良・平安時代（III～IV a層）の様相 ⑤区については、古墳時代から継続的に集落が営まれているが、②区および③区の集落は、昨年度調査された集落を含めて、約100m前後の間隔があり、その形成時期は奈良時代末から平安時代の初期に比定される。そして、集落内の大半の遺構は、9世紀後半（IV a層上面）の水田・畠によって壊されている。

III層（9世紀後半の洪水砂）は④区まで確認できるが、⑤区では後世の削平のためはっきりとしていない。しかし、住居跡の覆土中に洪水砂の流れ込みが認められることから、洪水の被害は水田・畠跡のみではなく、集落にもおよんでいたことが判明した。

洪水砂で埋没した水田・畠跡は②・③・④区で検出された。特に、③・④区においては、水路が比較的標高の高い部分に設置され、その周囲に畠を配置した様子が認められている。水田の区画は、②区の集落わきの区画、③区の水路わきの区画などで地形の制約を受けて変形しているが、それ以外は更埴条里遺跡から続く条里プランに則っている。

洪水砂後（10～12世紀）の住居跡は、昨年の所見同様③区～⑤区にかけて点在する様相を示している。

7. 中世の様相（III層上面）の様相 昨年の調査に引き続き、⑤区において室町時代以降と考えられる井戸、溝跡が検出されている。屋敷地の一部にかかっていると考えられるが、包含層が大きく削られており、掘立柱建物の柱穴などはほとんど検出できなかった。

本年度の調査では、耕作土直下から地表下6mあまりの間に、中世から縄文時代中期の遺構や遺物が検出された。特に、沖積地において縄文時代の集落が重層的に発見された意義は大きい。来年度は、その縄文集落の北半部を調査する予定であり、多くの成果が期待される。



第48図 縦穴住居内出土の雨宮廃寺瓦

4 くはがわら 窪河原遺跡

所在地：更埴市大字雨宮字窪河原

調査担当者：伊藤友久 依田 茂

調査期間：平成5年8月2日～10月8日

青木一男 山中 健

調査面積：当初面積6,500㎡

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上及び自然堤防間の低地

時代と時期：自然堤防の形成と安定時期は平安時代、遺構と遺物は中世・近世

遺跡の特徴：中世の墓域・居住域

主な検出遺構

主な出土遺物

土葬墓1基

土器・陶磁器：土師器・須恵器・珠洲焼・内耳鍋・かわらけ・

火葬墓1基

常滑・瀬戸美濃系陶器・山茶碗・青磁・伊万里

火葬墓3基

焼・松代焼

土壙32基 溝跡8条

石製品：砥石・石硯・石臼

戦後の薩摩芋の室38基

鉄・銅製品：釘・毛抜・他銭貨

調査は、平成2年度に引き続き実施されたものである。今回の調査によって、中世（13～14世紀）の墓域と居住域が新たに検出された。

墓域においては土葬墓や火葬墓群、そして火葬を施したいわゆる火葬施設が確認された。この内、土葬墓からは、保存状態の良い人骨が出土した。副葬品は確認されないが、その埋葬形式に中世期の性格が表れる。火葬墓は、地面上に玉砂利を敷き詰め楕円形の輪郭を形造る。その集石直下からは、火葬骨を曲物に納めた状態で、あるいは玉砂利に覆われた状態で確認された。また火葬施設には煙道が付属する遺構がある。居住域においては今回も建物跡は認められなかった。居住域としての不明瞭さは、逆に集落からの一定の距離を保つ地域ともいえる。比較的多く検出された土壙は、炭化物や焼土が混入するものや、一辺4m位の竪穴状遺構の性格をもつものなどが注目される。

この他、遺構外から銭貨や近世陶器が出土しているが、これに伴う遺構は確認されていない。

全体的に遺構の状態は、上物の長芋畑や花火工場及び攪乱の影響により保存状態は必ずしも良好とはいえない。また、本遺跡の立地する地形は自然堤防形成によるものであるが、その基盤の砂礫層中（トレンチ試掘調査により現地表面下約8mまでは砂礫層を確認）からは、摩滅した土器破片が混在して出土した。その内容は、前回調査時の所見と同様で、平安時代は自然堤防の形成期だったことを裏付けるものであった。この自然堤防は、遺構の存在(年代)からは13世紀以前には既に安定していたことになる。



第49図 窪河原遺跡の火葬墓

北陸新幹線関連

5 更埴条里遺跡

所在地：更埴市屋代清水

調査担当者：鳥羽英継 田中正治郎

調査期間：平成5年4月14日～10月7日

吉江英夫 宮下裕治

調査面積：1,100㎡

広田和穂

調査方法：重機によるトレンチ調査。 遺跡の立地：千曲川右岸の後背湿地。

概況：調査地点は、現水田面である平坦部と、一部、山際の一段高まった部分からなる。平坦部からは、最低3枚の田面が確認でき、出土遺物から、中世以降のものと判断した。また、山際部分からは、テラス状の地形と、それに伴う溝、4基の土壇が確認できた。

調査結果：平坦部の大部分は水田跡であるが、明確な畦畔は確認できず、遺構も検出されないことから、本調査の必要はないと判断した。山際部分は、トレンチ調査でテラス状の地形と溝の大まかな性格が確認できた。また、土壇は、掘り込みが現耕作土の直下からであったため、新しい時代のものと判断し、面的に拡大しての調査の必要はないとした。



第50図 試掘風景

6 屋代遺跡群

所在地：更埴市屋代773-1, 1082他

調査担当者：田中貴美子 太田和夫

調査期間：平成5年4月13日～同年12月21日

鳥羽 英継

調査面積：3,800㎡

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防とその後背湿地

時代と時期：古墳時代末期～平安時代前期

遺跡の特徴：古墳時代末期～平安時代前期の居住域，平安時代の水田

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	溝	水田 (面)
古墳	1				
奈良 ～平安	24	18	144	18	2

土器・土製品：土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・墨書土器・刻書土器・中・近世土器，円面硯，土錘
石器・石製品：砥石・紡錘車・石鉢
鉄器・鉄製品：刀子・鋤(鋤)頭

本遺跡は千曲川右岸の自然堤防上，及びその後背湿地に位置する。全長約790m，幅約12mを調査範囲とし，蛇田用水付近を南限に，更埴条里遺跡と接する。本年度は④・⑥-b・⑥-dの本調査と，①・②の試掘調査を行った。本調査を行った地区からは平安水田，古墳時代末

期から平安時代前半の居住域が検出され、そのうち⑥-bは水田と居住域の境であった。

水田は④・⑥-a・⑥-bから検出された。いずれも地表下約2mからみつき、その上層には1~1.5m堆積した洪水砂層が存在した。畦畔は4本あり、1本は幅約2.3m、高さ約30cmで南北方向にのびるものが④からみつかった。2本は④・⑥-aにあり、幅約70~80cm、高さ約10~15cmで東西方向にのびる。その

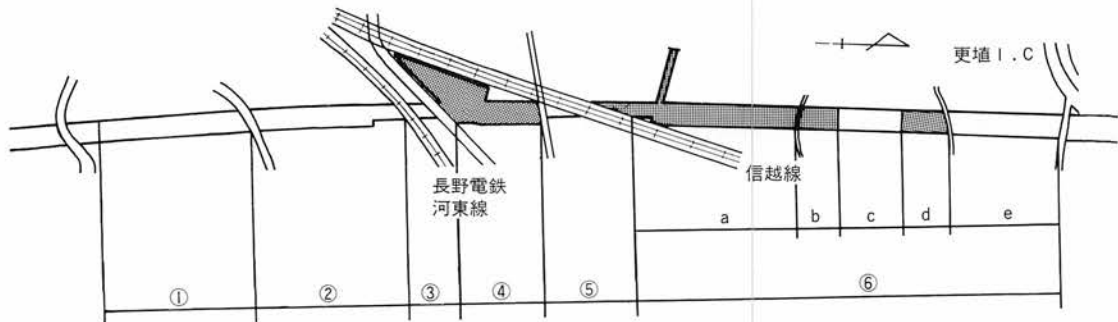


第51図 ⑥-b区大畦畔と土手状の高まり

うち、④のものは前述した畦畔と直交する。もう1本は⑥-bから検出された大畦畔の始まる部分を含むもので、畦畔内に溝をもつ。溝を含む幅は約4.3m、高さは約15~20cm(うち溝部分の幅1.8m、深さ30cm)であった。この大畦畔は、水田と居住域のあいだにテラス状に一段高くなっている部分があり、ここから伸びるようにはじまっている。この畦畔のテラスよりの盛土中からは、獣頭骨が礫を伴って出土し、農耕儀礼との関連からも興味深いものといえよう。また、この両側の水田への水口も検出している。

水田と居住域のあいだには、テラス状に高くなっている部分から1mくらい居住域よりに、約1mのどて状の高まりが、弧を描くように調査区を横切って検出された。この遺構も洪水砂に覆われていた。検出当初、このどて状の高まりは水害を防ぐ施設とも考えたが、⑥-dの居住域のなかからも、高さは低いが同様の高まりが⑥-bのどて状の高まりにつながるような方向にみつかったことと、構築年代が9世紀半ばから後半に求められることから、富豪層の出現に伴う区画を意図した構築物と考えられる。

居住域は⑥-b・⑥-dから検出され、遺構の広がりから⑥-c・⑥-eにもものびていると予想される。また、試掘を行った②も居住域であることが分かった。本調査地区の遺構の分布は⑥-dに偏っている。この地区では古墳時代末期から竪穴住居が現れ、奈良~平安時代前半(9世紀後半)までの約200年にわたって生活が営まれる。しかし、洪水砂に覆われた後は、生活に伴うような遺構はほとんど検出できなかった。



第52図 屋代遺跡の調査範囲 (1:60,000) ■平成5年度調査終了

7 篠ノ井遺跡群

所在地：長野市篠ノ井塩崎

調査担当者：広田和穂 宮下裕治

調査期間：平成5年9月20日～12月21日

綿田弘実 馬場信義

調査面積：1,600㎡

井口慶久 青木一男

遺跡の立地：千曲川左岸の自然堤防

清水 弘 依田 茂

時代と時期：弥生時代後期，古墳時代後期～終末期，奈良時代，平安時代，中世

遺跡の特徴：弥生時代後期の居住域・墓域，古墳時代後期～平安時代前半の集落域

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	溝	周溝墓
弥生後期					19
飛鳥・奈良	46	12	2		
平安	17		3		
中世				1	

主な出土遺物

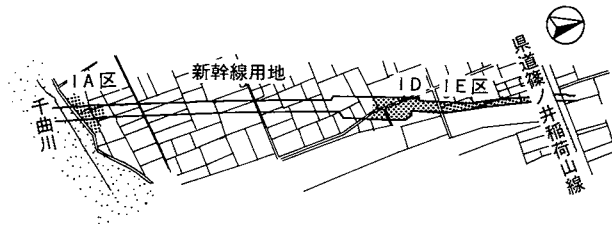
土器・土製品：弥生後期土器，土師器

須恵器，青磁，瓦塔

石器・石製品：砥石，管玉

鉄器・鉄製品：鉄斧・紡錘車・鉄鏃・刀子

その他：人骨・獣骨（馬），ガラス小玉

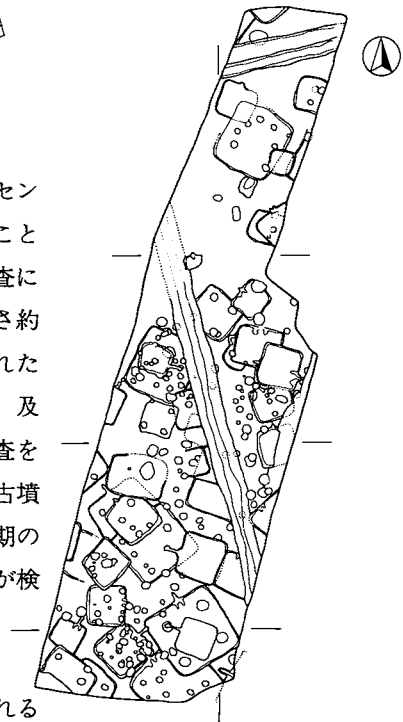


第53図 平成5年度の調査区

篠ノ井遺跡群は、これまでも何度か長野市教委や当センターにより調査されてきたが、今回新幹線が敷設されることになり、その事前調査を行った。トレンチによる確認調査により、千曲川左岸堤防から石川条里遺跡との境まで、長さ約470m、幅約10～20mは本調査が必要であると判断されたが、工事側との調整により、今年度は堤防付近（1A区）及び石川条里遺跡との境付近（1I）・1E区）だけの調査を行った。その結果、1A区では弥生時代後期の墓域及び古墳時代の集落域が検出され、1D・1E区では弥生時代後期の集落の縁辺部及び古墳時代末～平安時代はじめの集落域が検出された。

1D・1E区の概況

弥生時代後期については遺跡の縁辺部にあたると思われるが、特筆すべき遺構として土器棺墓があげられる。これは、底部を穿孔した壺の頸部から上を切断し、もう一個体の壺の



第54図 1D・E区古代面全体図 (1:800)

胴部から下を蓋として用いた、幼児埋葬用のものと思われる。

古墳時代～平安時代の集落域に関しては、わずか1300㎡の面積の中に50軒を超える竪穴住居の密集が見られた。このうち、7世紀後半の531号住居は、鉄製紡錘車・鉄斧はじめ鉄製品を多くもち、金床石と考えられる石も出土したことから、鍛冶遺構の可能性も考えられる。また、平面形も約8m四方とやや大規模で、遺物量もテンバコ10箱を数えるなど、いろいろな面で突出していた。

この他、検出面及び出土遺物から鎌倉時代以降と思われる大溝が2条検出された。南北方向に近い溝は幅3m、東西方向に近い溝は幅5mと、規模の点で異なるが、これらの溝は調査区外で直交するかもしくは方形の区画を構成することが考えられることから、中世の屋敷地を区画する溝であることも考えられる。

Ⅰ A地区の概況

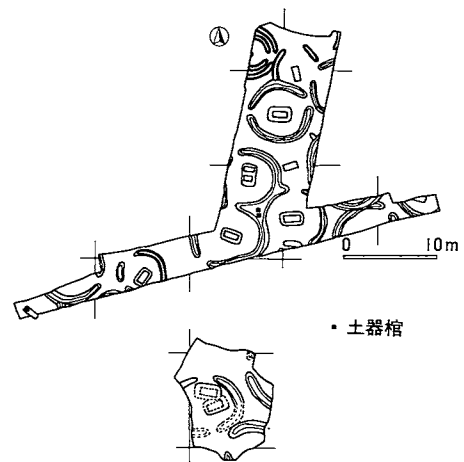
Ⅰ A地区は千曲川に接する自然堤防末端に位置し、Ⅰ E・D地区の後背湿地側自然堤防末端部と対局の位置関係となる。次年度はその間の自然堤防中核部の調査となる。当地区においてはⅠ E・D地区同様、7世紀末～8世紀の集落域の一端を検出したが、鍛錬鍛冶滓、鍛冶用炭焼成土坑の存在が明らかとなった。検出面は3面あり、弥生時代後期の墓域の下層1mには、土器は伴わないながらも焼土址が確認された。縄文時代の包含層であろう。

〈弥生時代後期・箱清水期の墓域〉

調査区全面から19基の不整円形周溝墓が検出された。墓域は次年度調査区に広がる。生活遺構がみられず、しかも墓どうしは溝を共有しながらも魚鱗状に広がり、切り合うことがないことから、一定の時間内において次々と構築された一定集団の墓域の一端を調査したことになる。

土器は周溝内上層に破片となって多くみられ、本来墳丘上に散在していたと思われるが、一定の様相を示している。壺は無花果形をなし、頸部は緩やかに外反する。T字文が定型化する以前のもも含まれる。甕は口縁部が短く、体部文様に斜線文を施す例もある。有段口縁の高坏は調査の中での観察では確認できなかった。調査段階の土器の観察によれば、千野浩氏の弥生時代後期編年3段階に位置付き、東海・北陸編年との対応から畿内庄内式以前と考えて良いものとする。

周溝墓のプランは円形、あるいは不整の円形をなし、中部高地型櫛描文分布圏の弥生時代後期に盛行する形態で、いずれも、小型の周溝墓であるという特徴をもつ。ブリッジは2ないしは3か所確認でき、対面状に開口するものが多い。



第55図 Ⅰ A区弥生後期墓域全体図(1:80)

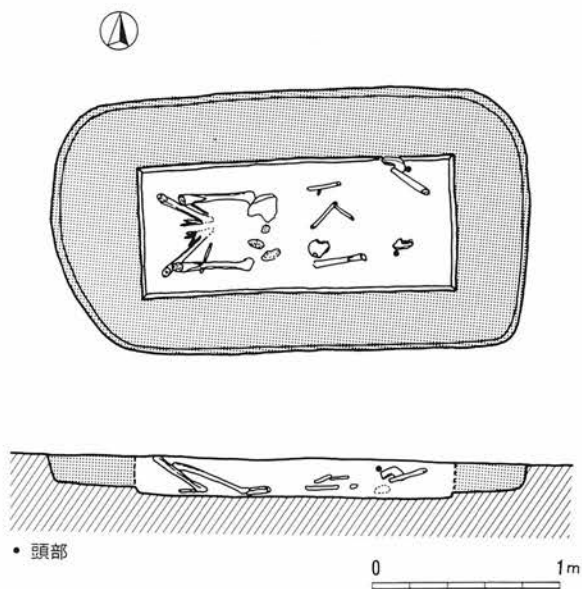
周溝検出面で墓壙が確認できる。周溝最下面に対して墓壙最下面はやや高い。断面による観察では墳丘は確認できていないが、墓壙に棺を埋葬した後、周溝を掘削した土を盛り上げる程度の墳丘があったものとみたい。

埋葬主体部は人骨の残りが良く、基本的には一区画に墓壙がひとつであり、一体を埋葬する。例外的に、一墓壙内に棺が二基確認できたものもあったが、子供であった。土壌の識別から福永伸哉氏分類のII型組み合わせ木棺の埋置が想定されているが棺自体の検出はない。長軸は150cmを前後する。埋葬姿勢はいずれも足を折り曲げる屈肢葬で、腕は伸ばしているものもあるがその状況がつかみにくい。

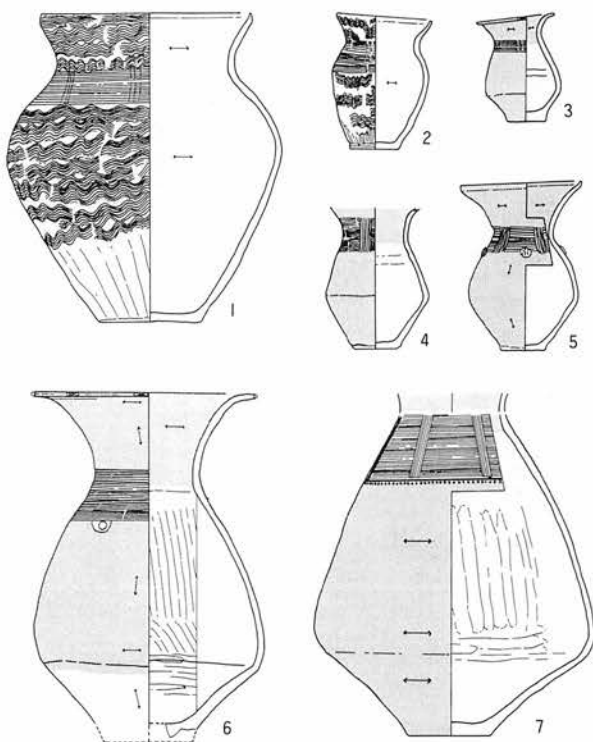
副葬品はほとんどなく、子供と考えられる木棺内の頭部付近からガラス小玉数点が出土したのみである。

土器棺は周溝内から2基、木棺直上から1基出土した。前者は、壺棺と甕棺がみられ、周溝内埋土に並んで斜位に埋置されていた。後者は甕2個体による合わせ口棺であり、横位に埋置されている。同土器棺の棺身は体部に斜線文をもつタイプである。

次年度の調査によって当墓域に該当する時期の集落域が検出されると、箱清水期の農村風景がイメージしやすくなるものと思われる。



第56図 S M104埋葬主体部 (1:40)



第57図 周溝墓出土土器 (1:8)

8 し の の い か わ な か じ ま
篠ノ井～川中島間

所在地：長野市篠ノ井～川中島

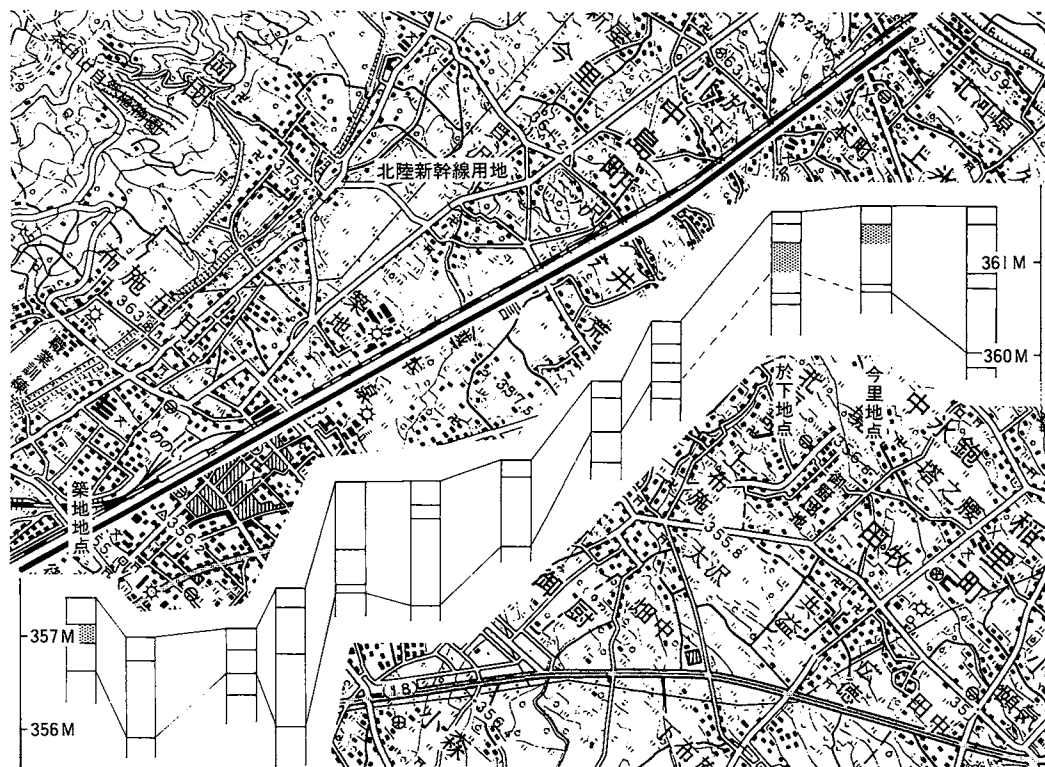
調査担当者 宮下 裕治 広田 和穂

調査期間：平成5年5月10～9月29日

吉江 英夫 田中正治郎

篠ノ井～川中島間は北部は犀川の扇状地に、南部は千曲川の氾濫原に立地している。このため篠ノ井から川中島に向かってゆるやかな登り勾配となり、一帯は水田及び桃を中心とした果樹園として利用されている。この地域は従来埋蔵文化財の調査の行われることのなかった地域であったが、昨年度JR川中島駅構内において近世の水田が調査されたのを機会に本地域にも遺跡が分布している可能性がたかまり、本調査実施前に試掘調査を行い、遺跡の有無及び内容の把握が必要となった。

試掘調査は幅約2.5mのトレンチを延長3,300mにわたって新幹線用地内に南北に入れ、断面観察を中心に行った。その結果、当初予想された近世の埋没水田はほとんど確認できず、かわりに川中島今里・築地両地籍では年度内に本調査を行い、於下と築地地籍の残件については来年度調査となった。それぞれの地点は扇状地及び氾濫原内の微高地に立地していると考えられ、千曲川・犀川の氾濫の影響を受けにくかったものと思われる。微高地以外の地域は表土及び旧耕作土直下が砂礫層となる場合が多く、遺構の分布は見られなかった。



第58図 篠ノ井～川中島間土層柱状図 (H1:25,000 V1:80)

いまさと

今里地点（長野市川中島町大字今里字長峰ほか）

期 間 平成5年11月4日～12月3日 調査面積 2,350㎡

遺跡の立地 犀川の扇状地

調査担当者 伊藤友久 依田 茂

6月のトレンチ調査で溝・焼土が確認された部分について、面的な調査を実施する。地形的には微高地となっており、現在は水田・果樹園として利用されている。最初に重機（バックホー）を用いて表土はぎを実施し、作業員による手作業で遺構検出を行う。トレンチで確認された溝は、東西方向で確認されたが、遺物等の出土はなく時期は確認できなかった。焼土についても分布は大きく広がらず、時期・性格等を明らかにする資料は得られなかった。なお全面にわたり犀川の洪水による砂で覆われており、直下からは畑跡が検出された。時期的には畑から近世陶器の出土もみられることから江戸時代と考えられる。この場合、洪水は弘化4年（1847年）の善光寺大地震に起因する可能性が高い。遺物としては、近世陶磁器のほか、龍泉窯系青磁碗や中世の土器皿がみつかり、調査区外に中世の集落等の存在が予想される。



第59図 今里地点調査風景

ついで

築地地点（長野市篠ノ井岡田279-1ほか）

期 間 平成5年11月25日～12月11日 調査面積 200㎡

遺跡立地 犀川の扇状地

調査担当者 宮下裕治 原 明芳

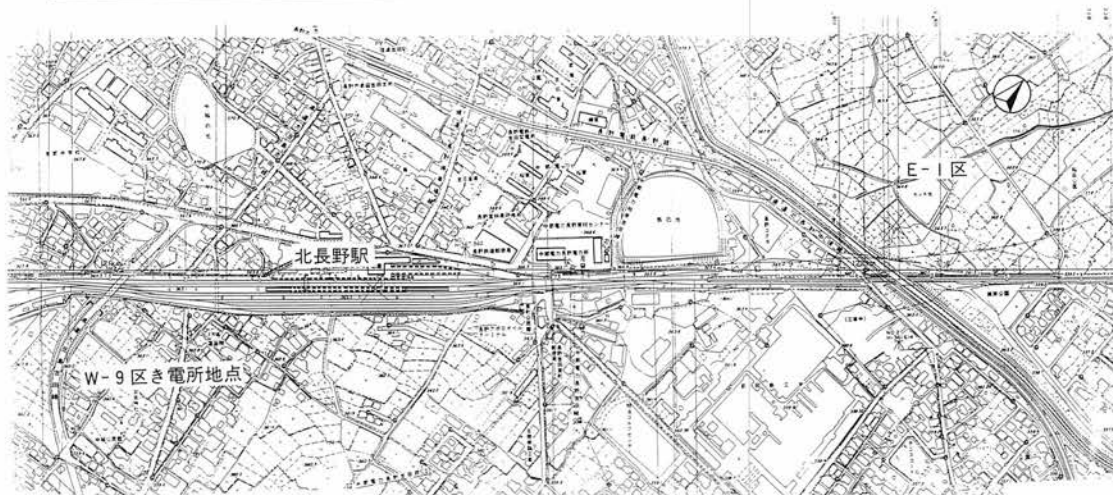
9月のトレンチ調査により、平安時代の集落跡が検出された。従来篠ノ井一帯は千曲川の自然堤防上には弥生時代から継続する篠ノ井遺跡群が存在するが、今回調査をした地点に遺跡の存在が確認されたのははじめてである。遺構は、扇状地上の東西にのびる南北200mほどの微高地に集中する。時期的には9世紀後半から11世紀と限られており、集落成立の背景が興味深い。

今年度は、横断する水路部分について工事が急がれており、部分的な調査を実施することとなった。200㎡ほどの狭い部分であったが、竪穴住居址6軒を検出し、内1軒を、他に井戸・土坑等を調査した。遺構の密度は濃密で、来年度の調査が期待される。



第60図 築地地点1号住居跡

あさかわせんじょうち
9 浅川扇状地遺跡群



第61図 浅川扇状地遺跡群位置図 (1 : 10,000)

W-9区 北長野き電区分所地点

所在地：長野市中越

調査期間：平成5年7月16日～9月12日

調査面積：400㎡

遺跡の立地：扇状地先端

時代と時期：古墳時代中期～平安時代

主な検出遺構：古墳時代住居跡1，奈良時代住居跡1，平安時代住居跡1，平安時代礫床墓1

主な出土遺物：弥生時代土器，土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器

調査担当者：吉江 英夫

田中正治郎



第62図 調査風景

き電区分所地点は、北陸新幹線建設に伴い移設される在来線関連施設用地内にあり、現況は水田及び水田転作した畑地であった。遺構検出面は地表下約70cmの砂礫混じりの黒色土で、遺構覆土との差異がほとんど認められないうえに湧水が激しく、さらに大量の包含層遺物を伴っていたため調査は困難を極めた。遺構は調査範囲の周辺部に偏っており、カマドその他から明確に住居跡と確認できたものは3軒にとどまった。特筆すべき遺構としては平安時代の礫床墓が挙げられる。これは拳大の礫を長楕円形に敷いたもので、微量の骨片・歯などの他に副葬品として土師器杯・碗を数個体伴っていた。

わずかな調査面積に対して出土した土器片はかなりの量に上り、本地点周辺の濃密な遺構分布を予想させた。

E 1 区

所在地：長野市稲田

調査担当者：上田 真 河西克造 月原隆爾

調査期間：1,100㎡

山中 健 山崎まゆみ

調査面積：浅川の扇状地

主な検出遺構

水田 1，畦畔 4，溝 1，土坑 7（中世）
掘立柱建物 8，竪穴状遺構 2，溝 53，
土坑 157，井戸 1（平安）

主な出土遺物

土器：弥生土器，土師器・須恵器・
灰釉陶器，中世陶器，
金属製品：釘・銭貨
木器：曲物

E 1 区は，北陸新幹線建設に伴い新設される車両基地への引込線の用地内であり，調査前は畑地であった。遺構は，現地表下約1.5mの黒褐色～黒色粘質土層（IV層）上面とその下約30cmの黒褐色砂質土層（V層）上面の2面で検出された。

IV層上面の遺構は，畦と段によって区切られた水田で，旧河川のあった南端を除く調査区全面で検出されている。畦4条はいずれも西から東へ3～4m突き出しており，幅は60～70cm，高さは5～15cmと小規模である。これ以外は，一部を除いて高さ3～5cmと極めて低く，東西・南北にじくぎくに走る南西方向から北東方向に徐々に下がっていく段によって区画なされている。これらによって形成される10数区画の平地のうち，最も低い北東部の数区画と周囲より約20cm低い1区画には，黄灰色の砂が堆積しており，これを剥いだ面では足跡その他の窪みが多数検出された。南北方向に走る畦がなく水を溜められないため，水田と認定するには疑問も残るが，2箇所採取したIV層の土のプラントオペール分析でも，各5,200，11,000個/gと高い数値を示しており，稲作跡である可能性が高い。田面からは弥生時代から鎌倉時代までの多数の土器片が出土している。



第63図 足跡が検出された水田跡

V層上面では，掘立柱建物・竪穴状遺構・溝・井戸などからなる集落跡が検出されている。掘立柱建物8棟は小高い発掘区中央より西側でのみ検出され，1棟が南北棟である以外は，北東-南西に桁行方向を示し，石組みの井戸跡1基が，これらに囲まれる位置で検出されている。竪穴状遺構2基は，掘立柱建物群のはずれの調査区中央部で近接して検出されているが，いずれも一辺3m前後の正方形と小さく，竈等の施設が付属せず，また遺物が土器小片のみであることなどから，居住跡とは思われない。溝53条は，東西・南北方向に走るか45°振る二者とがあるが，直線的で90°折れ曲がるものも多く，区画施設であろう。この面でも，弥生時代から鎌倉時代までの土器片多数が出土しているが，平安時代が最も多い。また，井戸は一度造り替えられていたが，旧井戸の掘方から曲物も出土している。

10 さんさい 三才遺跡

所在地：長野市三才大字三才字古屋敷

調査担当者：吉江 英夫 町田 勝則

調査期間：平成5年10月15日～12月20日

河西 克造 山崎まゆみ

調査面積：2,400㎡（総計6,400㎡）

山中 健 田中正治郎

遺跡の立地：千曲川の氾濫源

時代と時期：中世～近世

遺跡の特徴：中世から近世の畠地・居住地・墓地

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	建物	土坑	溝	墓	集石	畠
中世	6	220	11	30	—	3
近世					13	—

土器、陶器：内耳・香炉・大鉢・椀・水注

石製品：硯・凹石・石臼

木製品：漆箸・杭材・板材

金属製品：銭貨・毛抜き・刃物・煙管

その他：人骨（焼骨）・獣骨・種子

三才遺跡は長野市の北端に位置し、千曲川氾濫源の微高地上に立地する。遺跡地周辺は現在果樹園地帯となっている。調査所見より遺跡の主体的な時期は、中世末期から近世にほぼ該当し、遺構には畠地・居住地・墓地などがある。以下にその概要を記す。

畠地は調査区に3ヶ所確認できた。中央部で検出された畠址は、面積で250㎡ほどあり、30以上もの畝が立てられていた。畠ごとの区画は切り合い、何度かの作り替え、もしくは使用時期の違いが推定できた。畠址の上面は細かな洪水砂で覆われ、洪水による機能の断絶と使用の放棄が想定できる。

居住地には主として掘立柱建物跡と井戸および土坑が確認できた。柱穴と考えられるピットは150基以上あり、10棟程度の建物の存在が予想される。建物跡を想定した柱穴には、素掘り・小石で柱を補強・礎盤として石臼を使用したものなどがあり、建物の炉には、素掘りと石組みの2者があった。石組み炉の形態は、ほぼ円形で、炉の縁と火床に拳大の石を組んで構築されていた。この炉および周辺からは、三脚の香炉・煙管・水注などの遺物が出土している。

井戸および土坑は、建物間の空間部に集中して確認できた。井戸には素掘りの例と石組みの例が認められ、切り合いが激しく、何度も作り替えている様子が



第64図 掘立柱建物跡

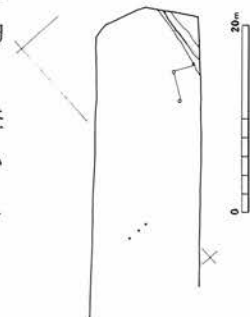
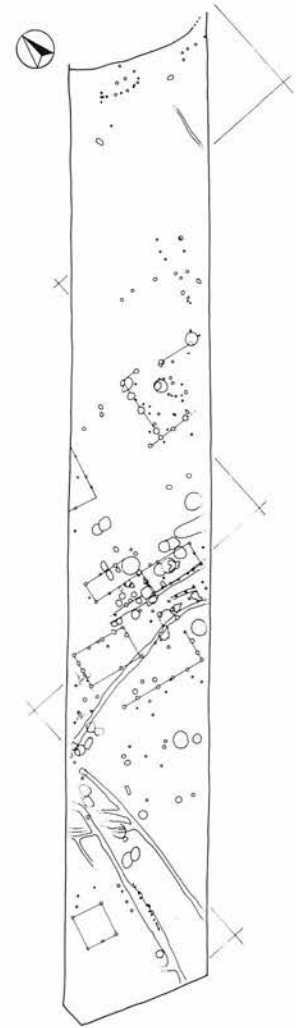


第65図 曲物と火葬骨

観察できた。埋土中からは唐津産と考えられる大鉢や刃物（包丁?）の破片が出土している。その他の土坑には、ゴミ穴と考えられる例もあったが、多くは性格の判断できないものであった。ゴミ穴様の土坑からは、植物遺体（ウリ科・ソバ科・モモ・もみ殻など）が多量に出土し、これらに伴い漆ぬりの箸破片が出土している。また性格不明の土坑には、漆ぬりの椀と真鍮製の毛抜きの出土した例もあった。

墓地では居住地より北に25mほど離れた場所に約20基、南へ15mほど離れた場所に3基の火葬墓が確認できた。推定される火葬墓の形態は、直径30cm・深さ40cmほどの穴を掘り、これにほぼ同大の曲物に入った火葬骨を安置し、墓標として一抱えほどの石を置いた状態である。ただし、後世の攪乱によって、墓標はもとより曲物の一部さえも破損した墓が大部分であった。墓の副葬品は、土とともに取り上げてきたため明確ではないが、検出時に銭と数珠玉の一部を発見している。

以上が遺構の概要である。これら遺構の時期については、出土遺物が少なく、整理も途上であるため、明言はできない。出土した陶器類から推測すれば、畠址が中世末期に、建物跡と墓が中世もしくは近世の時期に位置づけることができる。三才地区は、遺跡の調査例が少なく、考古学的手法に基づいた地域の歴史解明が遅れている。今回の調査によって、貴重な考古資料を発見できたものと考えている。



第66図 全体図
(1 : 800)

2) 整理作業の概要

冬期間の発掘調査の延長としての整理作業をのぞく、整理課が担当した整理作業について取り上げる。

ア 整理作業の内容

a 石川条里遺跡（長野自動車道関連）

担当 白居直之 市川隆之 白沢勝彦(保存処理) 西嶋 力(写真)

水田部より出土した木製品は、実測をすすめ、一部写真撮影にはいる。PEG処理は継続して実施され、400点の処理が終了する。土器は接合復元作業が進み、後半より実測にはいる。なお、10月に奈良国立文化財研究所黒崎直室長を迎え、木製農具について指導を受ける。

b 篠ノ井遺跡（長野自動車道関連）

担当 西山克己 白沢勝彦(保存処理)

土器の・接合・復元作業がほぼ終了し、一部実測にはいる。金属製品については、応急的保存処理が終了。なお、1月に文化庁松村恵司調査官を迎え、集落研究についての指導を受ける。

c 松原遺跡（上信越自動車道関連）

担当 上田典男 白沢勝彦(保存処理)

5000箱をこえる多量の土器の整理作業を中心に行う。縄文時代については注記が終了し接合作業中、古代・弥生中期は洗浄・注記を実施。金属製品は、応急的保存処理が終了。

d 川田遺跡（上信越自動車道関連）

担当 白居直之 白沢勝彦(保存処理) 西嶋 力(写真)

水田より出土した木製品の実測・写真撮影・PEG処理を実施。

e 榎田遺跡（上信越自動車道関連）

担当 野村一寿 白居直之

遺構図の整理、土器の注記、木製品の実測を行う。木製品の中で古墳時代の椅子（巻頭写真図版）は、類例が少なく貴重な例である。

f 千見遺跡（県道長野大町線関連）

担当 市川隆之 西嶋 力(写真)

小規模な中世末から近世の遺跡であるが、整理作業を終了し、報告書を刊行する。

イ 報告書の刊行（14～17は(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書の通し番号）

- 14 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12 東筑摩郡坂北村・麻績村内
収録遺跡 向六工・十二遺跡（東筑摩郡坂北村）
野口・古司・子尾入遺跡（同 麻績村）
- 15 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13 更埴市内・長野市内その1
収録遺跡 鳥林・小坂西・地之目・一丁田遺跡（更埴市）
鶴萩七尋岩陰・赤沢城跡・塩崎城見山砦跡（長野市）
- 16 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14 長野市内その2
収録遺跡 鶴前遺跡（長野市）
- 17 主要地方道長野大町線埋蔵文化財発掘調査報告書 北安曇郡美麻村内
収録遺跡 千見遺跡（北安曇郡美麻村内）

(4) 中野調査事務所

発掘調査の概要

調査区域 中野市牛出地区、上水内郡信濃町富濃・柏原・野尻地区、上高井郡小布施町飯田地区

調査遺跡数 8遺跡 63,310㎡

調査面積

上信越自動車道：中野市牛出窯跡（8,500㎡）、信濃町普光田遺跡（1,000㎡）・七つ栗遺跡（1,700㎡）・日向林B遺跡（5,000㎡）・東裏遺跡（36,000㎡）・貫ノ木遺跡（10,000㎡）

県道小布施村山線：小布施町飯田古屋敷遺跡（420㎡）・玄照寺跡（690㎡）

調査期間 平成5年4月12日～12月22日

試掘遺跡数と面積 5遺跡 5,600㎡ 中野市牛出遺跡（1,700㎡）、信濃町針ノ木遺跡（1,200㎡）・東裏遺跡（1,000㎡）・貫ノ木遺跡（1,600㎡）、星光山荘遺跡（100㎡）

上信越自動車道関連の調査は、中野インターチェンジ以北の中野市および信濃町において実施された。また、県道関連として小布施町で、昨年度上信越道関連の調査を行った隣接地の調査が行われた。信濃町の野尻湖周辺での大規模調査が本格的に開始されたこともあって、とくに旧石器時代の重要な遺構・遺物の発見が相次ぎ、注目された。今年度の調査では後期旧石器時代を通じて遺物が見られ、しかも量が多い。一地域でこれほどの大面積を調査することは旧石器時代研究史上特筆されるであろう。いずれも次年度に調査区域を残しており、また、ほかの旧石器時代遺跡の調査も予定され、今後も注目されよう。

日向林B遺跡では、環状ブロック群において石斧が数多く出土した。遺物の全体量も多く、AT下層の石器群として、ブロック群全体の様相が把握できる貴重な一例となった。

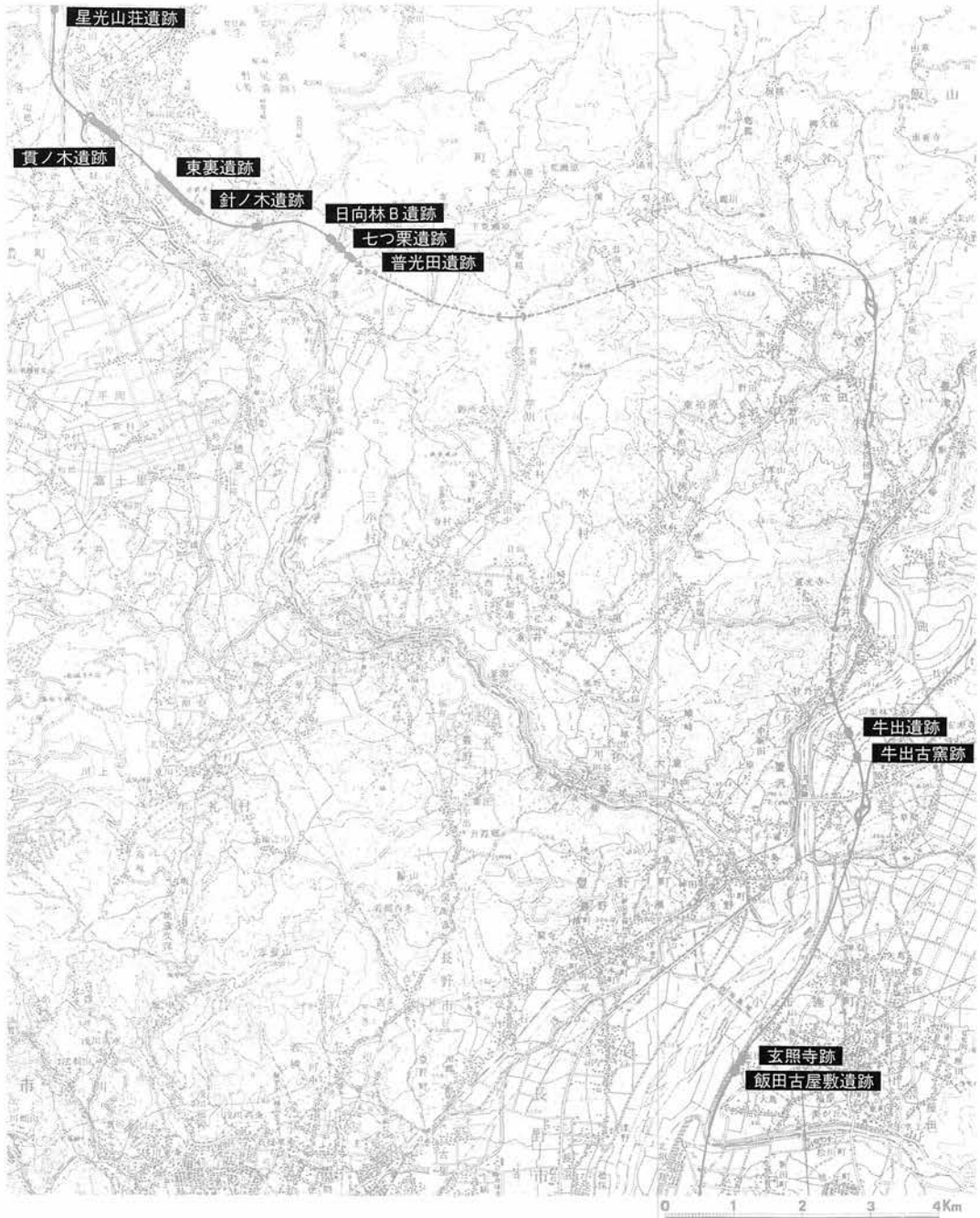
東裏遺跡においては、大量の遺物を流路状の凹地から発見した。原位置で層的に発掘されたわけではないが、なかには剥片尖頭器と考えられるものもある。また、この包含層ではナイフ形石器から種子柴型石斧・有舌尖頭器の段階まで旧石器時代後期前半から縄文時代草創期にかけてのさまざまな石器が大量に出土している。別地点では、伊勢見山遺跡の斜面下方で、ナイフ形石器を伴うブロックを調査している。また、縄文時代早期・平安時代の資料も多い。

貫ノ木遺跡では、これまで野尻湖調査団による発掘が行われた地点の近辺を調査した。範囲が拡大し、40,000㎡以上が対象範囲となったが、今年度は、その一部分を実施した。ナイフ形石器などが多く、遺跡の遺存状態も良好である。

牛出古窯跡では、窯跡および同時期の集落のほか、古墳時代初期の集落や局部磨製石斧を含む旧石器時代のブロックを調査した。市内最古の旧石器である。中野市内での須恵器窯跡の調査は計14基を発掘し終了した。

整理作業の概要

通常の冬期整理のほか、志賀中野有料道路関連の栗林遺跡・七瀬遺跡の整理を終了し、報告書を刊行した。縄文時代後期の貯蔵穴・水さらし場および土器、弥生時代中期栗林式土器、弥生時代末の外來系土器の資料が豊富であり、今後、基準的資料となろう。



地図4 中野調査事務所関係調査遺跡 (1 : 100,000)

上信越自動車関連

1 牛出古窯遺跡

所在地：中野市大字牛出芝野704-1

調査期間：平成5年4月12日～7月2日

平成5年11月1日～12月10日

調査担当者：鶴田典昭・白田広之・山本 浩

調査面積：8,500m²

遺跡の立地：高丘丘陵の西縁部

時代と時期：先土器時代，古墳時代，奈良・平安時代，中・近世

遺跡の特徴：先土器時代のブロック，奈良・平安時代の須恵器窯跡，古墳時代及び奈良・平安時代の集落跡

主な検出遺構

時代	遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	窯跡	土坑	その他
先土器						ブロック4
古墳	8					
奈良・平安	7	1	1	11	土坑墓1 溝7	
中世以降				1	2	墓4 溝8

主な出土遺物

土器：縄文時代早期・中期土器，古墳時代土師器，奈良・平安時代須恵器・土師器

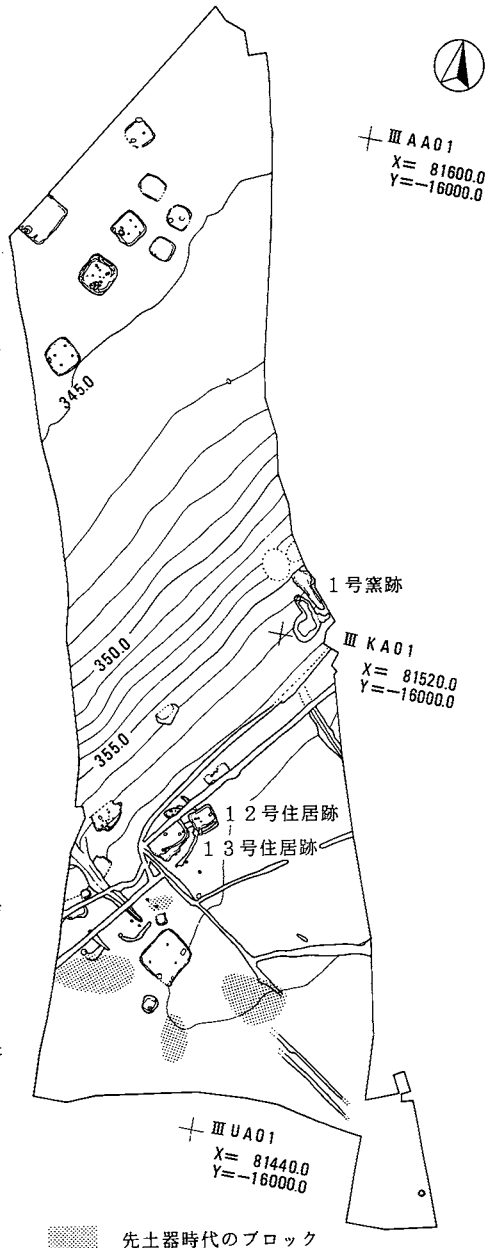
土製品：紡錘車

石器：局部磨製石斧，切出形石器，石鏃，打製石斧，太型蛤刃石斧，砥石

石製品：勾玉，管玉

その他：古銭，ガラス玉

本遺跡は，高丘丘陵の西縁部に位置し，河岸段丘の上下二段の平坦部とその間の段丘崖からなる。上部平坦部では奈良・平安時代の集落跡と先土器時代のブロック，段丘崖では奈良・平安時代



第67図 牛出古窯遺跡遺構配置図 (1:1,200)

の窯跡，下部平坦部では古墳時代の集落跡が検出されている。

以下，調査の概要を時代別に記す。

先土器時代 上部平坦部で，先土器時代のブロックが4か所検出されている。出土遺物は局部磨製石斧2・砥石1・切出形石器2・石核6・二次加工のある剥片2・剥片82，碎片27・礫10である。

古墳時代 下部平坦部で竪穴住居跡が8棟検出された。住居の切り合い関係はない。

住居跡はほぼ正方形で，一辺の長さは約4～5mである。4本の柱穴と南西壁際に隅円方形のピットがあり，北東側に炉を設けるのが，この集落の典型的な住居跡である。10号住居跡は他の住居跡に比べて大きく，一辺の長さが7.3mあり，周溝がめぐる。

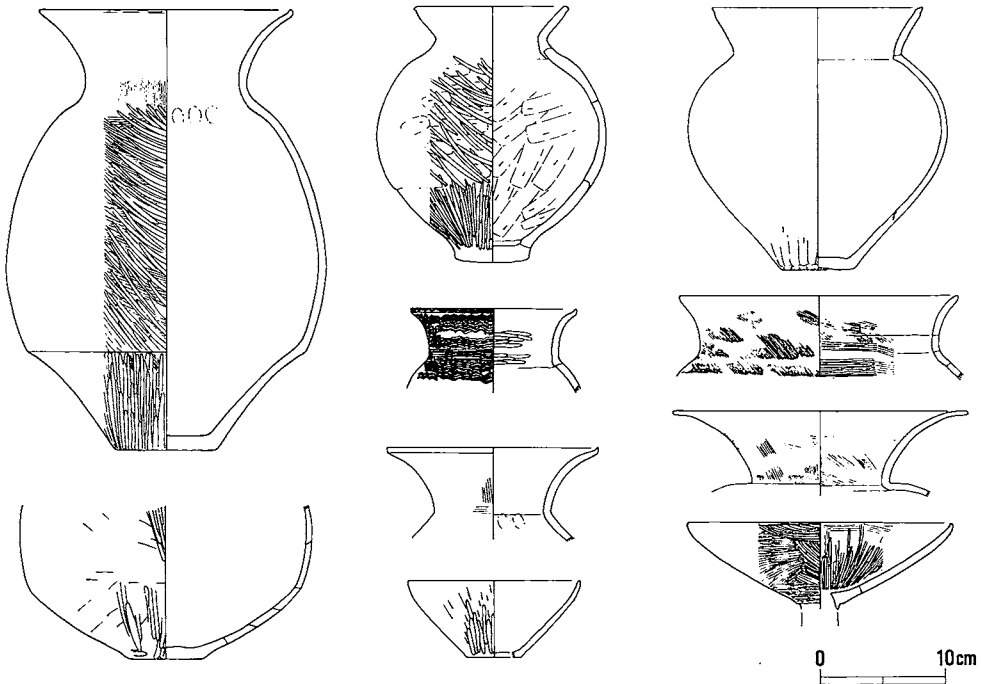
5号住居跡からは，勾玉4・管玉11・ガラス玉5がまとまって出土している。これらの周辺の覆土からは骨片数点が見つかっており，住居廃絶後，墓が造られた可能性が考えられる。

奈良・平安時代 段丘崖の東端で，須恵器窯跡1基とそれに伴う灰原が検出された。

1号窯跡は，斜面の傾斜を利用した半地下式無段登り窯である。全長4.7m，焼成部底部の最大幅0.9mである。窯跡からは，杯・蓋・甕・長頸壺・短頸壺などが出土している。側壁部分からは，天井部を支える骨組み用材と考えられる炭化物が検出された。

灰原からは多量の須恵器が出土し，その中から，「大」「卅」という文字の刻まれた須恵器片が見つまっている。「大」の文字の下には別の文字が刻まれているようだが，判読できない。

上部平坦部では，1号窯跡と同時期と考えられる奈良・平安時代の竪穴住居跡が7棟検出さ



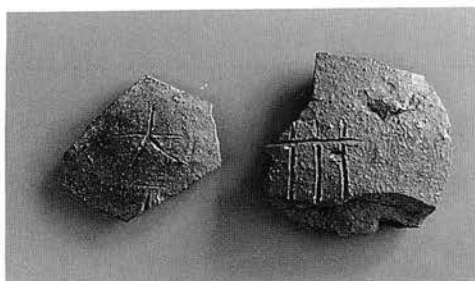
第68図 5号住居跡出土遺物(1:6)

れた。1号住居跡と2号住居跡にのみ切り合い関係が認められ、2・12・13・14号住居跡ではカマド跡が検出された。

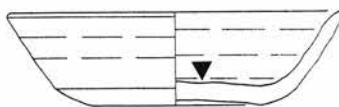
12号住居跡のピット3は、掘り方底部に拳大の石が環状に5つ並べられ、石の内側には柱状のものが立てられていたことが土層から推測される。轆轤ピットと考えられる。12号住居跡には周溝が検出された。

13号住居跡の床面には、溝とその溝をおおうように甕の破片を列状に並べた施設が検出された。床面からは、床面の内側に「別」の文字を刻んだ須恵器杯2点が見つかった。

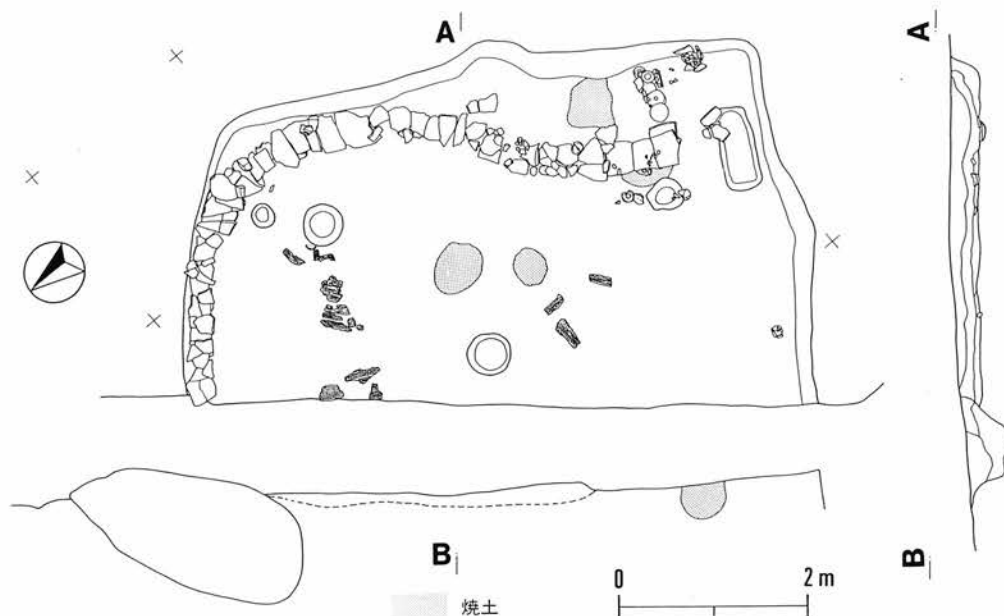
中世以降 傾斜部の下方には、中世の墓が4基検出された。部分的に黒く焼けた石を環状に並べており、その中に炭化物や骨片が検出された。そのうち1基の中央部分から3枚の古銭（大観通宝・元宝通宝・永楽通宝）が出土した。



第69図 1号窯跡灰原出土遺物



第70図 13号住居跡出土遺物
(図1:3, 文字1:1)



第71図 13号住居跡遺構図 (1:80)

2 普光田遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字富濃字普光田2,505・他

調査担当者：渡辺敏泰

調査期間：平成4年6月24日～7月2日

林 正則

調査面積：1,000㎡

谷 和隆

遺跡の立地：薬師岳北西山麓の崖錘部、およびそれに連続する沖積低地

時代と時期：縄文時代早期および前期

遺跡の特徴：遺構は確認されなかったが、縄文時代の遺物が散漫に出土

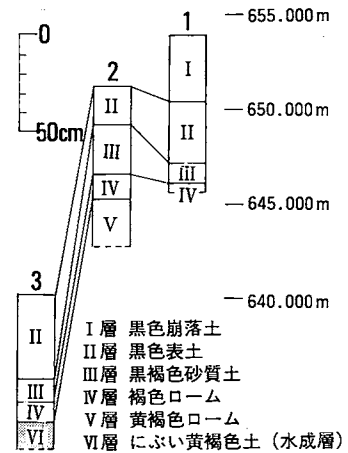
主な出土遺物：石鏃、縄文時代早期・前期の土器片

調査区に任意に幅約1mのトレンチ18本と、低地部と崖錘部にそれぞれ15×20mの範囲でトレンチ拡張区A・B（第73図）を設け、ローム層（第72図）まで掘り下げながら遺構・遺物の確認を行った。

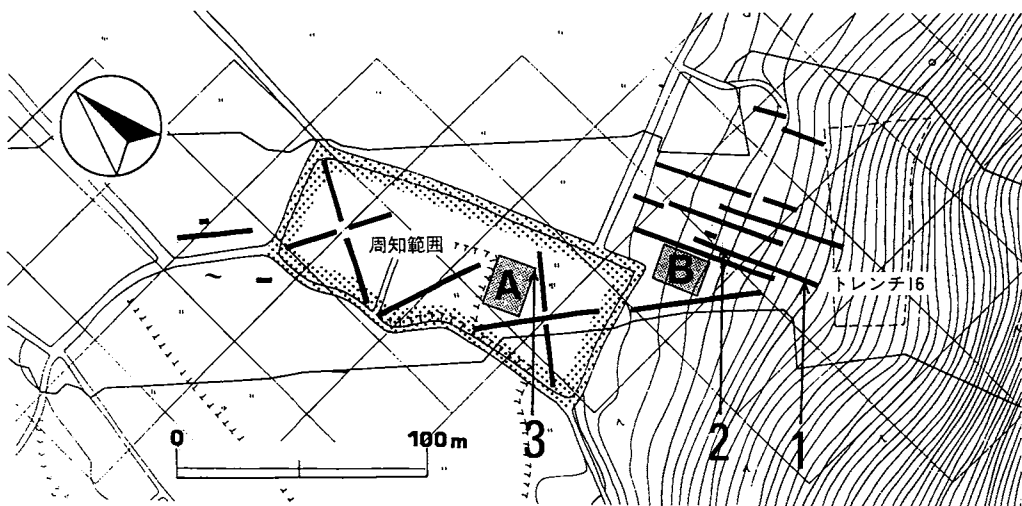
その結果、山麓部ではローム層から表土にかけて薬師岳から供給された礫片が大量に堆積していることが判明した。また山麓部の緩傾斜部と低地部のII層は圃場整備等で削平されていることが確認された。トレンチ16の北端の表土より諸磯式併行期の土器片が2点出土したが、攪乱土中であつた。また完形の石鏃1点と黒曜石のチップが2点表面採集されたが、遺物の包含層は確認されなかった。

一方トレンチ拡張区Aの表土下部より相木式相当の土器片3点と剥片が1点出土したが、これらの遺物は暗渠の埋設および圃場整備時に入り込んだ可能性が大きい。

以上、周知範囲の全面調査に至らず終了した。



第72図 土層の柱状図



第73図 普光田遺跡トレンチ配置図（1:3,000）

3 ななつぐり 七ツ栗遺跡

所在地：長野県信濃町大字富濃字七ツ栗2351-1他

調査担当者：渡辺敏泰

調査期間：平成5年4月19日～6月18日

林 正則

調査面積：1,700㎡

谷 和隆

遺跡の立地：段丘末端部・標高約645m

時代と時期：縄文時代早期～前期，平安時代

遺跡の特徴：縄文時代早期～前期の落とし穴，平安時代の住居跡

主な出土遺物

縄文時代：縄文土器，磨製石斧・石鎌・特殊磨石・石匙・スクレイパー・凹石他

平安時代：土師器・砥石・鉄鍬・鉄滓・刀子他

主な検出遺構

縄文時代：落とし穴6基・集石1基・炉跡1基・土坑2基

平安時代：竪穴住居跡2軒

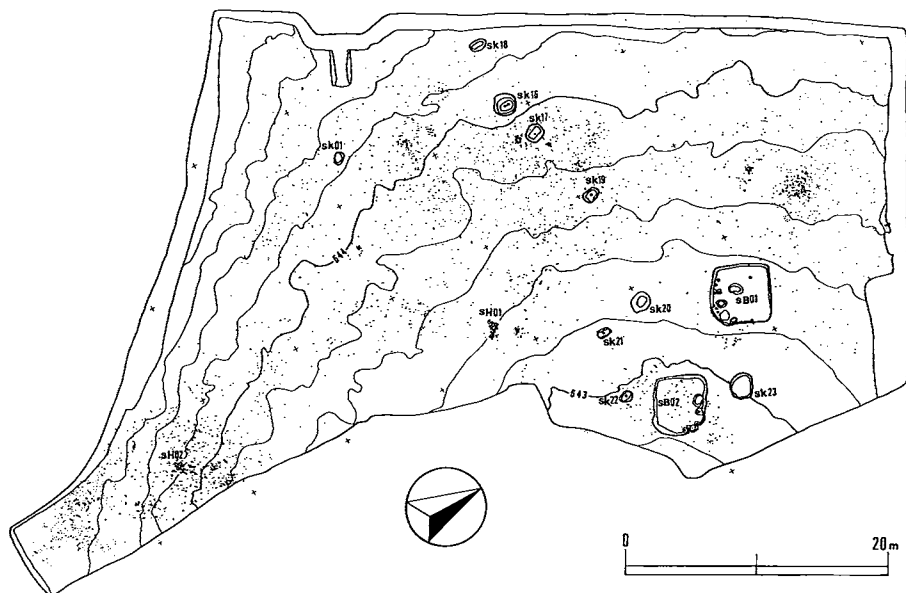
その他：土坑1基（時期不明）

基本層序

I層黒色土（表土），II層柏原黒色火山灰層，III層（漸移層），IV層黄褐色ローム層で以下水成堆積層になる。III層までは日向林B遺跡と対比可能であるが，IV層以下は漸移的に風成堆積層から水成堆積層に替わる。V層は調査区の東隅に一部確認できる以外は認められない。

縄文時代の遺物包含層と平安時代の住居跡の検出面はほぼ同一で，II層中に存在する。

縄文時代 23号土坑（SK23）以外は遺物を伴わないため，時期が確定できない。



第74図 遺構配置図 (1 : 600)

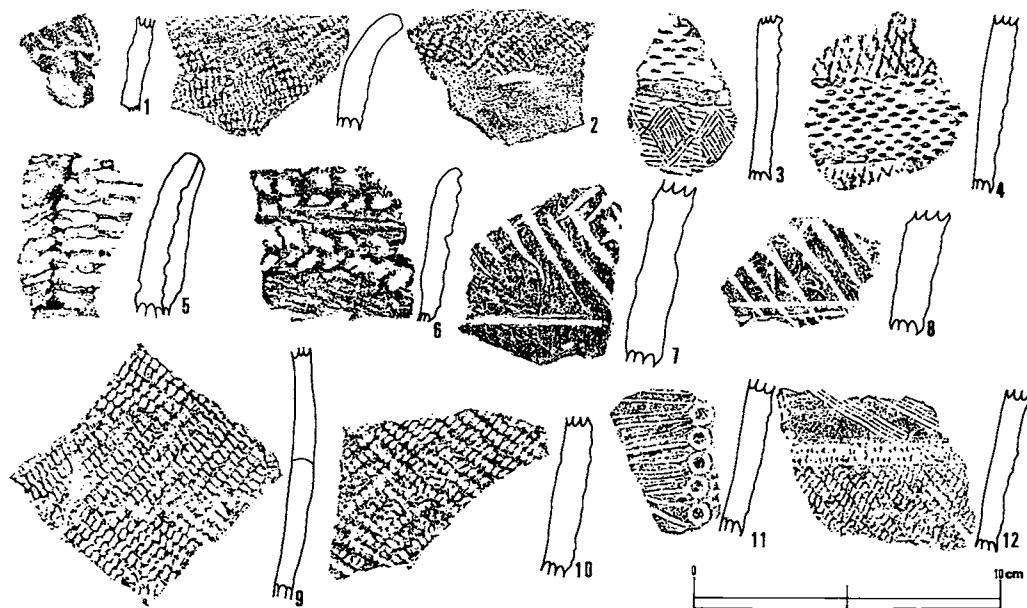
縄文土器には、表裏縄文（第75図2）・押型文（3・4）・条痕文系（5・6）・沈線文系（7・8）の早期と羽状縄文（9・10）・半載竹管文（11・12）の前期が出土している。これらは早期の沈線文系の土器を除いては包含層出土であるが、早期の土器群と前期のその集中地点は異なる傾向がみられる。これらの土器はどの文様も量的に安定している。第75図1は爪形文で1片だけ確認され、周辺に草創期の遺跡の存在が予想される。

6基の落とし穴は形態の類似性から同時存在と考えられる。等高線の垂直方向に直線的に配列している。平面形は120cm×80cm程度の楕円形で、深さが検出面より約1m、底の中央に、1もしくは3か所の柱痕が残っている。

炉跡（SH02）は1辺20～40cm程度の板状の平石を浅いすり鉢状に並べ、その上に細かい角礫が数多く乗せられている。土器は伴わないが、早期の土器集中に比較的近い場所に位置する。

20号土坑（SK20）からは焼土が検出され、23号土坑からは沈線文系の土器（第75図7・8）が出土した。

平安時代 住居跡が2軒検出された。ともにコーナーに竈が存在し、明確な柱穴はない。時期は平安時代でも10世紀以降と思われる。特徴的なのは2軒とも鉄滓が出土し、1号住居跡からは鉄製鋏先が、2号住居跡からは鉄製刀子が出土したことから、鍛冶に関係の深い人の家だったと思われる。



第75図 出土縄文土器（1：5）

4 ひなたばやし 日向林B遺跡

所在地：長野県信濃町大字富濃字日向林2253-13 他

調査担当者：渡辺敏泰

調査期間：平成5年5月20日～10月29日

林 正則

調査面積：5,000m²

谷 和隆

遺跡の立地：旧湖（湿地）に面する丘陵南側の裾部・標高約650m

時代と時期：先土器時代前半

遺跡の特徴：先土器時代の環状ブロック群

主な出土遺物

遺物総点数約6,941点

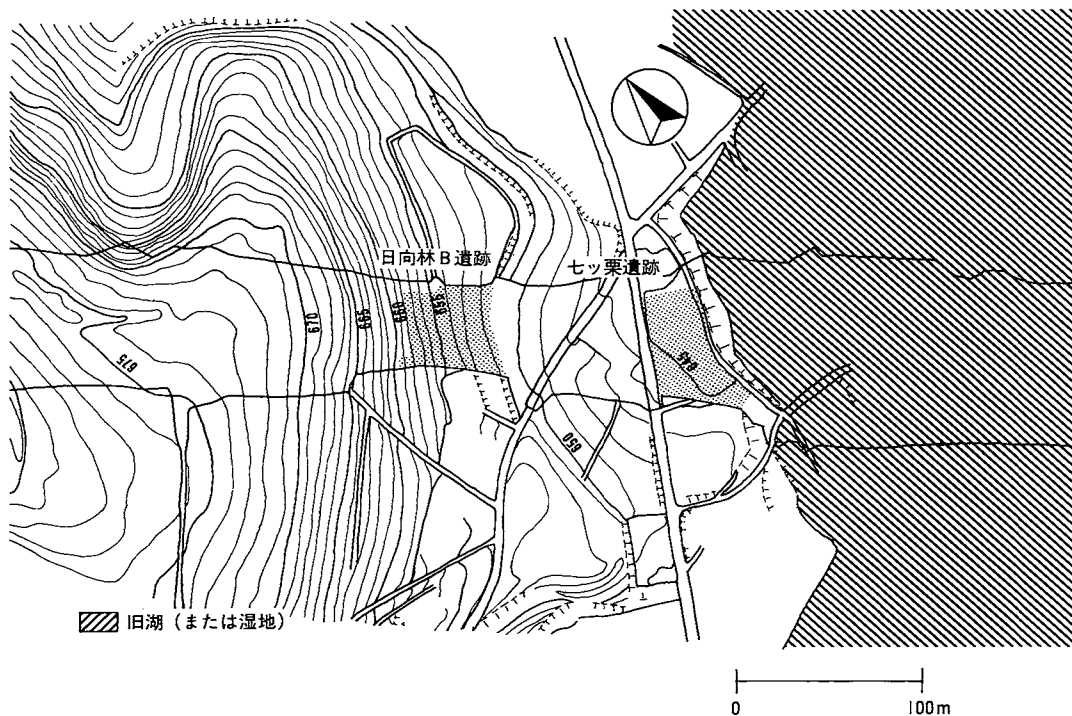
石斧41点・台形様石器13点以上・敲石 8点

砥石 2点（他に砥石らしき礫 4点）・スクレイパー類多数 有孔石製品 1点

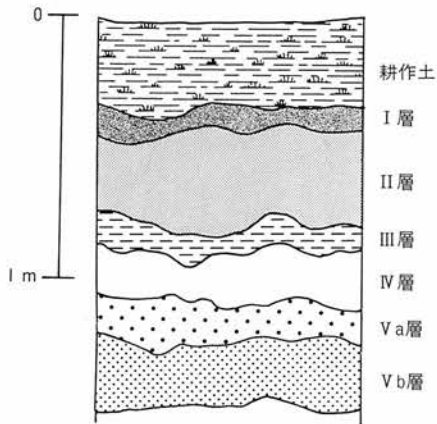
基本層序と遺物出土層位

I層＝黒色土（表土）・II層＝柏原黒色火山灰層・III層＝モヤ層（漸移層）・IV層黄褐色ローム層・Va層＝黒色帯漸移層（AT層準と考えられる。）・Vb層＝黒色帯。

以上が日向林B遺跡での基本層序になる。当埋文センター調査の貫ノ木遺跡や現在まで調査されてきた野尻湖周辺の陸上の遺跡（野尻湖発掘調査団，野尻湖人類考古グループ，信濃町教育委員会，他）の土層と対比できる。



第76図 日向林B遺跡の立地（1：4,000）



第77図 基本層序



第78図 遺跡遠景

文化層は2枚存在する。上層は次の4点の理由により、下層と分離できる。①出土層位はIII層のみで、IV層以下からは出土しない。②平面分布が異なる。③石材の主体が珪質頁岩である。④石器組成が搔器・刃器素材の削器・刃器のみという点である。なお、上層の遺物は数点のみであり、その性格や時期は不明瞭である。

下の文化層はII層下部～Vb層、層厚80cmの幅をもっているが、遺物の集中がVb層中位になるため、生活面も同層準に当たると考えられる。6,941点の大部分を次の2点の理由により同一文化層とする。①石器組成、石材構成に差がみられない。②ブロックが環状に配列している。以下その概要を報告したい。

出土状況

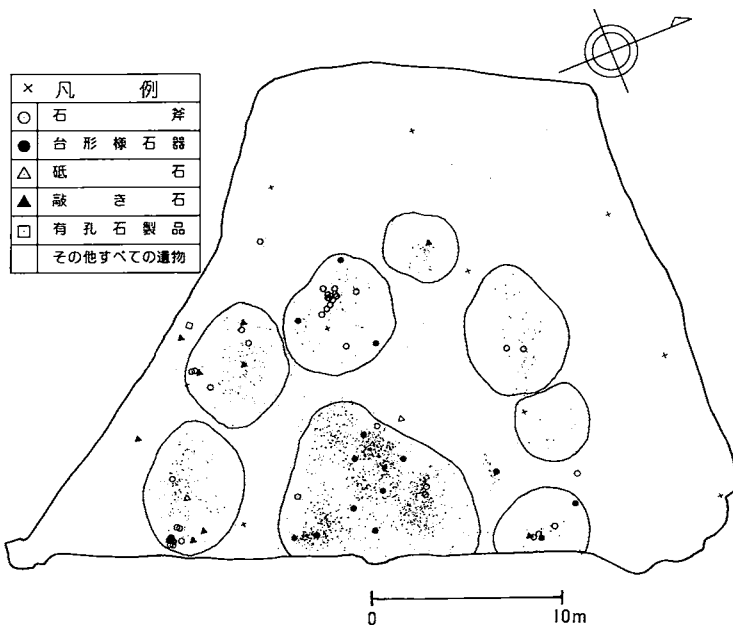
直径4m程度のブロックが環状に配列し、環状ブロック群をなす。その直径は約25mで、中央には直径10m程度の遺物密度の高いブロックが存在する。なお、平成5年度調査区には環状ブロック群の半分強がかかっており、残りの部分は平成6年度に調査する予定である。

出土遺物

石斧 41点の石斧のほとんどが蛇紋岩製である。蛇紋岩の産地は県内では白馬山麓方面に求められるが、ヒスイ質の蛇紋岩の存在から、姫川下流域と考えられる（野尻湖博物館のご教示による）。

石斧には様々なバリエーションが認められる。サイズはやや小形が多い傾向があるものの、4cm～19cmとばらつきがある。刃部形態が円状・平状・偏りのあるものがあり、また、研磨に関しても両面、片面、研磨の無いものと多様なあり方を示す。

石斧の多くは片面に礫面が残ることから、扁平な礫を側面から半割し素材とするものが主流となる。また、小形品の中には礫素材そのものが認められる。



第79図 遺物分布図 (1 : 40)

蛇紋岩の剥片が非常に少ないため、石斧は他の場所で製作されたのち、遺跡に持ち込まれ、遺跡滞在中に使用・刃部再生が繰り返されたと考えられる。石斧の出土状態(第79図)は1号ブロックと3号ブロックから、それぞれ12点ずつ集中出土しているのが特徴的であり、両ブロックとも大小・形態のパラエティーが存在し、セット関係が想定できる。

台形様石器 ここで13点としたのは定形的な台形様石器で、部分的に加工が施されるものや、切断がみられるものは他に多数存在する。定形的な台形様石器は剥片の打点と末端を側縁として、両側縁から平坦剥離を施し、長さが4 cm前後と比較的大きめに揃っている特徴がある。石核から想定できる技法としては、バルブの発達する分厚い、貝殻状の剥片を横へ直線的に打点を移動させるもので、打面調整はほとんど行われず、単剥離打面の場合と、礫面の平坦面がそのまま打面となる場合がほとんどである。いずれの剥片も打面と主要剥離面のなす角度が鋭角な例が多い。

敲石 ほとんどの敲石は両端に敲打痕が残される。石材は砂岩が多いが、蛇紋岩・玉髓なども存在する。

砥石 砂岩製の砥石は明確な凹面をもち、その裏側は平たくなっている(加工してあるかどうか不明)。この砥石の出土位置は5号ブロックと中央ブロックの間で、後者よりである。もう1点は安山岩製で、2つに割れているが、両方とも1号ブロック内から出土している。その他安山岩や砂岩の磨り面をもつ石が4点出土しているが、磨り面が砥石としての使用の結果によるものかどうか、明確に判断しがたい。

有孔石製品 平面がゆがんだ円形で、直径約4 cm、穴の直径が2 cm弱、厚さが約3 cm、赤褐色の砂岩製である。出土位置は2号ブロックの外側(第79図)である。明瞭な加工痕や使用痕が認められないため、その成因は自然によるものだと指摘もあるが、遺跡内からは同種の自然

成因による石がまったく検出されない事から、なんらかの目的で遺跡内に持ち込まれた事は確実である。有孔石製品自体がどのような用途をもつかは分からないが、利器ではないことが確実なため、装飾品と考えられる。

日向林B遺跡の時期と評価

次の3点より、本遺跡は武蔵野台地IX・X層段階に相当することが確実と思われる。AT下位である点、環状ブロック群である点、石斧と台形様石器を主とする石器組成である点。

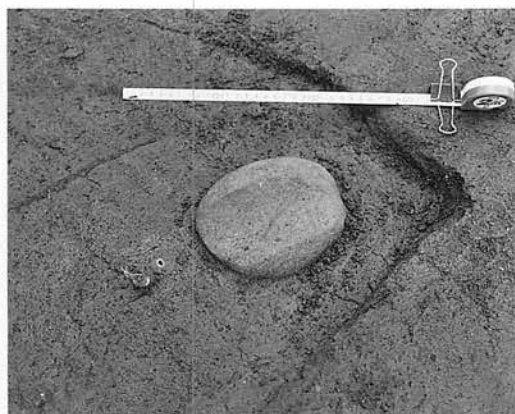
近年まで信濃川中流域のこの段階の石器群を出土する遺跡は、信濃町の仲町遺跡や貫ノ木遺跡（野尻湖人類考古グループ・1987・1990）で、断片的な例が知られる以外はなく、地域編年でも空白の状態であった。しかし、今回の日向林B遺跡の調査によって、この地域にも武蔵野台地のIX・X層段階の石器群が存在する事実が明らかになった。

41点の石斧は日本最多であり、来年度調査区も合わせれば50点を上回るのではないかと予想される。しかも環状ブロック群からの出土により、同時存在と考えられる石斧でも大きさや形態に様々なバリエーションがあり、セット関係も把握できることが想定される。

遺物総点数も約6,941点あり、来年度調査区を合わせれば10,000点前後になるとと思われる。これはAT下位の石器群の中では最多の出土である。6,941点の約7割が黒曜石であり、その産地は石質の良さから、和田峠周辺の可能性が高いと考えられ、この時期すでに大量の黒曜石が長距離運搬されていた事がわかる。また、石斧の石材である蛇紋岩の産地は新潟県姫川下流域と考えられ、和田峠とは正反対の方向に当たるのも興味深い。さらに、日向林B遺跡には装身具の可能性ある有孔石製品が出土している。このように本遺跡は信濃川中流域一帯だけではなく、列島規模で見ても、これまで知られなかった様相を多く含む遺跡であり、先土器時代の人々の生活や社会の復元に大きく貢献できる遺跡と思われる。



第80図 石斧出土状況



第81図 砥石出土状況

5 ^{ひがしうら}東裏遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字柏原字東裏405ほか

調査担当者：岡村秀雄 酒井健次

調査期間：平成5年4月19日～12月10日

常長虎徹 前田利彦

調査面積：36,000㎡

久保田秀一郎

遺跡の立地：伊勢見山中腹斜面部と山麓の平坦部

時代と時期：先土器時代，縄文時代早・前期，平安時代

遺跡の特徴：先土器時代の石器を含む流路，縄文時代の焼土跡，平安時代の住居跡など

主な検出遺構

時代	遺構
先土器時代	集石3
縄文時代	焼土跡33
平安時代	竪穴住居5 鍛冶跡1

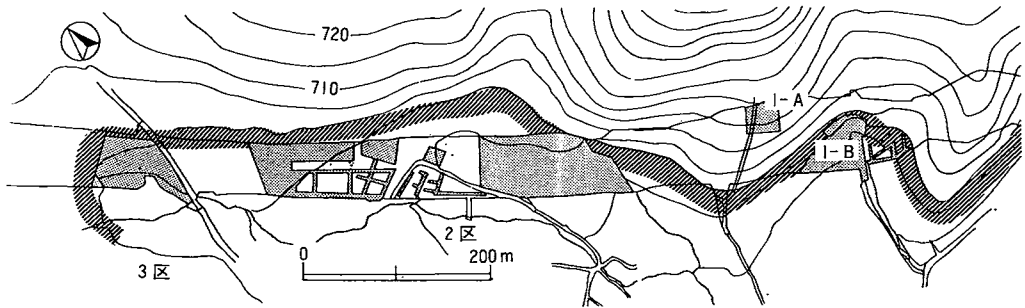
主な出土遺物

石器：ナイフ形石器・尖頭器・搔器・彫器・石核・台形様石器・石刃・局部磨製石斧・神子柴型石斧・有舌尖頭器・石鋏・特殊磨石・凹石・石皿・砥石・打製石斧・磨製石斧

土器：縄文土器（押型文・表裏縄文・羽状縄文・絡条体圧痕文）

土師器・須恵器・灰釉陶器

その他：鉄滓・羽口・銅製品



第82図 東裏遺跡調査範囲 (1 : 8,000)

遺跡の立地

本遺跡は野尻湖の南東約1kmに位置し，国道18号線と伊勢見山にはさまれた広い平坦地一帯に広がっている。これまでの分布調査では，北東から南東方向に約1.3km，幅約400mにわたって遺物の分布が確認されている。今年度の調査区域は，東西約1kmと広範にわたるため3区に分けて調査をおこなった。1区は伊勢見山中腹の柏原スキー場リフト橋脚部（1-A区）と伊勢見山南東谷部の湧水地帯（1-B区）である。2区は伊勢見山北西麓の平坦部。3区は遺跡北端部の凹地である。なお，3区では道路寄りの南端部から黒曜石や土師器が数点出土したのみで，東裏遺跡の北限であることが確認された（第82図）。

I 区の調査

1-A区 標高708~716mの斜面部で、調査区北側に位置する。基本層序は、I層=表土、III層=モヤ、IV層=黄褐色ロームである。

1-B区 標高685~687mの緩斜面部で、調査区南側に位置する。基本層序は、1-A区と同じであるが、I層とIII層の間にII層=柏原黒色火山灰（II 1~II 6に分層）が入る。

先土器時代 1-A区よりブロックが3箇所確認された。出土遺物は、横長剥片素材のナイフ形石器・ナイフ形石器・搔器・尖頭器・石刃・彫器・抉入削器・剥片である。出土層位は、III層下部及びIV層上部である。横長剥片素材の石器は、西へ約300m離れた信濃町教育委員会が調査をした東裏遺跡からも出土しており、横長剥片の石器製作技術があったものと思われる。

縄文時代 1-B区より焼土跡が検出され、それに伴って土器・石器が出土した（第84図）。焼土跡は、東西28m、南北7mの範囲に楕円を描くように分布している。また、その付近から焼石を含む礫が出土している。層位別には、II 5層で13基、II 6層で8基が確認され、他12基の層位は現在検討中である。

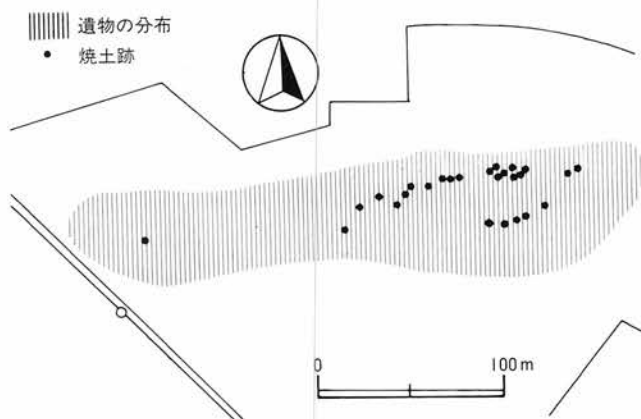
出土した土器の種類と割合は、冬期整理段階で表裏縄文を含む縄文55%、無文40%、押型文（格子目文・山形文・山形文のうち沢式・楕円文・キャタピラ文）4%である。他に撚糸文・羽状縄文・連続刺突文なども少数出土した。表裏縄文は、無文・押型文と比較してII 6層からの出土の割合が高い。

石器は、石鏃・搔器・打製石斧・磨製石斧・楔形石器？・特殊磨石・磨石・敲石・凹石・スタンプ形石器？・石皿・台石・石核・剥片・黒曜石のチップなどが出土した。

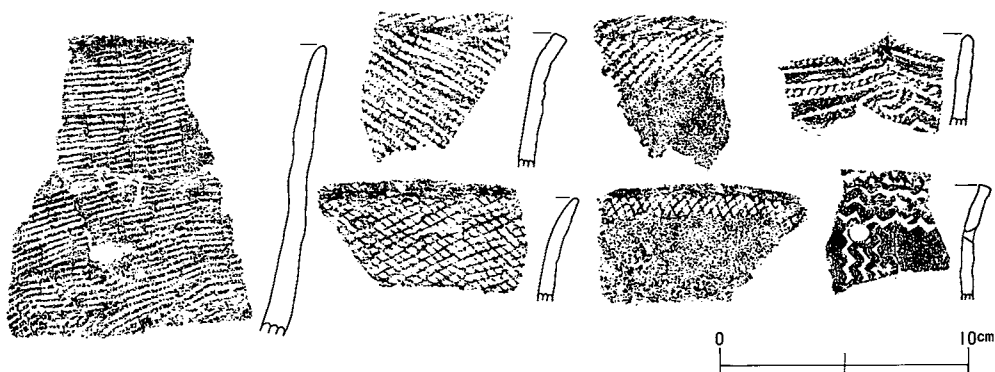
1-B区では、住居跡が確認されず、焼土・出土遺物の分布状況から、本遺跡でキャンプのような生活が営まれていたのではないかと推測される。今回出土した縄文時代早期の土器は、不明瞭であった中部高地の土器編年に貴重な研究資料になるとと思われる。



第83図 1-A区 全景



第84図 1-B区縄文時代の遺物・焼土跡分布図（1:400）



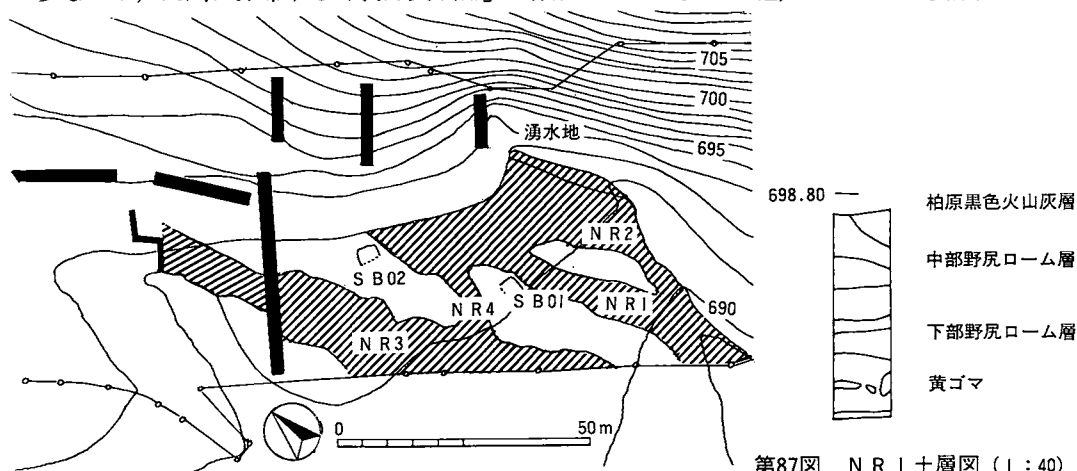
第85図 1-B区縄文時代土器拓影図(1:3)

平安時代 1-B区より3棟の住居跡がII層で検出された。3棟とも既に南側が流出しておりプランが明確でない。住居跡に伴って、土器器・灰釉陶器・四耳壺・鉄滓が出土した。

2区の調査

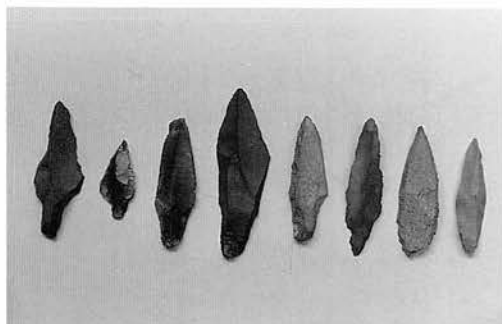
2区は伊勢見山の北西山裾で、南に緩やかに傾斜し標高は690~700mである。基本層序は東側の山麓部では1区と同じ土層が認められる。しかし、調査区の中央部から西側の平坦部は上部野尻ローム層が明確に確認できず、II層の下はすぐ中部野尻ローム層となる(第86・87図)。

先土器時代 中部野尻ローム層を切る自然流路(NR=Natural River)が4本あり、流路底部の砂礫層で約5,500点の石器類が流れ込んだ状態で出土した。いずれの流路も、北東から南西にかけて流れていたとみられる。中央のNR1は、幅約5m、深さは約30cmで東側の縁には、人頭大の礫群が流路に崩れかかる状態で散在していた。この流路からは270点ほどの石器類が出土しているが、ノッチングによる挟りが著しい基部調整をもつ尖頭器が2点出土した。石材は珪質頁岩と黒曜石である。珪質頁岩製は、長さ7.5cm、最大幅2.5cm、基部の幅は1cmである。黒曜石製は、長さ4cm、最大幅2cm、基部の幅は7mmである。両者とも先端部の加工は少ないが、九州に分布する「剥片尖頭器」に類似している。その他、NR3からも前者ほどで



第86図 ②区南部全体図(1:1,600)

第87図 NR1土層図(1:40)



第88図 「剥片尖頭器」類



第89図 N R 3 遺物出土状況

はないが、同じ系統と思われる石器が数点出土した（第89図）。

NR 2 は調査区の東部伊勢見山山麓寄りにあり、握り拳大の礫が大量に分布している。この礫に混じって局部磨製石斧・神子柴型石斧各2点を含む石器類が500点ほど出土した。石材はチャートが多く、礫の下では遺物はほとんどみられない。

NR 3 は、4本の流路中最大で、幅約16m、深さは1mである。流路の南端では、砂質層から握り拳大の礫に混じって石器類が出土し、PEAT質の粘土層の北端へゆくほど散発的な出土となり、流路自体が途切れてしまう。石器類は4000点ほど出土したが、エンドスクレイパーが70点、石刃が80点ある。石材は、両者とも安山岩が7割を占めている（第89図）。

NR 4 はNR 2 からNR 3 へ流れ込む、小規模な流路である。石器類500点が出土した。

4本の流路からは、大量の石器類が出土し、器種もバラエティーに富んでいる。しかし、いずれも流れ込みによる二次的な堆積であり、層位的にとらえることが困難である。時代もいくつかに分けられると思われるが、今後、流路・器種・石材別の検討が必要であろう。なお、流路の形成は、NR 1・2 は大きな礫を伴い、かなり底部まで平安時代の遺物を含んでいる。同様の礫層を伊勢見山の断面で確認しており、湧水点を中心とした小規模な流路の変更や崩壊を繰り返す中で、石器が混入したものと思われる。

縄文時代 NR 3 の中央砂礫層の上面で、早期の絡条体圧痕文土器が投げ捨てられたような状態で出土した。すぐ脇から石皿も検出されている。この土器は胴部を若干欠くものの、ほぼ完形である。これまで、県内で出土した同土器の完形品としては、丸山遺跡（上水内郡牟礼村）例ほか数例目になると思われ、早期の編年研究に貴重な資料となろう。また、2区北端のIII-K区でも絡条体圧痕文土器片が出土し、黒曜石のチップが多数伴出した。遺構は確認されなかったが、同時期の石器製作跡ではないかと推定される。

平安時代 自然流路にはさまれた平坦部から、住居跡が2棟検出された。いずれも西側が攪乱されプランは不明である。1号住居跡のピットからは、完形の坏が2個重なった状態で出土した。2区の北部IV-D区からは、野鍛冶跡とみられる遺構が検出された。人頭大の石が数個立てられ、いずれも赤く焼けていた。周囲には焼土や炭化物が広がり、鉄滓や羽口がまとまって出土した。焼土や炭化物を中心に、ピット10数個が円を描くように等間隔に配されている。この野鍛冶跡の南側からは土壌がいくつか検出され、鍛冶施設の一部と推定される。

6 ^{かんのき}貫ノ木遺跡

所在地：長野県信濃町大字野尻字貫ノ木1497ほか

調査担当者：鶴田典昭 山本 浩

調査期間：平成5年6月21日～11月19日

白田広之 谷 和隆

調査面積：15,000㎡

前田利彦

遺跡の立地：丘陵山腹の緩斜面部

時代と時期：先土器時代，縄文時代早期・前期

遺跡の特徴：先土器時代のブロック群

主な遺構

時期	遺構	礫群	土坑	炭集中
先土器		5		11
不明			6	

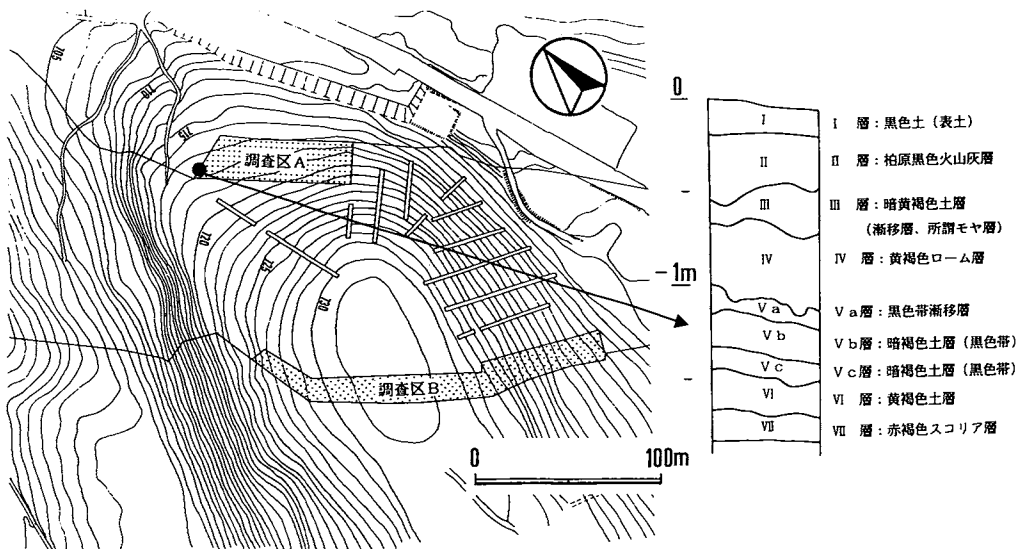
主な出土遺物

土器：縄文時代早期・前期土器

石器：石鏃・ナイフ形石器・台形様石器・彫器・削器・搔器・槍先形尖頭器・石刃・局部磨製石斧・敲石・砥石・黒曜石原石・石核・剥片

貫ノ木遺跡は従来A・B・Cの3地点で調査が行われている。今回新たにB地点の南側にのびる丘陵頂上の平坦部で遺物分布地点が確認された。調査区Aは、1985・88年に野尻湖調査団によって行われた調査地区より南方に260m、標高差で15m上がった北緩斜面に位置し、本調査を行った。調査区Bは確認調査のみである。遺物は、急斜面部には認められなかった。

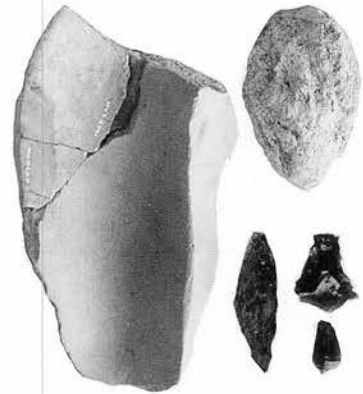
調査区A 基本層序は、B地点の1985・1988年の野尻湖調査団調査地区のものと同じであるが、層厚がそれに比べ厚い。旧石器時代の遺物はIII～V層にかけて出土する。III層は黒色土と黄褐色ローム層との漸移層、IV層は黄褐色ローム層、Va層は黒色帯（Vb層）への漸移層、Vb層とVc層とが黒色帯で、特に色調の暗い部分をVb層、やや明るい部分をVc層とした。ブロックの認定が不十分であるため明言は避けたいが、III層からIV層にかけて出土する一群、



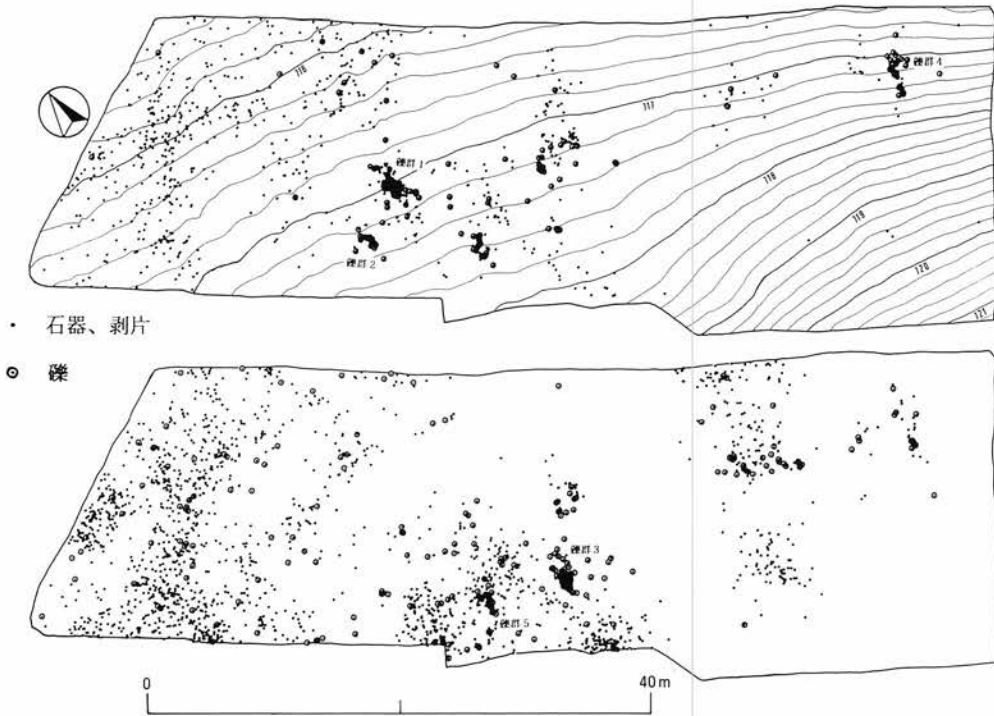
第90図 貫ノ木遺跡調査区周辺地形図（1：4,000）及び基本土層（1：40）

IV層中部からV a層にかけて出土する一群、IV層下部からV b層にかけて出土する一群とに分かれると予想される。調査区Aから出土した石器・剥片の総点数は2,575点。うちナイフ形石器4・台形様石器5・彫器3・石刃3・槍先形尖頭器3・削器および搔器5・敲石4・磨製石斧2・砥石2点が出土している。また剥片には使用されたとと思われる痕跡を残すものがある。礫群は5カ所確認された。出土層位から、IV層下部に検出された礫群1・2・4とIV層下面からV b層上面にかけて検出された礫群3・5との二つのグループに分けられる。礫は大きさが3~20cmで焼けているものが多い。また礫群の近くには粒状炭化物の広がりが見られ、特に集中する層位は礫群の層位と一致する。ほかにII~III層にかけて、遺構は認められないが縄文時代の押型文土器・表裏縄文土器・無文土器及び石鏃が出土している。

調査区B 試掘を行ったのみであるが、多数の剥片、石核、石器、礫が出土した。調査区Aに比べ層は薄い、層位的にも幾つかの時期に分離されそうである。試掘の結果から、遺物は山頂平坦部のかなり広範囲に分布すると予想される。次年度調査に期待がもてる。



第91図 調査区A (IV・V層) 出土の石器 (1:4)



第92図 遺物分布図 (1:600) (上:IV層,下:V層)

県道小布施村山停車場線関連

7 飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡

所在地：上高井郡小布施町大字飯田字古屋敷480ほか

調査担当者：渡辺敏泰

調査期間：平成5年11月1日～11月19日

林 正則

調査面積：飯田古屋敷遺跡420㎡，玄照寺跡690㎡（合計1,110㎡）

遺跡の立地：松川扇状地の末端部 時代と時期：中世以降

遺跡の特徴：中世およびそれ以降の集落跡

主な検出遺構：

時期	遺構	集石墓	土坑	柱穴	溝	自然流路
中世～近世		1	10	124	5	3

主な出土品：かわらけ，内耳土器，珠洲焼，中近世陶磁器，人形，羽口，石臼，五輪塔 ほか

昨年度の調査区の東側，現用水路を挟む長さ約170m，幅6m前後の細長い範囲を全面表土剥ぎし遺構の確認を行った。両遺跡から3基の自然流路が検出されたが，松川の支流と考えられる玄照寺跡の流路からは五輪塔と15世紀頃の内耳土器が多出した。同区には昨年度検出されたものに続き方向性のある2本の溝が検出されたが，南北方向の溝は2時期にわたっており，底部から中世の珠洲焼の播鉢が出土した。その近くの集石墓の土塋部は2.5m×0.6mを測り，周囲の区画は一辺約4mの方形を呈す。その外側の幅1m前後の周溝の覆土中から近世の陶器が出土した。飯田古屋敷側も含めたこの付近には覆土から同時期と考えられる土坑が複数あり，一帯は墓域であった可能性がある。なお両遺跡からは多数の柱穴が検出されたが掘立柱として並ぶものは認められなかった。

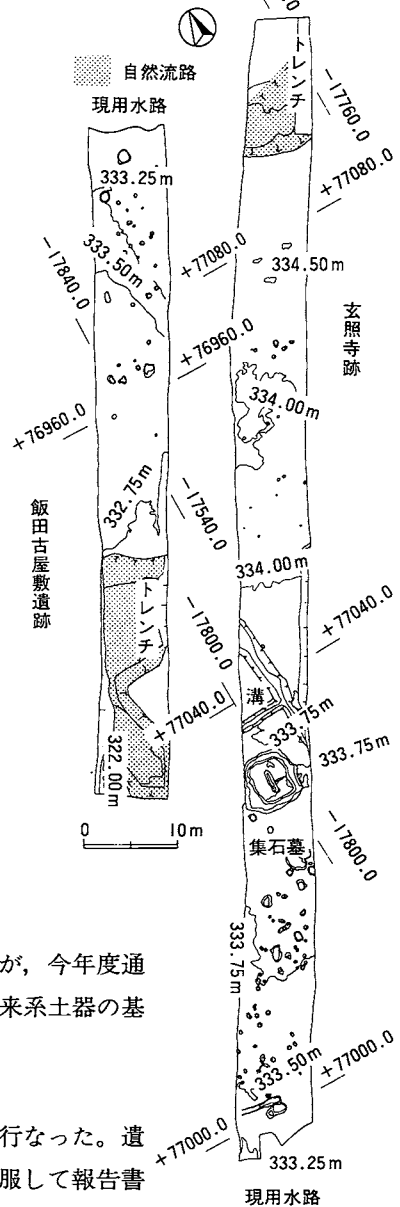
整理作業・報告書刊行

ア 七瀬遺跡 担当 赤塩 仁

平成3年度の調査以後，断続的に整理作業を行ってきたが，今年度通年で整理作業を行い，報告書を刊行した。弥生時代末の外来系土器の基準資料となろう。

イ 栗林遺跡 担当 中島庄一・斎藤久美

平成3・4年度調査。4年度後半から通年で整理作業を行なった。遺物・遺構量に比べ整理期間がきわめて短いという困難を克服して報告書を刊行した。縄文時代後期・弥生時代中期の遺構・遺物に新知見を加えている。



第93図 遺構配置図 (1:800)

上信越自動車道関連 試掘調査

(8 牛出遺跡 9 針ノ木遺跡 10 東裏遺跡 11 貫ノ木遺跡 12 星光山荘遺跡)

遺 跡 名	所在地 調査期間 対象面積・試掘面積 遺跡の立地 主な出土遺物	調査概況 (調査方法：すべて重機によるトレンチ調査で、遺構・遺物の存否・内容を確認。必要に応じ、一部について面的検出を行った。)
牛 出	中野市大字牛出字北原191・他 5.10.6～10.8 19,250㎡・1,700㎡ 千曲川の自然堤防・後背地 縄文土器・石器, 土師器	自然堤防上で、平安(−60cm)・古墳(−90cm)・縄文(−160cm)の3面で遺物を確認。後背地は圃場整備により大半が削平を受けていたが、一部でピット群と土師器を確認した。その結果、後背地では調査対象区域を縮小、自然堤防では拡大することが必要と判断された。
針ノ木	信濃町大字富濃字針ノ木4070 5.8.27～9.24 11,950㎡・1,200㎡ 丘陵の東向き緩斜面 なし	調査範囲では遺構・遺物を確認できなかったが、周知範囲のほぼ半分が今回調査の対象からはずれており、周辺の環境から遺構・遺物が存在する可能性がある。
東 裏	信濃町大字柏原字東裏364・他 5.9.27～9.30 10,000㎡・1,000㎡ 丘陵裾から湧水点周辺の湿地 旧石器時代石器	今年度調査区の隣接地を調査し、同様の遺構・遺物が周知範囲内に広がることを確認した。(別項参照)
貫ノ木	信濃町大字野尻字西岡1226・他 5.9.10～9.12 16,000㎡・1,600㎡ 丘陵頂部および裾部 旧石器時代石器	今年度調査地の隣接地を調査し、同様の遺構・遺物が周知範囲内に広がり、さらに山頂部ほぼ全域に拡大することを確認した。(別項参照)
星光山荘	信濃町大字野尻字下山桑2611・他 5.9.17 800㎡・100㎡ 川に面した丘陵上の平坦部 なし	調査区内では遺構・遺物を確認できなかったが、隣接地での県教委による調査で遺物が確認されており、立地から隣接地も含めて調査が必要と判断された。

II 普及・公開活動の概要

1. 現地説明会・速報展・遺跡調査発表会

(1) 佐久調査事務所

ア 中原遺跡群（小諸市）

平成5年6月13日(日)に開催した。中原遺跡群は昨年度からの継続調査であったこともあり、特に地元御影地区の関心は高く228名もの見学者が訪れた。150軒を越す住居跡や和銅開珎、県下最古の発見例となる鉄鐸などの展示物に、熱心に見入る見学者の姿が印象的であった。また、今回は新たな試みとして現場プレハブにおいて、スライドの上映もおこなったが大変に好評であった。

イ 宮ノ反A遺跡群（小諸市）

古墳時代末から奈良時代にかけての豪族居館が、県下で初めて発見されたことで話題となった宮ノ反A遺跡群では、年末も押し迫り、調査も大詰めを迎える時期にも重なり、準備には十分な時間が取れない状況ではあったが、平成5年12月18日(土)に開催することができた。当日は晴天ではあったが寒さが一段と厳しく、時折暖をとりながらの説明会であったものの、101人の熱心な見学者があった。普段から見慣れている水田の下に、豪族の居館が眠っていたことに、見学者はみな驚きを隠せない様子であった。

ウ 郷土遺跡（小諸市）

郷土遺跡では正式な形での現地説明会は行わなかったが、平成5年4月26日(月)には地元の野岸小学校6年生106人が授業の一環として、また平成5年7月31日(土)には小諸市松井地区の育成会21人(親子同伴)が、それぞれ見学に訪れた。「トイレはどこにあったのか」、「家族は何人だったのか」などさまざまな質問が飛び交っていた。また「縄文時代にも不良はいたのか」という児童の質問もあった。考古学が「人間のたどってきた道をふりかえり、そこに多くのものを学び、今後の方向の参考にする」ことを目指すものであるならば、これは真摯に受けとめるべき質問であるのかもしれない。その意味においても、学校教育への普及公開活動は大いに進めていく必要があるのではなかろうか。

エ 出土品展

佐久調査事務所では県教育委員会との共催で、平成6年2月19日(土)～27日(日)までの実質8日間、県佐久創造館にて「遺跡からのメッセージ」と題して行なった。佐久調査事務所としては、平成元年以来5年ぶりの出土



佐久創造館における
「遺跡からのメッセージ」展スナップ

品展であった。12月いっぱいまで現場作業が続いたため、準備期間は決して十分なものではなかったが、閉所を来年度に控えてこれが最後の出土品展ともなることもあり、職員、整理作業員一丸となって準備にあたった。展示は遺跡ごとではなく、「浅間山麓の縄文遺跡」・「佐久平の古代遺跡」・「遺跡にのこされた戦国時代」という3つのテーマにわけて行なった。5年ぶりということや、以前のように創造館との同時展示発表ではなく単独開催であることなど、入場者数には若干の不安もあったが、2,487名もの見学者を数え、盛況のうちに終了することができた。土日のみならず平日でも100名を超える入場者数をみる日もあり、その関心の深さを実感した。今回は土器の型式名などの専門用語は極力避け、その時代の雰囲気を感じてもらうことを目指したが、こうしたテーマ展示はおおむね好評だったと思われる。また最後の出土品展ということもあり、発掘調査の手順や今までに調査した遺跡の空撮写真、佐久調査事務所の歩みの紹介パネルなども展示したが、なかでも特別に設置した、土器片に自由にさわることができる体験コーナーでは、思い思いに土器を手にとり親子で談笑しあう姿も多く見ることができた。このような体験コーナーは盗難対策も考慮しなければならないので、その設置には難しい問題もあるが、今後も試みる価値は十分にあると思われる。

また会場が佐久市駒場公園内ということもあってか、見学者には家族連れや若いカップルなどの姿も多く目についた。このような年齢層の姿はこれまでの現地説明会等にはあまりみられなかったことであり、そうした点においても大きな意義があったと思われる。

(2) 上田調査事務所

ア 陣馬塚古墳 (上田市住吉)

平成5年6月20日(日)の午前・午後2回現地説明会が実施された。当初より関心が高かったこともあり普段から発掘調査を見学される方が多くおられたが、現地説明会当日も約350名の見学者が訪れ、熱心に調査研究員の説明に耳を傾けていた。6月24日(木)には上田ケーブルテレビ、有線放送の取材があり、25日(金)には地元の神科小学校より200人余の見学もあった。



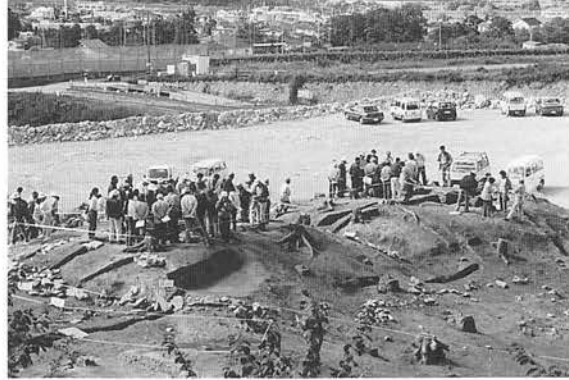
陣馬塚古墳現地説明会

イ 山の越遺跡 (小県郡東部町祢津)

平成5年7月25日(日)の午前・午後2回好天のなか現地説明会が実施された。見学者は地元中心に約120人が来られ、中世の石組みのある竪穴住居跡や火葬墓等に関心が集まった。現場プレハブで出土品の展示説明も行われたが、模造紙にかなり大きな字で解説、年表、簡単な図や絵を掲示したのが大変好評であり、今後も充実したいものである。また現地説明会以外7月14日(水)にも東部町教育長、埋蔵文化財担当者をはじめ35名の方が、見学に来られた。

ウ 東平古墳 (埴科郡坂城町中の条)

平成5年10月24日(日)秋晴れの中現地説明会が行われた。午前・午後合わせて115人の見学者があった。発掘調査が進み、一般の人にも古墳の形(円墳・方墳)や主体部の状況が分かりやすく好評であった。また地元や研究者の関心は少なくなく、この日の他にも10月21日(木)には長野市立博物館の見学会の方々や多くの研究者が視察に訪れられた。



東平古墳現地説明会

エ 桜畑遺跡(小県郡東部町祢津)

平成5年11月3日(日)文化の日に現地説明会が行われた。見学者は午前・午後通して92人であった。山の越遺跡同様に分かりやすい揭示物は好評であった。地元の人々が中心であったためかほとんど午前中に見学者が偏っており、開催の時間等も今後改善する余地がある。

オ 平成5年度発掘調査速報展

平成6年2月24日(木)から3月1日(火)の6日間、上田市立信濃国分寺資料館特別展示室にて行われた。東部町・上田市・坂城町及び古墳と大きく4箇所に展示が大別されて、縄文・弥生・古墳・古代・中世の遺物と遺跡を紹介する写真パネルが展示された。また、2月27日(日)にはスライドを使用した遺跡説明会が講義室で行われた。

(3) 長野調査事務所

ア 大穴遺跡(更埴市森)

平成5年5月28日(日)、屋代遺跡群と同日に時間をずらして、午前11時から12時、午後2時半から3時半の1日2回を全体説明、その他の時間を自由見学として、調査中の古墳についての現地説明会を行った。駐車場が離れていたり、終末期古墳で出土遺物も比較的地味だったにも関わらず、天候に恵まれたこと、屋代遺跡群との相乗効果、近接の更埴条里遺跡での銅印出土の新聞報道などから計171名と多くの方々の見学をいただき、見学者を急遽2班に分けるほどだった。ただ、銅印については、当日の係員に周知されていなかったために質問されて戸惑う場面も見られた。

公開された古墳は開墾によって上部が壊され基底部分のみが残るものだったが、玄室に自ら遺体代わりに入って見せるなどの熱心な説明で、古墳の構造をよく分かっていただけたようだった。

イ 屋代遺跡(更埴市雨宮)

平成5年5月28日(日)、大穴遺跡と同日に時間をずらして、午前9時半から10時半、午後1時から2時の1日2回を全



屋代遺跡現地説明会

体説明、その他の時間を自由見学として、縄文時代中期後葉の集落を調査中の⑤b区で現地説明会を行った。沖積地の地表下約5mで見つかった縄文時代中期の集落ということで関心呼び、低湿なこともあって心配された天気の影響もなく、県内はもとより遠く茨城・群馬・埼玉・東京・山梨の各都県からの方も含む計304名の方々に見学していただいた。

公開された⑤b区は比較的狭い範囲に竪穴住居跡20軒弱の他、野外埋甕・配石遺構・土坑・焼土跡などが密集していて、順路を広くとれないところに多人数が押し掛けたことから一時はかなりの混雑で、見学者を何班にも分けて調査区外で待ってもらわなければならないほどだった。

用意された資料は、B4版4枚もの図や漫画を多用した分かり易いもので、待っている間によく読まれていた。また、テントで土器をはじめとする出土遺物の展示もあり、石棒などに興味が集まっていた。

ウ 三才遺跡（長野市三才）

平成5年10月29日（金）の午前10時半から12時まで、調査中の中近世の遺構についての地元説明会を行った。調査区・駐車場が狭いため、地元を対象に平日に行ったのにも関わらず、県埋蔵文化財センターが長野市北部で開く初の説明会であることもあって、41名の方々に見学していただいた。

エ 篠ノ井遺跡群（長野市塩崎）

平成5年11月4・5日（木・金）の両日、午前10時半から12時まで弥生時代の円形周溝墓群と平安時代の集落跡についての地元説明会を行った。平日に行ったにも関わらず、新聞報道が続いたために一般の関心が高く、4日60名、5日55名と計115名の方々の見学をいただいた。

オ 浅川扇状地遺跡群E1区（長野市稲田）

平成5年11月8・9日（月・火）の両日、午前10時半から12時まで調査中の平安時代を中心とする集落跡についての地元説明会を行った。平日で、肌寒い天候であったにも関わらず、地元の方の関心は高く、計37名の方々に見学していただいた。

本年度は、上信越道関係の更埴条里遺跡が、昨年と同じ平安時代の面での現地説明会を見合わせて下層に期待したら裏切られ、新幹線関係の各遺跡はいずれも調査区・駐車場とも狭く、小規模な地元説明会にならざるをえなかったことなど課題を残した形となったが、この経験を生かして、来年度以降も一人でも多くの方に関心を持っていただけるよう現地説明会を開いていきたい。

カ 平成5年度調査速報展

平成6年2月5日（土）から13日（日）の実質7日間、長野市立博物館特別展示室にて行われた。各調査班の協力を得て、上信越道関係の大穴遺跡・更埴条里遺跡



浅川扇状地遺跡群E1区地元説明会

・屋代遺跡群・窪河原遺跡，北陸新幹線関係の屋代遺跡群・篠ノ井遺跡群・篠ノ井～川中島間遺跡・浅川扇状地遺跡群・三才遺跡と，本年度調査遺跡のうち出展のなかった上信越道関係の大境遺跡と北陸新幹線関係の更埴条里遺跡を除く計9遺跡より500点近くにのぼる資料が出展された。最終日，記録的な大雪になったものの速報展の報道が多かった前半は天候に恵まれ，1,500名余りの来館者となり，盛況に終わった。

2月6日(日)には4遺跡の各担当者による遺跡調査報告会を行ったが，多くの方が来られ，立ち見の人もある程だった。

今年は，各発掘現場の現地説明会を中心としたビデオが10分間とコンパクトにまとめられ，視聴席を工夫したこともあって楽に見ていただけたうえに，ビデオの中のBGMが会場全体のBGMにもなって雰囲気盛り上げていた。また，予算の都合でパンフレットを作成することができなかったが，代わりに作成した遺跡解説シートが好評で，ほとんどの人が読んでいた。来年度以降も一人でも多くの方々に関心を持っていただけるように努力していきたい。

(4) 中野調査事務所

ア 牛出古窯跡（中野市牛出）

平成5年6月12日午前10時，第一次の調査が終了に近づいたなかで，説明会が行われた。主な内容は，奈良時代の窯跡と古墳時代初期の竪穴住居跡群，出土した須恵器・土師器である。とくに文字を線刻した須恵器や管玉などが関心を集めていた。参加者90名。

イ セツ栗遺跡・日向林B遺跡（信濃町水穴）

平成5年6月12日，牛出古窯跡の説明会と同日の午後，並行して調査中の隣接2遺跡の説明会が行われた。セツ栗遺跡



平成5年度調査速報展



平成5年度調査速報展



東裏遺跡現地説明会

は調査終了に近く、縄文時代早期・前期の遺構・遺物、平安時代の住居跡などを中心に説明した。日向林B遺跡は調査開始間もなかったが、旧石器時代の石斧などの遺物が注目された。信濃町では当センターが行う初の説明会であり、遠方からの参加者も多く熱心な質問もあった。参加者85名。



遺跡調査発表会遺物展示

ウ 日向林B遺跡・東裏遺跡・貫ノ木遺跡（信濃町水穴）

平成5年10月9日、3遺跡の説明会が行われた。この3遺跡は近在し、いずれも旧石器時代の遺跡である。調査もほぼ同様の進捗状況であり、合同で説明会が行われた。東裏遺跡の現場事務所に3遺跡の出土品を集めて展示し、各遺跡では時間をずらして現地での説明会が行われた。

日向林B遺跡の前回の説明会は調査途上であったが、今回は終了直後であり、出土品のうち主要なものが展示された。とくに新聞紙上などで大きく報道されていた石斧が関心を集めた。また、東裏遺跡や貫ノ木遺跡と合せて石器も豊富に展示された。野尻湖発掘の地元だけあって、熱心な質問が続いた。参加者は日向林B遺跡40名、東裏遺跡125名、貫ノ木遺跡54名。

エ 遺跡調査発表会

平成6年3月27日（日）、中野市中央公民館において平成5年度中野調査事務所遺跡調査発表会を開催した。平成4年度に続き第2回目である。信濃町・中野市の調査遺跡について各担当者がスライドをまじえて調査結果を発表し、あわせて主要出土品を展示・解説した。現地説明会以後の調査・整理によってあきらかとなった成果も含めて発表し、牛出窯跡の文字資料須恵器や信濃町各遺跡の旧石器時代資料が関心をよんでいた。また、報告書が刊行された栗林遺跡・七瀬遺跡の復元を終えた弥生土器なども展示した。参加者163名。

2. 指導・研究会・学習会

期 日	講 師	指導内容ほか
平成5. 4. 12	軽井沢町教育委員会 土屋長久学芸員	土合1号古墳の調査状況について（佐久）
5. 4. 19	横浜市埋文センター 石井寛氏ほか	中原遺跡出土遺物について（上田）
5. 4. 22	長野県考古学会 森嶋稔, 神村透, 宮坂光昭氏	屋代遺跡群の縄文時代集落の調査について（長野）
5. 4. 23	文化庁 岡村道雄主任文化財調査官	屋代遺跡群の縄文時代集落の調査について（長野）
5. 5. 17	独協医科大学 茂原信生助教授	屋代遺跡群出土人骨の調査方法について（長野）
5. 5. 26	森嶋稔理事	観音平経塚出土資料について（上田）
5. 6. 17	明治大学 戸沢充則教授	信濃町内旧石器時代遺跡の調査について（中野）
5. 6. 28	茨城大学 茂木雅博教授	陣馬塚古墳の調査について（上田）

期 日	講 師	指導内容ほか
平成5. 6. 28	古環境研究所 早田勉氏	火山灰と遺跡 (佐久)
5. 7. 26	上田市立博物館 川上元館長	上田市内遺跡の調査について (上田)
5. 7. 26	立命館大学 高橋学助教授	屋代遺跡群等の地形形成課程 (長野)
5. 7. 29	同志社大学 松藤和人講師	東裏遺跡の西日本的な石器について (中野)
5. 8. 3	文化庁 岡村道雄主任文化財調査官	旧石器時代遺跡の調査について (中野・センター)
5. 8. 5	大阪市立大学 辻誠一郎講師	屋代遺跡群周辺の環境復元について (長野)
5. 8. 26	神村透理事	信濃町出土の縄文時代早期土器について (中野)
5. 8. 29	神村透理事	東部町内の縄文時代遺跡の調査 (上田)
5. 9. 16	明治大学 安森政雄教授	信濃町内旧石器時代遺跡の調査について (中野)
5. 9. 23	国学院大学 小林達雄教授	信濃町内旧石器時代遺跡の調査について (中野)
5. 9. 23	興水太伸氏	金属器の保存処理について (佐久)
5.10. 1	岡山大学 近藤義郎名誉教授	東平古墳群の調査について (上田)
5.10. 28	奈良国立文化財研究所 黒崎直室長	石川条里遺跡出土の木器について (長野)
5.11. 17	古環境研究所 早田勉氏	県遺跡の火山灰について (佐久)
5.11. 22	信州大学 酒井潤一教授	屋代遺跡周辺の地質について (長野)
5.12. 22	国立歴史民俗博物館 西本豊弘助教授	動物遺体からみた縄文時代の古墳について (長野)
6. 1. 17	東海大学 織笠昭助教授	信濃町内旧石器時代遺物の調査について (中野)
6. 1. 25	文化庁 松村恵司文化財調査官	篠ノ井・松原遺跡出土の土器・集落の調査について (長野)
6. 2. 4	東京都埋文センター 佐藤寛之調査研究員	信濃町内出土の台形様石器について (中野)
6. 2. 4	埼玉県立博物館 栗島義明学芸員	日向林B遺跡の資料について (中野)
6. 2. 7	岩宿文化資料館 小菅将夫学芸員	日向林B遺跡の資料について (中野)
6. 2. 24	信州大学 酒井潤一教授	野尻湖周辺の第4紀層について (中野)
6. 2. 24	新潟大学 小野昭教授	野尻湖の発掘調査の成果について (中野)
6. 2. 24	野尻湖博物館 中村由克学芸員	野尻湖の発掘調査の成果について (中野)
6. 3. 7	富山県教育委員会 松島義信氏	北陸の旧石器文化について (中野)
6. 3. 7	福島県立博物館 藤原妃敏氏	東北の旧石器文化について (中野)

3. 刊行物

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

- 15 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査—東筑摩郡坂北村・麻績村内—
- 16 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査—更埴市内その1・長野市内その1
- 17 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査—長野市内その2
- 18 「主要地方道長野大町線埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」—北安曇郡美麻村
- 19 「県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書」—中野市内

「長野県埋蔵文化財センター年報10」(1993年度)

「長野県埋蔵文化財ニュース」No. 38・39

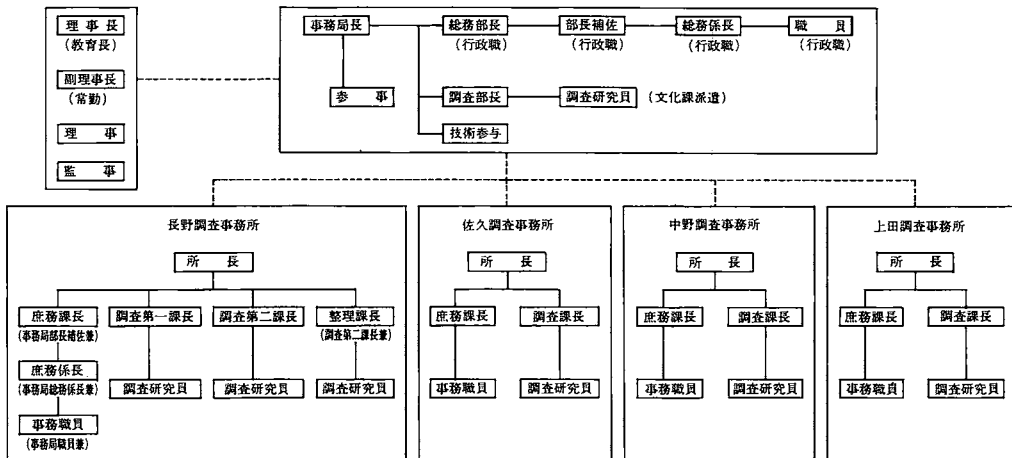
III 機構・事業の概要

1. 機構

(1) 組織

【理事会】	理事長(県教育長) 副理事長(常勤) 理事(県企画局長) 理事(県高速道局長)	理事(県北陸新幹線局長) 理事(県教委文化課長) 理事(県考古学会長) 理事(市町村長代表)	理事(市町村教育長代表) 理事(考古学研究者代表) 監事(県会計局会計課長) 監事(県教委総務課長)
--------------	--	---	---

(財)長野県埋蔵文化財センター組織図



(2) 事務所所在地

本 部 長野市大字南長野字幅下692-2 長野県教育委員会事務局文化課内
 事 務 局 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4
 (財)長野埋蔵文化財センター長野調査事務所内
 長野調査事務所 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4
 中野調査事務所 中野市大字立ヶ原字西原55-1
 佐久調査事務所 佐久市大字安原字蛇塚1367
 上田調査事務所 上田市大字下塩尻936-3

2. 事業

(1) 理事会および会計監査

理事会

- 第26回理事会 平成5年5月28日 会場 長野市 ホテル信濃路
 - 第1号議案 平成4年度事業報告書について
 - 第2号議案 平成4年度決算報告書について
- 第27回理事会 平成6年3月28日 会場 長野市 山王共済会館
 - 第1号議案 平成6年度事業計画書(案)について
 - 第2号議案 平成6年度収支予算書(案)について
 - 第3号議案 平成5年度収支補正予算書(案)について
 - 第4号議案 監事の委嘱について

会計監査

平成5年5月26日実施 平成4年度事業報告書および収支決算書について

(2) 調査事業

長野自動車道および上信越自動車道にかかる埋蔵文化財発掘調査—長野県教育委員会および佐久市長野県須坂建設事務所からの委託、志賀中野有料道路にかかる発掘調査および県道大町バイパスにかかる発掘調査—長野県中野建設事務所、長野県道路公社および長野県大町建設事務所からの委託他。北陸新幹線にかかる埋蔵文化財発掘調査—長野県教育委員会および長野市からの委託。

ア 調査遺跡および面積 (()内は側道)

- 上信越自動車道関係 佐久市・小諸市・東部町・上田市・坂城町・更埴市・長野市・小布施町・中野市・信濃町各地域内計31遺跡, 345,000㎡ (1,355㎡)
- 北陸新幹線関係 佐久市・軽井沢町・御代田町・上田市・坂城町・更埴市・長野市内計18遺跡, 56,785㎡ (1,365㎡)

イ 整理事業

- 長野自動車道関係 麻績村・坂北村・長野市および更埴市の14遺跡の整理事業
- 上信越自動車道関係 佐久市・小諸市・東部町・坂城町・更埴市・長野市・小布施町・中野市・信濃町内計30遺跡の整理事業
- 北陸新幹線関係 18遺跡の整理作業
- 志賀中野有料道路関係 中野市内2遺跡
- 県道大町バイパス関係 美麻村内1遺跡

(3) 事業費

長野自動車道関係	152,338千円
上信越自動車道関係	2,368,717千円
北陸新幹線関係	400,919千円
県道関係	106,975千円

(4) 普及活動 (85ページ参照)

(5) 職員研修

- ア 講師招へい及び来所による指導・講習会等 (91ページ参照)

イ 奈良国立文化財研究所関係

期 日	日 数	課 程	参 加 者
平成5. 9. 16~10. 15	30	遺跡測量課程	柳 沢 亮
10. 21~11. 4	15	寺院官衙遺跡調査課程	上 田 真
11. 24~12. 10	17	環境考古課程	谷 和 隆
平成6. 1. 18~1. 26	9	人骨調査課程	贄 田 明
2. 3~2. 8	6	鑄造遺跡調査課程	青 木 一 男

ウ 海外研修

期 日	内 容	参加者
平成6. 2. 24~ 3. 6	<p>我国古代文化の源流となった中国の古代文化遺跡の研究</p> <p>① 遺跡・博物館等の見学 兵馬俑坑博物館・秦始皇帝陵・茲恩寺大雁塔・馬王堆漢墓・湖南省博物館・南京博物院・景德鎮・上海博物館</p> <p>② 歴史的環境の視察 西安市内・長沙市内・南京市内・上海市内の市街及び近郊</p> <p>③ 研究者等との懇談会 南京博物院他</p>	<p>百瀬長秀 田中正治郎 宇賀神誠司 野村一寿</p>

エ その他の学会関係研究会・研修会

期 日	内 容	参加者
5. 7. 10	シンポジウム律令国家の成立と東国(駿台史学会・明治大学)	西山克己
9. 4	第34回埋蔵文化財研究集会(奈良大学)	広田和穂
10. 10	シンポジウム「環状ブロック群」(岩宿資料館)	鶴田典昭
6. 1. 8	第35回埋蔵文化財研究集会(前橋市)	白田広之
6. 2. 5	第7回縄文セミナー(水上町)	谷和隆 若林卓 贄田明
※この他各種シンポジウム, 日本考古学協会, 学会, 大会等参加多数		

オ 県外博物館・埋文センター・遺跡等視察および資料調査

期 日	視 察 ・ 調 査 他	参加者
6. 3. 1	広島県立博物館ほか	大和龍一ほか
この他, 他県埋文センター・博物館・大学等研究施設・発掘調査現場の視察, また上記機関での資料調査などを行った。延べ50か所22名		

カ 全埋文協などへの参加

期 日	会 議 名	開催地	参 加 者
平成 5. 4. 23	全埋文協関東・中部ブロック会議	高山市	伊藤万寿男 峯村忠司
5. 6. 14～ 6. 15	全埋文協総会	盛岡市	神林幹雄 関孝一 羽生田博行 玉井昌二
5. 10. 28～ 10. 29	全埋文協関東・中部ブロック会議	小松市	伊藤万寿男 神林幹雄 青沼博之 百瀬長秀 堀川道子
5. 10. 21～ 10. 22	全埋文協研修会	京都市	岡田正彦 白田武正 高野幹郎 栗林高広
5. 9. 13～ 9. 14	関越自動車道関係四県連絡会議	浦和市	小林秀夫 下平正彦
5. 11. 18. 19	関東甲信越静埋文行政担当者会議	湯河原町	原 明 芳
5. 10. 28～ 10. 29	関東甲信越静埋文行政担当者共同研修協 議会	津南町	土屋 積 広瀬 昭 磯野 広子
5. 12. 15	群馬・長野埋蔵文化財連絡会議	山ノ内町	小林秀夫 白田武正 原 明 芳 広瀬 昭 広 関 孝 一 土 屋 積
6. 1. 20 ～21	全国埋文協コンピュータ委員会	静岡市	原 明 芳

キ 長野県教育センター・産業教育センター研修

期 日	分 野	講 座 名	参 加 者
教育センター（※企画研修・△公開講座）			
平成 5. 5. 18～19	一般	教育相談	山岡一英
8. 25～26	一般	教育相談	山岡一英
11. 11～12	一般	教育相談	山岡一英
5. 7. 13～14	一般	算数・数学 低学年の算数指導	甲田圭吾
5. 7. 28～30	一般	社 会 地域と教材開発	川崎保健
5. 8. 31～ 9. 1	一般	理 科 大地の生い立ちを探る（臨地）	山中 健

5. 7. 15	※	教職教養	哲学への道	林 正 則
5. 7. 15	※	保健・安全	学校におけるエイズ教育	西 村 政 和
5. 10. 1	※	評 価	個が生きる教育	松 岡 忠 一 郎
5. 10. 28	※	教職教養	どの子も生きる学校生活	月 原 隆 爾
5. 11. 5	※	教職教養	ジャーナリストの視点	山 崎 光 顕
5. 11. 5	※	教職教養	ジャーナリストの視点	奥 原 聡
6. 1. 11	※	教職教養	共生の時代を拓く	奥 原 聡
6. 1. 11	※	教職教養	共生の時代を拓く	山 崎 光 顕
5. 5. 13~14	生涯教育	生涯教育	開かれた学校A	松 岡 忠 一 郎
6. 1. 18~19	生涯教育	生涯教育	開かれた学校B	林 正 則
5. 9. 22	△		気象観測の仕方と天気予報	前 田 利 彦
5. 10. 28	△	同和教育	現地研修・被差別体験を聴く	五 十 嵐 敏 秀
産業教育センター				
平成5. 6. 14		情報処理	ワープロ入門	宮 下 裕 治
12. 13		情報処理	シミュレーション理科	松 岡 忠 一 郎

ク 姉妹校研修

調査事務所名	期 日	訪問学校名	研修内容	参加者
佐 久	平成5. 9. 17	佐久市立東中学校	授業参観・談話等	青沼博之
		佐久市立 平根小学校	授業参観・談話等	山崎光顕・飯田吉隆・ 寺島俊郎 近藤尚義
	11. 2	佐久市立東小学校	授業参観・談話等	五十嵐敏秀・飯田吉隆
	12. 4	岩村田小学校	授業参観・談話等	青沼博之・山崎光顕
上 田	平成6. 1. 21	上田市立塩尻小学校	授業参観・談話等	寺沢正俊他7名
	長 野	平成5. 11. 25	長野市立 篠ノ井西中学校	授業参観・談話等
6. 2. 16			長野市立 通明小学校	授業参観・談話等
6. 2. 28		篠ノ井高等学校	授業参観・談話等 (特別授業)	馬場信義・依田茂・白 沢勝彦 西嶋力・西山克己・白 居直之
中 野	平成5. 12. 21	中野西高等学校	授業参観・談話等	赤塩仁・酒井健次
	6. 1. 14	高丘小学校		酒井健次・山本浩・前 田利彦

ケ 県内市町村および関係機関への協力・指導等

期 日	市町村等	協 力 ・ 指 導 内 容 等
平成5. 6. 22	飯田市	中村中平遺跡の調査方法について他
平成5. 8. 27～12. 26	長野市	南宮遺跡の調査について
この他、9市、5町7村、その他機関の発掘調査、整理事業、保存処理、復元整備等協力・指導等実施		

コ 平成5年度市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会—県教委と共催

第1日(1月26日)

12:30 受 付

13:00 開会行事

主催者あいさつ

日程説明

13:20 事例報告 発掘調査報告書の作成 I

13:20-14:10 「松本市における発掘調査報告書作成の実情と課題」

松本市教育委員会

竹原 学氏

14:10-15:00 「ホーコクショ、シェイプアップ作戦」

御代田町教育委員会

堤 隆氏

休 憩

15:20-16:10 「『史跡森將軍塚古墳』について」

更埴市教育委員会

矢島宏雄氏

質 疑

16:40 第1日終了

17:15 懇親会

第2日(1月27日)

8:30 受 付

8:45 事例報告 発掘調査報告書の作成 II

8:45-9:35 「整理事業と発掘調査報告書の作成」

(協)長野県埋蔵文化財センター

原 明芳氏

質 疑

10:00 講 演

10:00-11:30 「発掘調査報告書をめぐる諸問題」

文化庁記念物課

松村恵司文化財調査官

11:45 閉会行事

主催者あいさつ

諸連絡

12:00 解 散

13:30 実 習

「発泡ウレタン等による遺物取り上げ」

於 働長野県埋蔵文化財センター



市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会
保存処理実習風景

平成 5 年度役員及び職員

理 事 会

理 事 長	宮崎 和順 (県教育長～10月15日)	佐藤善處 (県教育長10月16日～)
副 理 事 長	伊藤万寿雄	
理 事	花岡 勝明 (県企画局長)	
	北沢 文教 (県高速道局長)	
	宮島 和夫 (県北陸新幹線局長)	
	木船 智二 (県教委文化課長)	
	宮坂 博敏 (更埴市長)	
	森嶋 稔 (県考古学会長)	
	滝沢 忠雄 (長野市教育長)	
	神村 透 (考古学研究者)	
監 事	石井 俊雄 (県会計局会計課長～10月31日)	
	手塚 勝友 (県会計局会計課長11月1日～)	
	三浦太家男 (県教委総務課長)	

事 務 局

事 務 局 長	峯村 忠司	参 事	樋口 昇一
総 務 部 長	神林 幹生	調 査 部 長	小林 秀夫
技 術 参 与	佐藤 今雄	総務部長補佐	羽入田博行
総 務 係 長	磯野 道子		
職 員	堀川 正子 (主査) 栗林 高広 (主任) 下平 正彦 (主事)		
派 遣 職 員	大竹 憲昭		

調査事務所

	長野調査事務所	佐久調査事務所	中野調査事務所	上田調査事務所
所 長	岡田 正彦	青沼 博之	関 孝一	堀内規矩雄
庶 務 課 長	羽入田博行 (兼)	玉井 昌二	高野 幹郎	越 清登
庶 務 係 長	磯野 道子 (兼)			
事 務 職 員	主査 堀川 正子(兼) 主任 栗林 高広(兼) 下平 正彦(兼) 桑原衆三 原田和男	主任 古川英治	鈴木 仁	主事 石坂 裕 神田まさみ
調 査 課 長	百瀬 長秀 原 明芳(兼整理課長)	臼田 武正	土屋 積	広瀬 昭弘
調 査 研 究 員	山極 充 上田 真 太田 和夫	五十嵐敏秀	常長 虎徹	松岡忠一郎
	綿田 弘実 島田 正夫 田中正治郎	白鳥喜一郎	白田 広之	甲田 圭吾
	市川 隆之 青木 一男 伊藤 友久	飯田 吉隆	渡辺 敏泰	寺沢 政俊
	伊藤 克己 宮島 義和 町田 勝則	寺島 俊郎	久保田秀一郎	西村 政和
	上田 典男 河西 克造 宮下 裕治	近藤 尚義	林 正則	若林 卓
	澤谷 昌英 野村 一寿 出河 裕典	征矢野安政	岡村 秀雄	川崎 保
	依田 茂 清水 弘 渕井 英知	宇賀神誠司	鶴田 典昭	柳沢 亮
	月原 隆爾 徳永 哲秀 増村(西) 香子	田村 彬	酒井 健次	豊田 義幸
	大和 龍一 馬場 信義 水沢 教子	依田 謙一	赤塩 仁	井口 章
	西嶋 力 吉江 英夫 井口 慶久	藤原 直人	谷 和隆	
	広田 和穂 山中 健 寺内 隆夫	桜井 秀雄	前田 利彦	
	市川 桂子 吉沢 信幸 奥原 聡	木内 英一	山本 浩	
	寺内(田中) 貴美子 鳥羽 英継	山崎 光顕	中野市より	
	西山 克己 白居 直之 白沢 勝彦	山岡 一英	の派遣	
	贅田 明	上沼 由彦	中島 庄一 斉藤 久美	
調 査 員	山崎まゆみ	尾台 昇		

長野県埋蔵文化財センター年報10 1993

発行日 平成6年3月31日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963の4

TEL 0262-93-5926

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381 長野市西和田470

TEL 0262-43-2105